

朝来市

梶原遺跡

梅ヶ作遺跡

北山遺跡

大月北山古墳群

平成20(2008)年3月

兵庫県教育委員会

朝来市

梶原遺跡

梅ヶ作遺跡

北山遺跡

大月北山古墳群

平成20(2008)年3月

兵庫県教育委員会



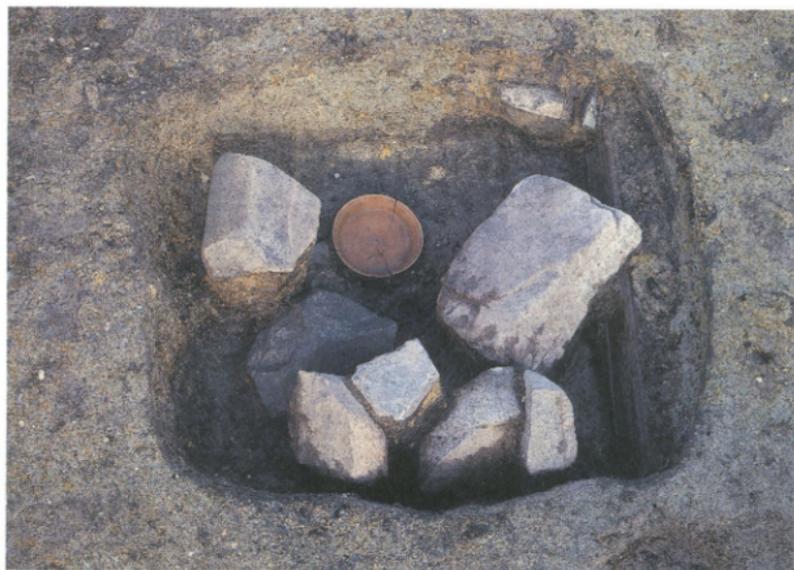
梶原遺跡 1区全景（南東から）



梶原遺跡 3区東半全景（西から）



梅ヶ作遺跡 調査区全景（東から）



梅ヶ作遺跡 SK01（南西から）

## 例 言

1. 本書は、朝来市山東町に所在する、梶原遺跡・梅ヶ作遺跡・北山遺跡・大月北山古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、一般国道483号北近畿豊岡自動車道建設事業に先立ち、建設省近畿地方建設局 畿岡工事事務所(現国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所)の依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査主体となって実施した。
3. 調査は平成10年に確認調査を行い、平成12年度に梶原遺跡(遺跡調査番号2000189)・梅ヶ作遺跡(2000188)・北山遺跡(2000190)、平成13年度に大月北山古墳群(調査時は大月北山遺跡)(2001196)の本発掘調査を実施した。
4. 図示した方位は全て座標北を示し、水準はT.P.を示す。国土座標系は第V系を使用しているが、座標値は平成14年4月1日施行の測量法改正以前の日本測地系を使用している。
5. 現地での写真撮影は、調査担当者が行った。遺物写真撮影は株式会社タニグチフォトに委託した。
6. 整理作業は、平成18・19年度に国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所からの依頼にもとづいて行った。
7. 出土品整理作業は、藤田 淳が中心となって実施し、大月北山古墳群については岸本一宏が分担した。また、本書の第6章第1・2・4節は平田博幸、第3節は岸本一宏、第7章第1節は加速器分析研究所、第2節は古環境研究所の執筆による。なお、本書の編集は、非常勤嘱託職員 池田悦子の補佐を得て、整理保存班 菱田淳子が行った。
8. 調査で出土した遺物ならびに写真は、兵庫県立考古博物館(兵庫県加古郡播磨町大中500)に保管している。また、図面については兵庫県立考古博物館魚住分館(明石市魚住町清水立合池の下630-1)で保管している。

## 凡 例

1. 本書で使用した遺構および遺物番号は、遺跡毎で呼称した。また、遺構略号は、SA→柱列（堀・柵跡）、SB→掘立柱建物跡、P→柱穴、SD→溝、SK→土壕、SR→流路、SX→墓・不明遺構としている。
2. 遺構等の土層色調名は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）によるものである。
3. 遺物番号は、石製品→S、木製品→W、金属器→M、玉類→Jを略号とし、土器類については、略号を付していない。
4. 土器類実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、陶器は断面10%網掛け、磁器の断面は30%網掛けにしている。

### 遺構番号対称表

#### 梶原遺跡

報告書	調査時
SB01	SB301
	P01 S309
	P02 S308
	P03 S307
	P04 S306
	P05 S310
	P06 S311
	P07 S312
	P08 S313
	P09 S314
SB02	P01 S31
	P02 S35
	P03 S26
SK01	S01
SK02	S04
SK03	S06
SK04	S07
SK05	S304
SD01	S02
SD02	S03
SD03	S301
SD04	S302
SD05	S303
SD06	無し
SD07	S305

#### 梅ヶ作遺跡

報告書	調査時
SB01	P01 S56
	P02 S48
	P03 S16
	P04 S10
	P05 S33
	P06 S78
	P07 S77
	P08 S76
	P09 S75
SB02	P01 S163
	P02 S164
	P03 S175
	P04 S172
SA01	P01 S104
	P02 S105
	P03 S106
	P04 S107
	P05 S108
SA02	P01 S185
	P02 S186
	P03 S190
	P04 S191
	P05 S196

報告書	調査時
SK01	S193
SK02	S89
SD01	S156
P101	S180
P102	S182
P103	S187
P104	S198
P105	S126
P106	S143
P107	S91
P108	S37
P109	S84
P110	S86

#### 北山遺跡

報告書	調査時
SK01	S1
SK02	S2
SD01	S3

#### 大月北山古墳群

報告書	調査時
大月北山1号墳	SX01
大月北山2号墳	SX02

## 本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯と経過	1
第2節	整理作業の経過	3
第2章	位置と環境	4
第1節	遺跡の位置	4
第2節	歴史的環境	4
第3章	梶原遺跡	7
第1節	概要	7
第2節	遺構	8
第3節	遺物	9
第4節	小結	13
第4章	梅ヶ作遺跡	14
第1節	概要	14
第2節	遺構	14
第3節	遺物	15
第4節	小結	18
第5章	北山遺跡	19
第1節	概要	19
第2節	遺構	19
第3節	遺物	20
第4節	小結	20
第6章	大月北山古墳群	21
第1節	概要	21
第2節	遺構	21
第3節	遺物	24
第4節	小結	25
第7章	自然科学的分析	31
第1節	放射性炭素年代測定	31
第2節	木製品の樹種同定	35

## 巻頭図版目次

巻頭図版1	梶原遺跡 1区全景(南東から)	梶原遺跡 3区東半全景(西から)
巻頭図版2	梅ヶ作遺跡 調査区全景(東から)	梅ヶ作遺跡 SK01(南西から)

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置	0
第2図	周辺の遺跡	5
第3図	校正曲線グラフと暦年校正値	34
第4図	梶原遺跡出土木製品切片写真1	37
第5図	梶原遺跡出土木製品切片写真2	38

## 表目次

第1表	梶原遺跡出土遺物計測表	27~29
第2表	梅ヶ作遺跡出土遺物計測表	29、30
第3表	梶原遺跡における樹種同定結果	38

## 図版目次

図版1	調査位置図	図版20	梅ヶ作遺跡 遺構配置図
図版2	確認調査トレンチ配置図	図版21	梅ヶ作遺跡 掘立柱建物・柱列
図版3	梶原遺跡 遺構配置図	図版22	梅ヶ作遺跡 土坑・柱穴
図版4	梶原遺跡 1区の遺構	図版23	梅ヶ作遺跡 出土遺物1(土器)
図版5	梶原遺跡 3区の遺構	図版24	梅ヶ作遺跡 出土遺物2(土器)
図版6	梶原遺跡 出土遺物1(土器)	図版25	梅ヶ作遺跡 出土遺物3(土器・金属器)
図版7	梶原遺跡 出土遺物2(土器)	図版26	北山遺跡 調査区全体図
図版8	梶原遺跡 出土遺物3(土器)	図版27	北山遺跡 遺構配置図・断面図
図版9	梶原遺跡 出土遺物4(土器)	図版28	大月北山古墳群 遺跡の位置
図版10	梶原遺跡 出土遺物5(土器)	図版29	大月北山古墳群 調査範囲
図版11	梶原遺跡 出土遺物6(土器)	図版30	大月北山古墳群 調査区全体図
図版12	梶原遺跡 出土遺物7(土器)	図版31	大月北山古墳群 1・2号墳
図版13	梶原遺跡 出土遺物8(土器・金属器)	図版32	大月北山古墳群 1号墳(SX01)埋葬施設
図版14	梶原遺跡 出土遺物9(石器)	図版33	大月北山古墳群 1号墳(SX01)石棺
図版15	梶原遺跡 出土遺物10(木製品)	図版34	大月北山古墳群 1号墳(SX01)石棺内部
図版16	梶原遺跡 出土遺物11(木製品)	図版35	大月北山古墳群 2号墳(SX02)木棺
図版17	梶原遺跡 出土遺物12(木製品)	図版36	大月北山古墳群 出土遺物1(金属器)
図版18	梶原遺跡 出土遺物13(木製品)	図版37	大月北山古墳群 出土遺物2(土)
図版19	梶原遺跡 出土遺物14(木製品)	図版38	大月北山古墳群 出土遺物3(玉)

## 写真図版目次

写真図版1	梶原遺跡・梅ヶ作遺跡 全景(南東から)	写真図版25	梅ヶ作遺跡 調査区北半(東から)
梶原遺跡	全景(西から)	SB01	(東から)
写真図版2	梶原遺跡 1区 柱穴群(南東から)	写真図版26	梅ヶ作遺跡 SA01(西から)
1区	柱穴群(南西から)	SA01	(南から)
写真図版3	梶原遺跡 1区 北壁(南西から)	写真図版27	梅ヶ作遺跡 SA01・P01断面(南から)
1区	土器出土(東から)	SA01・P03断面(南から)	
1区	SK01断面(東から)	SB01・P01断面(東から)	
1区	SK02断面(南西から)	SB01・P04断面(東から)	
1区	SD02断面(南から)	SB01・P06断面(東から)	
1区	SK04断面(東から)	SB01・P08断面(東から)	
1区	P01断面(北東から)	写真図版28	梅ヶ作遺跡 調査区北壁(南西から)
1区	P02断面(北西から)	SK01遺物出土状況(北東から)	
写真図版4	梶原遺跡 1・2区 全景(南東から)	SK01完掘状況(北西から)	
1区	池状遺構断面(南から)	SK02断面(北東から)	
2区	溝状落込み断面(東から)	P01(南東から)	
写真図版5	梶原遺跡 3区 西壁(南東から)	調査区南側(西から)	
3区	西壁SD05断面(東から)	SD01断面(西から)	
3区	西半部(東から)	写真図版29	梅ヶ作遺跡 出土遺物1(土器)
3区	西半部(西から)	写真図版30	梅ヶ作遺跡 出土遺物2(土器・金属器)
3区	SD03断面(北東から)	写真図版31	北山遺跡 上空から東を望む
3区	西半遺構検出風景(北から)	北山遺跡	全景(南東から)
写真図版6	梶原遺跡 3区 全景(西から)	写真図版32	北山遺跡 全景(北から)
3区	東半全景(西から)	北山遺跡	全景(南東から)
写真図版7	梶原遺跡 SB01全景(西から)	写真図版33	北山遺跡 横断セクション(東から)
SB01全景	(東から)	縦断セクション(南から)	
写真図版8	梶原遺跡 3区 土器集中部A(東から)	SD02断面(南から)	
3区	土器集中部B(南から)	SK02断面(南東から)	
写真図版9	梶原遺跡 SD06検出状況(東から)	SK01検出状況(南から)	
SB01周辺上層堆積状況(南東から)		SK01断面(南から)	
SD07断面(南から)		SK01炭化材出土状況(南から)	
SK05(東から)		SK01完掘状況(南から)	
上器集中部B検出状況(南から)		写真図版34	大月北山古墳群 全景(南上空から)
SB01・P02断面(南から)		写真図版35	大月北山古墳群 1号墳(SX01)全景(南上空から)
SB01・P06断面(南から)		2号墳(SX02)全景(南上空から)	
写真図版10	梶原遺跡 3区 南側溝内木材出土状況(南西から)	写真図版36	大月北山古墳群 調査前の状況(北東から)
3区	南側溝内木材出土状況(北西から)	調査後全景(南から)	
3区	南側溝内木材出土状況(北から)	SX01埋土土層断面(南東から)	
写真図版11	梶原遺跡 出土遺物1(土器)	SX01石棺検出状況(西から)	
写真図版12	梶原遺跡 出土遺物2(土器)	SX01石棺検出状況(東から)	
写真図版13	梶原遺跡 出土遺物3(土器)	SX01棺内鉄器出土状況(西南から)	
写真図版14	梶原遺跡 出土遺物4(土器)	SX01棺身の状況(東から)	
写真図版15	梶原遺跡 出土遺物5(土器)	SX01棺内鉄器出土状況(東から)	
写真図版16	梶原遺跡 出土遺物6(土器)	写真図版37	大月北山古墳群 SX01から東方を望む(西から)
写真図版17	梶原遺跡 出土遺物7(土器)	SX01墓塚全景(西から)	
写真図版18	梶原遺跡 出土遺物8(土器)	SX02石棺検出状況(南から)	
写真図版19	梶原遺跡 出土遺物9(土器)	SX02全景(西から)	
写真図版20	梶原遺跡 出土遺物10(土器・金属器)	SX02棺内雑床の状況(西から)	
写真図版21	梶原遺跡 出土遺物11(石器)	SX02調査付近の状況(西から)	
写真図版22	梶原遺跡 出土遺物12(木製品)	SX02溝壁と小穴の断面(北から)	
写真図版23	梶原遺跡 出土遺物13(木製品)	峠の掘切(東から)	
写真図版24	梅ヶ作遺跡 調査区全景(南から)	写真図版38	大月北山古墳群 出土遺物1(金属器)
調査区全景(東から)		写真図版39	大月北山古墳群 出土遺物2(玉)



第1図 遺跡の位置

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯と経過

### 1. 経緯

一般国道483号北近畿豊岡自動車（以下北近畿豊岡自動車道）は、丹波市春日町から朝来市和田山町を経て豊岡市に至る高規格道路として計画された。

この道路の山東町柴〜和田山町御堂に至る区間については春日和田山道路Ⅱと呼称し、建設省近畿地方局豊岡工事事務所（現国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所）の依頼により、建設予定地内の埋蔵文化財について、兵庫県教育委員会は平成5年4月、平成10年5月分布調査を実施した。また、平成8年度から確認調査を開始し、遺跡の所在が確認された箇所については、順次発掘調査を行った。史跡指定された茶すり山古墳を除き、本発掘調査による記録保存の取り扱いとなり、工事が実施され、事業用地内の遺跡は消滅した。

分布調査で奈良時代から中世の遺物が採集された朝来市山東町（当時は朝来郡）のパーキングエリア計画地内の谷部について、Na120地点として平成10年度に確認調査を実施した。その結果を受け、北山遺跡・梶原遺跡・梅ヶ作遺跡の本発掘調査を平成12年度に実施した。

また、周知の埋蔵文化財包蔵地である「大月北山遺跡」の範囲内を道路が通過するため、平成12年度に確認調査を実施し、平成13年度に、事業用地内の本発掘調査を実施した。調査後大月北山1号墳、大月北山2号墳と名称が変更されており、本報告では、2基をまとめて大月北山古墳群と呼称している。

なお、北近畿豊岡自動車道の春日から和田山までの区間は平成18年度の秋、兵庫県における国体開催に合わせ開通し、現在は朝来市和田山町〜養父市八鹿町の区間の埋蔵文化財調査を継続中である。

### 2. 確認調査（図版2）

遺跡の名称	Na120地点（遺跡調査番号 980130）
所在地	朝来市山東町
調査期間	平成10年9月24日〜平成10年10月8日
調査面積	574㎡
調査担当者	吉識 雅仁・佐々木俊彦・仁尾 一人

対象地域は与布土川に注ぐ楽音寺川の形成した谷とそこから東西に分かれる枝谷に位置する。すでに圃場整備が実施されており、3反区画の水田が枝谷の奥から楽音寺川に向けて階段状に並んでおり、詳細な地形をうかがうことは困難であったが、段丘地形が埋没している可能性もあった。

そこで、遺構面・包含層が深く埋没している可能性を考え、谷底に当たる地区は4m方角の坪掘り調査、段丘の存在が考えられる地区は幅2mのトレンチ調査とし、遺跡が存在する兆候がみとめられた箇所には坪・トレンチを追加し、最終的には坪17箇所、トレンチ16本の調査を行った。

なお、断面図の作成は水田面を基準とし、坪・トレンチの位置は水田畦畔から計測した。

調査の結果、28と32の2か所のトレンチで柱穴の遺構が検出され、他のトレンチで遺物量はそれほど多くないが奈良〜中世・弥生時代の遺物などが出土した。遺構・遺物の広がる範囲は狭く、極めて限られた範囲であるが、緑釉・木簡（梶原遺跡W1）・小札（梶原遺跡M3）などの重要な遺物も出土した。

遺跡の名称	Na121地点（遺跡調査番号 2000192）
所在地	朝来市山東町大月字北山78-1・80
調査期間	平成12年7月21日～平成12年9月30日
調査面積	216㎡
調査担当者	久保 弘幸・藤田 淳・荒木 幸治

確認調査は 主尾根稜線上に6本と、北側の支尾根稜線部に4本のトレンチ、谷中に1本を設けて実施した。その結果、主尾根部では、鞍部を挟んだその南北で、各1箇所、埋葬施設の可能性がある遺構を確認したが、遺物が無いため遺構の時期は不明であった。他に顕著な遺構は無かった。

支尾根部では、主尾根への取り付きに近い箇所において、坑底中央部に径5cm程度のビットを1箇所穿つ土坑を1基確認した。縄文時代の落とし穴の可能性が高いが明確な遺物を伴わない。その他に顕著な遺構は無かった。

以上の結果に基づき、主尾根部の稜線上を中心とする「1区」と、支尾根部分の「2区」の2地区を本発掘調査対象範囲とした。

### 3. 本発掘調査

当報告書で報告する遺跡の本発掘調査の概要については、以下のとおりである。

遺跡名	北山遺跡（遺跡調査番号 2000188）
所在地	朝来市山東町大月字北山92-2
調査期間	平成12年8月24日～平成12年9月21日
調査面積	585㎡
調査担当者	久保 弘幸・藤田 淳・荒木 幸治

遺跡名	梶原遺跡（遺跡調査番号 2000189）
所在地	朝来市山東町楽音寺字梶原676-1他
調査期間	平成12年10月27日～平成13年1月11日
調査面積	2,654㎡
調査担当者	久保 弘幸・藤田 淳・荒木 幸治

遺跡名	梅ヶ作遺跡（遺跡調査番号 2000190）
所在地	朝来市山東町楽音寺字梅ヶ作713
調査期間	平成12年12月7日～平成13年1月11日
調査面積	446㎡
調査担当者	久保 弘幸・藤田 淳・荒木 幸治

遺跡名	大月北山遺跡→大月北山古墳群と変更（遺跡調査番号 2001196）
所在地	朝来市山東町大月
調査期間	平成14年1月7日～平成14年3月13日

調査面積 1,721㎡  
調査担当者 半田 博幸・岸本 一宏・荒木 幸治

## 第2節 整理作業の経過

出土品整理作業は国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所の依頼を受け、平成18年度と19年度の2か年にわたって行った。

初年度は水洗い・ネーミング・接合・補強・土器と木製品の実測・拓本・金属器の保存処理を行い、次年度は金属器・玉の実測・復元・写真撮影・写真整理・図面補正・トレース・レイアウト・分析鑑定・保存処理を行った。

水洗い・ネーミングは魚住分館（明石市魚住町清水）で行い、その他の作業は荒田事務所（神戸市兵庫区）および県立考古博物館（加古郡播磨町大中）で行った。

金属器・木製品については保存処理を行った。金属器の処理にあたっては、事前にレントゲン写真を撮影し、水酸化リチウムで脱塩処理をした後、錆取りを行った。強化にはアクリル系合成樹脂であるバラロイドNAD-10を利用した。木製品はPEG含浸法によって行った。

また、自然科学的分析として、北山遺跡出土の炭化物のAMSによる放射性炭素年代測定と梶原遺跡出土の木製品の樹種同定を外部委託して行った。

なお、整理作業を担当した非常勤嘱託職員・日々雇用職員は以下のとおりである。（順不同）  
水洗い・ネーミング作業

早川並紀子・伊藤ミネ子・衣笠 雅美

接合・復元作業

眞子ふさ恵・吉田 優子・西口 由紀・木村 淑子・小野 潤子・三好 綾子・奥野 政子  
又江 立子・荒木由美子・藤池かずさ・嶺岡 美見・宮野 正子・小谷 桂加

実測・トレース作業等

池田 悦子・松本 嘉子・古谷 章子・岸野奈津子・宮田 麻子・前川 悦子・高瀬 敬子  
西村 美緒

金属器保存処理作業

栗山 美奈・大前 篤子・藤井 光代・清水 幸子

木製品保存処理作業

今村 直子・小林 俊子・渡辺三三代・村上 令子

## 第2章 位置と環境

### 第1節 遺跡の位置（図版1）

梶原遺跡・梅ヶ作遺跡・北山遺跡・大月北山古墳群は、兵庫県北部、朝来市の旧山東町の旧和田山町との境に近い位置に所在する。

兵庫県の北部、旧但馬国南東部に位置する朝来郡4町（生野町・朝来町・和田山町・山東町）は、平成17年4月1日に合併し、朝来（あさご）市となった。梶原遺跡などが所在する山東町は、朝来市の東端に位置し、南東部は丹波市（旧水上郡青垣町）に接し、北東部は京都府福知山市（旧京都府天田郡夜久野町）と府界境になっている。

山東盆地の南西を縁取る標高300mを越す山塊の裾には、低平な丘陵地帯が広がり、幾筋もの細長い開析谷が入り込んでいる。こうした開析谷は古来より交通路として利用され、現在でも山東町と和田山町を結ぶ2本の県道が設けられている。その1つである「泉遺浅野・山東線」は「宝珠峠」を越えるルートで、道沿いには古墳時代から中世にかけての遺跡が点在している。現在のメインルートである国道9号線やJR山陰本線は与布土川流域の矢名瀬から和田山に至るルートであるが、そのバイパスとして、北近畿豊岡自動車道が通過するルートは奇しくもこの古代からの道と重なっている。

北山遺跡・梅ヶ作遺跡・梶原遺跡は、山東町側の峠口付近に立地する遺跡群である。北山遺跡は、盆地の西端を北流する与布土川の支流、楽音寺川によって形成された細長い谷に挟まれた尾根上に立地する。梅ヶ作遺跡は、楽音寺川などの小河川によって形成された幅狭く奥の深い開析谷に挟まれた丘陵の先端、平地部との地形変換点付近に遺跡は立地する。また、梶原遺跡は、開析谷の1つに立地する。谷の間口は80mほどの狭いもので、遺跡はそこから50～100m奥まった位置にある。

大月北山古墳群は、梶原遺跡などから400mほど西に離れた海拔170m～180mを測る山塊稜線上に位置する。この山塊は南北方向の山並みとなり、和田山町と山東町を隔てている。遺跡からは西側の和田山町方向の平野部は直視できないものの、東側の山東町方面については、町域東半部の平野部を眺望することができる。

### 第2節 歴史的環境（第2図）

朝来市は、平地部分には柿坪遺跡（21）・粟鹿遺跡（10）・加部遺跡（30）といった集落遺跡が広がり、それらを取り巻く丘陵・山間部には、おびただしい古墳群が広がる極めて遺跡の密度の高い地域である。この地域の歴史的環境については、播但連絡有料道路関連の『加部遺跡Ⅰ』及び北近畿豊岡自動車道関係の『粟鹿遺跡』等の報告書に述べられており、ここでは旧山東町域を中心に概略を述べる。

山東町内における旧石器、縄文時代の遺跡については、これまであまり知られていない。粟鹿遺跡では、縄文時代中期から後期の土器がわずかに出土しているが、遺構は確認されていない。

弥生時代の遺跡については、山東町内では前期中段階の時期の遺跡は発見されておらず、弥生時代中期以後の遺跡が確認されている。このうち、仲田遺跡（19）は、粟鹿川と与布土川の氾濫原にあたる微



第2図 周辺の遺跡

- |           |            |             |
|-----------|------------|-------------|
| 1 梶原遺跡    | 11 若水B古墳群  | 21 柿坪遺跡     |
| 2 梅ヶ作遺跡   | 12 若水城跡    | 22 柿坪中山墳墓群  |
| 3 北山遺跡    | 13 若水A古墳群  | 23 森向山遺跡    |
| 4 大月北山1号墳 | 14 和賀向山古墳群 | 24 大師山古墳群   |
| 5 大月北山2号墳 | 15 芝花古墳群   | 25 桑音寺北山1号墳 |
| 6 方谷遺跡    | 16 芝端ヶ遺跡   | 26 茶ずり山古墳   |
| 7 柴遺跡     | 17 芝端ヶ古墳   | 27 簡江大塚遺跡   |
| 8 方谷古墳群   | 18 越田宮之前遺跡 | 28 片引遺跡     |
| 9 一品野田遺跡  | 19 仲田遺跡    | 29 法興寺跡     |
| 10 粟鹿遺跡   | 20 永徳遺跡    | 30 加都遺跡     |

高地に立地し、中期後半に限定される集落遺跡である。方形の住居跡が確認され、磨製石剣などが出土している。粟鹿遺跡では、兵庫県で初例となる山陰地方独自の方形貼石墓（弥生時代中期末から後期初頭か）や、後期を中心とした住居跡や木棺墓、土墳墓などが見つかっている。柿坪中山墳墓群（22）では、後期前半と考えられる木棺墓が調査されている。

山東町内には総数約550を数える古墳が確認されているが、和田山町および朝来町で築造されている前方後円墳は、いまのところ発見されていない。大半の古墳は直径あるいは一辺約10mを測る円墳、あるいは方墳であるが、若水A11号墳（13）は長径約40m、短径約35mを測る楕円形の墳丘を造り出して

おり、古墳時代初期段階の南但馬の王墓といえる規模の古墳である。

山東町内では6世紀前半までの木棺直葬墓や竪穴式石室を埋葬主体とする古墳は、町内中央部の山東盆地あるいは小河川によって形成された各谷を見下ろすことができる尾根上に立地し、続く6世紀後半以降に出現する横穴式石室を埋葬主体とする古墳は、各河川上流部の山麓あるいは谷部に立地している傾向がうかがえる。

柿坪遺跡は、昭和50年代に弥生時代中期の住居跡や古墳時代前期の集落跡が発見され、但馬地域最大の集落遺跡といわれていた。今回の道路建設にとまない東西約300m、南北約40mの範囲におよぶ調査が実施され、古墳時代全般にわたる住居跡約120棟、掘立柱建物跡34棟など、数多くの遺構が確認され、多量の遺物が出土している。他に集落遺跡としては、柿坪遺跡の北側の永徳遺跡（20）、与布土の山際所に所在する森向山遺跡（23）でも竪穴住居跡などが発見されている。

歴史時代の遺跡については、これまで圃場整備などの土木工事中に部分的な調査が行われたのみであり、遺跡の継から歴史的な様相を理解することはできない状況である。そのなかで、越田宮之前遺跡（18）では、8世紀後半から11世紀に至る井戸や土坑、多数の柱穴が確認されており、周辺地域からは、平安時代の墨書土器や「寺」様の漆記号をもつ奈良時代の須恵器なども出土、採集されている。このため、これらの遺跡および散布地周辺は、兵主神社から粟鹿神社へ通じる重要な位置に立地していることと併せ、古代の役所的な性格をもつ遺跡と考えられている。また、楽音寺からは、経瓦が出土している。和山盆地の加部遺跡で検出された道路遺構は分岐して宝珠峠方向に向かうが、峠に至る谷の中段に筒江大垣遺跡（27）があり、緑釉・灰釉なども出土しており、本報告の梶原遺跡・梅ヶ作遺跡との規模の違いはあれ、時期的に共通する遺跡である。

柴遺跡（7）から「駅子」の文字が記された木簡が出土したことによって、これまで複数考えられてきた粟鹿駅家推定地が柴遺跡あるいは近接する地点に所在していたと考えられる成果が得られた。また、出石神社（旧出石郡出石町）とともに、但馬国一の宮である粟鹿神社の前面に位置する粟鹿遺跡で出土した「神」あるいは「神マ」と判読できる墨書土器および建物跡群は、『粟鹿大〔明〕神元記』に記されている古代豪族「神部直」と粟鹿神社との関係を考える上で貴重な資料である。

〔参考文献〕

- 甲斐昭光編『加部遺跡Ⅰ 兵庫県文化財調査報告 第285冊 平成17年  
藤田淳編『筒江浦石遺跡』 兵庫県文化財調査報告 第316冊 平成19年  
池田征弘編『加部遺跡Ⅱ 兵庫県文化財調査報告 第324冊 平成19年  
深井明比古・岸本一宏編『粟鹿遺跡』 兵庫県文化財調査報告 第323冊 平成19年

## 第3章 梶原遺跡

### 第1節 概要

山東盆地の南西を縁取る標高300mを越す山塊の裾には低平な丘陵地帯が広がり、幾筋もの細長い開析谷が入り込んでいる。梶原遺跡は、山東町側の峠口付近に位置する。周辺は楽音寺川などの小河川によって幅広く奥の深い開析谷がいくつも形成されており、そうした谷の1つに梶原遺跡は立地する。谷の開口は80mほどの狭いもので、遺跡はそこから50～100m奥まった位置にある。

調査対象地は谷に面した南向きの山裾部と谷中の北半分を含む。2つの間には日常利用されている道があり、現道下の調査については、迂回路の工事の完成を待って行う必要があった。そこで、調査区を山裾部（1区）、現道部（2区）、谷中部（3区）の3つに区分し、1区と3区の調査を先行して行うこととした。なお、1区については西と東でa・bの小地区に細分し、3区については水田1筆を単位の西からa～c区と細分し、遺物取り上げ等の便を図った。

確認調査の結果をもとに遺物包含層上面までの機会掘削を行った後、人力にて遺物包含層の掘削を行った。1a区、2区及び3c区については比較的良好な遺物包含層の堆積が認められたが、これ以外では遺物の出土は極めて少なかった。1b区については北東部に池状の深い落ち込みが認められたが、機械掘削の際に埋上が流伏化し、調査区の壁が崩壊し始めたため、すべてを掘削しきれず、比較的固く締まった部分のみの掘削で止めた。

1a区と3c区では柱穴等の遺構が検出されたため、平板測量の後、遺構掘削を行い、写真用足場からの撮影を行った。

3a・b区では谷中を流れる旧河道が検出されたが、最上層で古墳時代の木製品などが少量出土した以外には、遺物がほとんど含まれていないことから、肩部の輪郭が分かる程度の深さまでの掘削に止めた。

遺構掘削が完了した後は、全域を写真撮影用に仕上げ、写真用足場上からの全景撮影を行うと同時に、遺構実測用の空中写真撮影を行った。最後に柱穴の断ち割りを実施して調査を終えた。

検出された遺構には古墳時代のもとの奈良時代を中心とするものがある。古墳時代の遺構は谷中の3区で検出され、奈良時代の遺構は山裾の1区と谷中の3c区に分かれて存在する。

### 第2節 遺構（図版3～5 写真図版1～10）

#### 1. 古墳時代の遺構

##### SD04

谷中央を流れる旧河道であり、3区で北肩が検出された。3a区ではほぼ東西方向に走行し、3b区で北側に振れ、山裾に沿って流れる小流路と合流する。3区の谷中にはこうした旧河道が流路変更を繰り返しながら何度も流れており、これもそうした旧河道の1つにすぎない。3b区南壁際ではこれとは別の旧河道の最上層から古墳時代初頭の土器数片とともに加工木等の木製品が若干出土している。したがって、この頃までには谷の南半部はかなり埋積が進んでいたことがうかがえる。これらの旧河道は3c

区にも続いているが、上層で遺構が検出されたため、掘削は行わなかった。

### SD03・05

旧河道SD04の北側で検出された2本の浅い流路である。SD04と相前後する時期のものであろう。

## 2. 奈良時代の遺構

1a区と3c区で柱穴を主とする遺構を、1b区で池状の落ち込みを検出した。また、2区の山裾を東西に走る小流路の上部には良好な遺物包含層が認められた。

SB02を中心とする1a区の遺構は、本米、さらに南東側へと延びると考えられるが、棚田の開墾により削られてしまっている。また、遺物包含層は北側の調査区外に続いているが、背後には急傾斜の斜面が迫っており、その範囲は限られたものであろう。

3c区の柱穴群は谷部の旧河道が砂礫層ではぼ埋没した後、黒色の砂質シルトを主体とした土で整地した後柱穴を穿っている。整地土の中には比較的多量の土器が認められた（土器集中部A・B）。SB01を復元している。3c区の柱穴群はSB01と同様におおむね東西方向に並ぶものが多い。

### SB02

1a区に所在する柱穴群から復元した掘立柱建物である。桁行・梁行は不明である。厚く堆積したクロボクによって埋没した小さな谷状地を中心に存在する。谷状地に面した斜面の地山を削平し、付近を整地した後柱穴を穿っている。南東部ではL字形に地山の岩盤を削平し、落ち際に溝SD02、SD01を巡らせている状況も認められた。SD02は幅80cm、深さ40cm、SD01は幅60cm、深さ20cmを測る。

整地土は土壌化したクロボクを主に、地山の黄褐色土が若干混じるもので、それほど明瞭なものではない。ただし、L字形の削平部では、地山岩盤を削った土を約10cmの厚さに敷き均している。柱穴の径は20～50cmで、深さは30cm前後のものが多いが、P02などは70cm以上の深さまで掘り込み、柱痕も明瞭に認められる。地山の削平はおおまかに北西から南東へ方向性をもつもの、柱穴の配置に規則性を見出すことはできず、調査時に建物を復元するにはいたらなかった。

### SB01

3c区に所在する、主軸を東西方向に向け、北辺に雨落ち溝SD06、南辺にSD07を巡らせた桁行3間、梁行2間の掘立柱建物である。西辺の南側にも溝が残存していた。しかし、東辺では中央の柱を検出できなかったため、建物の復元は検討を要する。SD06・07の幅はおよそ50cm。SD07の南側では土器がまとまって出土し、土器集中部Bとしている。

### SK01

1a区のSB02の西に位置する直径およそ1.4mの円形の土坑である。深さ30cm。側壁は直に落ち込み、底面は平坦である。

### SK03

1a区のSB02東に位置する直径およそ1.0mの円形の土坑である。深さ20cm。

## 池状落ち込み

1b区の池状落ち込みは確認調査で木簡が出土した場所である。調査区北側へ向かって急激に深く落ち込んでいる。機械掘削時の観察では、もともと深い谷部であった所を利用して池のようなものを設けたようである。木簡や他の遺物は池の中ではなく、その周囲の谷部分の埋土から出土していると考えられる。

## 第3節 遺物 (図版6～19 写真図版11～23)

出土遺物は主に整地土内や2区の遺物包含層から、奈良時代を中心に平安時代前期頃までの土器が比較的多数出土している。他に、1b区では榎状木製品、2区では火きり板や曲物、3c区ではスラッグなどもわずかながら出土している。

### 1. 遺構出土の土器

#### SD07出土

1は須恵器の杯Bである。推定口径は16.5cm。奈良時代中頃のものか。2は土師器の小型の甕である。体部に比べ、口縁部は厚く、口縁端部は上方に小さくつまみ上げている。外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリ。外面にはススが付着している。

#### SD02出土

3は土師器の甕である。外面にはススが付着している。外面はハケメ、内面はヘラケズリ。

#### P03堀方内出土

4は土師器の鍋である。口縁端部は凹線がめぐる。大きく開く器形で、体部と口縁部の境界は明確でない。推定口径は28cm。体部外面は縦方向、内面は横方向のハケメである。

#### 土器集中部A(東)

5は須恵器の杯蓋である。つまみや高さからみて、奈良時代中頃のものか。推定口径14.2cm。6・7は杯Bである。6は口径に比して器高は低めである。底部の外面はヘラ切り後ナデ、内面は一方の仕上げナデ。7はやや深手の器形であり、口縁部は直線的に開くのではなく、途中で屈曲する椀に近いタイプである。高台径も小さい。8は杯Aである。口縁部の外傾度が大きく、奈良時代後半に属するか。9は須恵器の壺または甕の口縁である。端部は下方に拡張され、1.4cm幅の面を持つ。2条の凹線を巡らせた間にやや雑な櫛描波状文を施す。19・20は土師器の鍋である。19は胴部から口縁部にかけて、ゆるやかに外反し、境界は不明瞭である。内面には横方向のハケメがみられる。端部はカット後ヨコナデし、面をもつ。20は19に比べ、胴部と口縁部の境界がなだらかに屈曲している。胴部の外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメが部分的に残る。端部は少し強めにヨコナデをしている。

#### 土器集中部B

10・11は須恵器の杯Aである。口縁部はほぼ直立に近いタイプである。11は口縁部をつまんで強くヨ

コナデしたため、外反している。12は小型の須恵器の壺である。口縁部は「く」の字状に開く。底面は平底で回転ヘラ切りの後ナデ。13・14は土師器の甕の口縁部である。「く」の字状に開く口縁で端部はカットしている。口縁部内面は横方向のハケ、胴部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のヘラケズリ。

15~18は土師器の鍋である。いずれも、体部と口縁部の境界は明確でない。また体部に比べ、口縁部の器壁は厚い。体部外面及び口縁部内面がハケメ、体部内面は15・17では横方向のヘラケズリ。16・18は横方向のハケメである。

21~23は大型の土師器の鍋である。21は胴部と口縁部の境界が不明である。胴部の内外面はハケメである。22はやや深めの器形で、胴部と口縁部の境界は屈曲している。胴部内面はヘラケズリである。23も内面はヘラケズリである。器壁はやや厚めである。

### 土器集中部A付近

25~29は須恵器である。25・26は杯Aである。いずれも口縁部の外傾度が高く、口径に比して器高が低い。27は碗の底部である。底面は回転糸切り。28は高杯の杯部である。内湾しながら開く口縁部である。29は大型の短頸壺の肩部である。肩の屈曲は丸みを帯びている。左右対称ではなく、若干のひずみが見とめられる。

24は土師器の鍋である。口縁部と胴部の境界は屈曲している。口縁部端部はつまんでヨコナデしている。胴部外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリ後部分的に横ハケをほどこしている。

## 2. 包含層出土の土器

30以下は包含層から出土した遺物である。弥生時代から中世のものまで、さまざまな時期である。

30から95は須恵器である。30~42・55は杯蓋である。つまみの形状は、30などのように中央が突出する宝珠つまみらしいものから、37のように中央が窪むものもある。口径は15cm程度、つまみを含む器高は2.7cm程度で、ばらつきは比較的小さい。55のつまみはいわゆる環状つまみであり、56・57のような稜腕に伴うタイプと考えられる。43~54は杯Bである。蓋と異なり、46のように小さいものから、54のように大きいものまで、口径にばらつきがみられる。45のように外傾度の高いものから、52のように外傾度の低いものまで、さまざまである。また、43のように口径に比して器高の低い浅手のもの、52のように深手ものもある。56~58は碗で、56・57は稜腕である。56は口縁端部を欠くが、51の端部は小さく丸くおさまられ内面に凹線が巡る金属器を模倣したつくりとなっている。58は底部のみの破片であるが、碗と推測した。高台は外方にふんばっている。

59は古墳時代タイプの杯蓋と考えて凶化したが、上下逆転して杯身の可能性もある。天井部外面は回転ヘラ切り後、ユビナデである。60~64および70・71は口縁部が内湾する碗タイプの杯である。60・61は逆転する杯蓋に近いタイプである。62・63はやや深手である。64は下半にナデの稜線がめぐる。70・71は口径が広いタイプである。71の口縁部はつまんで薄くなっている。65~69は底部から直線的に開く口縁部のいわゆる杯Aに属するタイプである。68・69は余り外傾度が高くないが、65はかなり外傾度が高い。72は高杯脚部である。端部はまるくおさまる。器高は高く、透かしは無い。飛鳥時代に属するものと思われる。

73は碗である。底面は糸切りで、口縁部は直線的に開く。内面に付着物あり。平安時代に属するものである。74は碗の底部で、糸切りを行っている。見込みが一段低くなるタイプである。

75は長頸壺の口縁部である。胴部中程に2条の凹線を巡らす。76は長頸壺の肩部である。外部に灰かぶり。77も壺の肩部である。稜に凹線が巡る。78は壺の底部である。底面は平底である。79・80は小型の短頸壺である。79は肩部に稜があり、胴部下位はヘラケズリを行っている。80の肩部は丸みを帯び、底部には高台が付く。口縁部を除く肩部に灰がかぶる。81はやや大型の壺の肩から口縁部を欠く胴部である。丸みを帯び、やや高い高台が付く。底部内面に灰が付着しており、長頸壺のような狭い口では無く広頸の器形になると思われる。82は小型の壺の底部である。底面は糸切り。時代的に下るものである。

83・84は平瓶である。83は口縁部から肩部にかけての破片である。口縁端部は面を持ち、肩部には多方向のハケメがみとめられ、把手の退化形態である円形浮文が付く。84は胴部の破片である。稜に2条の凹線が巡る。肩部は膨らみ器高も高く、古墳時代的な特徴を示す。焼成不良のため、調整は不明瞭である。

85～89は甕である。85・86はやや小ぶりの甕で、球形の胴部に短く「く」の字状に開く口縁部が伴う。85の体部外面は平行タタキのち部分的にカキメを施す。内面は同心円当具痕が残る。86の胴部は格子タタキの後、ほぼ全面にカキメが施されている。内面は同心円当具痕が部分的に残る。口縁端部を少し上方につまみ上げている。87はやや大型の甕の口縁部から肩部にかけての破片である。口縁端部は複合口縁風に短く屈曲する。外面は格子タタキを施し、内面は同心円当具痕が残る。肩部は丸みを帯びている。88は大型の甕の肩から口縁にかけての破片である。口縁部には2条一組の凹線が2段巡り、3段に分割される。最上段は右下がり、中段には左下がりの刺突による列点文を施している。胴部は肩の張る器形で、格子タタキの上からカキメを施している。89は口縁端部から少し下がったところで内側に屈曲している。内面は灰をかぶっており、付着物もみられる。また、口縁はひずんでいる。

90から93は横瓶である。90・91は依形の胴部の片側の破片で反転復元して図化している。90の外面は平行タタキの後、部分的に板ナデやナデ消しを行っている。内面は指オサエ、指ナデ痕が著しく、一部に板状のナデがみとめられる。91の外面は平行タタキの後カキメを施す。内面は同心円状の当具痕がほぼ全面にみられる。92の口縁部はほぼ直立し、中程より下に2条の凹線がめぐる。端部は丸くおさめている。体部外面は平行タタキの後カキメをめぐらす。内面は同心円状の当具痕が残る。93の口縁部は外反してラッパ状に開く。端部は内側に折り返すように肥厚する。外面は平行タタキの後カキメおよび不定方向のハケメ、内面は同心円状の当具痕を残す。94は壺または横瓶の口縁部である。端部はカット後ナデ。95は甕の胴部である。ほぼ球形に近い形状で、外面は平行明きの後カキメで、特に下半部はほぼ全面的にカキメが施されている。内面は同心円状の当具痕が残る。

96～111は土師器である。96～104は甕である。96・97は肩部が張らない形状の胴部にわずかに外反する口縁部が伴い、口径が最大径となるタイプである。96は外面縦方向、内面は横及び斜め方向のハケメである。97は外面にスガが付着しており、調整が不明であるが、胴部外面はハケメ、内面はナデかと思われる。98はおそらく卵形の胴部にいったん立ち上がり外反する口縁が伴う。口縁端部は薄くおさめる。胴部外面はハケメ、内面は横方向のヘラケズリで、古墳時代中頃から後期にかけての時期に属すると思われる。99・100は水平に近く外反して開く口縁端部をつまみ上げてヨコナデする。96・97と同様に、肩部が張らない胴部で、口径が最大径となるタイプである。99の胴部の外面にはスガが付着し縦方向のハケ、内面は横方向のヘラケズリ。98も外面は縦方向のハケ、内面はヘラケズリ。101は外反する口縁で、端部はつまんでヨコナデ。外面の一部にスガが付着している。外面は部分的に斜め方向のハケ

メ、内面の口縁部は横方向のハケ、横方向のヘラケズリ。102も外反する口縁の端部をつまんでヨコナデしている。器壁はかなり厚い。外面にススが附着している。胴部外面はハケ、内面はヘラケズリ。103は「く」の字状に開く口縁の端部を上方に折り曲げている。頸部の屈曲部は強くナデている。胴部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のヘラケズリ。104の口縁端部は折り返すようにヨコナデする。胴部内面はヘラケズリ。

105は大型の甕で、口縁部はほぼ水平に近い角度に開く。器壁は厚く、端部は丸くおさめる。体部は縦ハケ、内面はヘラケズリ。106～115は甕である。口縁部から胴部上半にかけての破片ばかりで、全体の形状がわかるものはないが、半球形の胴部から屈曲して大きく開く口縁部が伴うものと思われる。胴部外面の調整は縦方向のハケメ、口縁部内面は横方向のハケメ、胴部内面は横方向のハケまたはヘラケズリである。また外面にススが伴うものも多い。口縁部が片口状になるものもあるかと思われる。端部はカット後ナデしており、その面が凹線状にくぼむもの、ハケメを施すものもある。

112は緑釉の腕の胴部、113は内黒の黒色土器の腕の底部である。底部内面にはミガキが施されている。114は平瓦の破片である。凸面はハケメ、凹面は布目である。115はてづくね土器である。

116・117は弥生土器である。116は器台の口縁部で、口縁部下半に蓋凹線が巡る。117は高杯の脚部である。杯部に充填した円蓋が剥離した痕跡がある。脚柱部は絞り痕が残る。118は土師器の脚部である。三足土器の脚部か。残存している器表にはヘラミガキ痕が残る。

119・120は製塩土器の破片である。いずれもてづくねの成形であり、小片でもあるため、傾きや直径などは推測の域を出ない。119は器壁が薄い鉢状の器形である。120はそれに比べ器壁が厚く、口径は小さい。121は土師器の皿である。摩滅・剥離のため、調整は不明であるが、塗彩されていたものか。

### 3. 金属器

M1・M2は鉄器である。M1は刀身の破片と思われる。一端に木質が附着している。M2は釘または鐵の一部か。上部が欠損しているため、不明である。

M3は確認調査時に出土した小札である。両端を欠損しているが、円孔を7対点穿っていたものと思われる。

### 4. 木製品

W1～19の木製品は、旧河道なかほどの木器集中部ならびに池、包含層から出土している。樹種同定の結果、W7・W10～12の4点を除きスギであった。

W1は確認調査時に27トレンチより出土した木筒である。形態は短冊型。13.5×4.35×0.55cm、011型式。墨痕は薄く、文字の判読は困難である。以下のように釈読する案が出されている。花押は鎌倉時代様式かと思われる。

「(進) 候て納了

(花押)

永仁五□ □ 』

W2～4は田下駄の一部と考えている。W2は長方形の板の長辺の一方の中央に円孔を穿ち、他方をおよそ3等分する位置に2箇所の切欠を設けている。W3・4は台形の板で田下駄に取り付けたものか。W3は中央部に直径1cm程度円孔を穿つ。W4はW3よりやや厚手である。台形の上底にあたる部分の中

中央部に幅約2cm、深さ約2.5cmのやや深い切欠を設けている。

W5・6はいわゆる火燗板である。いずれもやや厚みのある細長い板を使用している。両端は折れている。W5では7箇所、W6では3箇所の難搔み痕が残っている。

W7・8は直径おおよそ3cmの棒状の部材の端を加工したものである。W7は上端から2cm程度の位置からおおよそ7cm幅で細かなハツリによる加工を行っている。それ以下の表面は縦方向の細かい加工痕がかすかにみとめられる。樹種はマツ属複雑管束亜属。W8は上端から2cmの位置から2cm幅でぐるりと1周ハツリを行っている。本体の表面もかなり円滑に仕上げられており、織り具の可能性が高い。

W11・12は曲物の底板である。いずれも木目に沿って割れて欠損している。W11は直径18.4cm、厚さ0.9cm。側面の5箇所釘穴がみられる。内面には黒色の漆らしい物質が付着している。材はサワラ。W12は直径12.7cm、厚さ0.9cm。側面の1箇所に木製の釘が刺さった状態で残っていた。材はヒノキである。

W9・10・13は用途不明の木製品である。W9は細長い長方形の板の長辺の地中から緩やかな弧状にえぐりを入れている。材はヒノキである。W10は一方が鈍角、他方はゆるやかな曲線で両端は折れている。樹種はガマズミであった。曲線部には3つ3mm程度の孔を穿っている。W13は折損しているが、もとは8角形に近い形状であったものか。中心に2.3~3cmの楕円形の孔を片方から穿っている。

W14~19は、建築部材など大型の加工材である。W14は浅い樋のような部材である。やまらみを帯びた底部から両側縁にむけて断面をみると、角材を逆合形に掘り窪めている。なお、一端は失われている。W15はやや厚手の板材である。2cm×2cm以上の方形の孔のあたりで欠損している。W16も孔を穿ったり、抉りを入れたりして加工した部材である。大きさに比して厚みは薄い。W17は扉状の部材である。上下に軸となる突起を作り出している。軸はいずれも摩耗しているが、短い方が下であったか。長さに比して幅が狭いので、これ1枚で扉であった可能性は低い。中央部付近に円孔が穿たれている。W18は細長い「H」字状の加工材である。かなり傷んでいるが、厚みのある部材である。建築部材か。W19はかなり大きな長方形のホゾ孔を3箇所穿った部材である。上端はやや丸みを帯び、下はホゾ孔で折れている。

#### 第4節 小結

梶原遺跡では、狭い谷中であるにもかかわらず、古墳時代初頭と奈良時代の遺構を調査することができた。

古墳時代初頭の遺構は旧河道のみであり、遺物は上流部から流れ込んだものである。木製品の中には扉板に類似するものも認められ、墳墓以外の遺跡が谷の奥に存在する可能性が高い。

奈良時代の遺構は2地区に分かれ、いずれも独立柱建物を併せている。遺構の数は少なく、空間的には極めて限定された場所である。土砂崩れや洪水の危険が危惧され、安定した生活が営めるような場所とは考えにくい。しかし、遺物にやや時間差が認められることから、ある程度継続して利用されたことも事実である。遺物の内容は一般の集落と特に変わるころは無く、工房など特殊な性格を与えることも難しい。山間地における小規模な集落の一形態を示すものと理解しておきたい。

このような立地条件に恵まれない場所であっても、生活に関わるような遺跡が存在することを明らかにできたことは、今後、当地域の遺跡立地を考える上で重要な知見となろう。

## 第4章 梅ヶ作遺跡

### 第1節 概要

梅ヶ作遺跡は山東町側の峠口付近に位置し、梶原遺跡との距離は100mほどである。周辺は楽音寺川などの小河川によって幅狭く奥の深い開析谷がいくつも形成されており、そうした谷に挟まれた丘陵の先端、平地部との地形変換点付近に遺跡は立地する。

調査対象地内には日常利用されている道があり、調査区の制約から、迂回路の工事の完成を待って調査を開始した。

確認調査の結果にもとづき、遺物包含層上面までの機械掘削を行った後、人力で遺物包含層を掘削した。遺物包含層は山に近い西側では薄く5cm以下であったが、東に向かって厚さを増し、最も厚いところでは約40cmあった。しかし、南東部では10cmほどと再び薄くなる。また、北西隅付近では遺物包含層がなく、薄いクロボクの堆積が認められた。遺構は遺物包含層下の黄褐色あるいは青灰色の地山面で検出した。遺構掘削が完了した後、全域を写真撮影用に仕上げ、東と南の2方向に足場を建て、撮影を行った。遺構実測と地形測量用の空中写真撮影の後、遺構を断ち割り、調査を終えた。

### 第2節 遺構 (図版20～22 写真図版24～28)

検出された遺構のほとんどは柱穴である。径50cmほどの比較的大きな掘方をもつものと、径20～30cmほどの小さなものがある。前者は1.5～1.8mほどの間隔で南北方向あるいは東西方向に並び、幾つかの掘立柱建物の存在が想定できる。しかし、相対する位置の柱が不明瞭であったり、攪乱や圃場整備前の水路によって破壊されたりしている部分が多いことなどから、明確に1棟ごとの規模を復元することは難しい。同じことは後者についてもあてはまる。しかし、狭い範囲に密集して柱穴が存在することから、建替えを行いながらある程度の期間、居住地として利用されたのであろう。

#### SB01

調査区の西半北角付近に位置するほぼ南北方向から5°西に長軸に向けた掘立柱建物である。南辺はおそらく削平のため柱穴が欠くが、西側は4間、東は1つ柱穴を飛ばして3間、北は2間の柵柱の建物である。南北方向の柱穴の芯と芯の距離はおよそ1.5m。東西方向はおよそ2m。柱穴は直径50～60cmの隅丸方形もしくは楕円形に近い平面形で、柱根は直径15～20cm程度である。

#### SB02

調査区の東半の東より中程に位置する1間×1間の掘立柱建物で、主軸は南北方向から85°西、東西方向で5°振っている。柱間は南北方向で2.1ないし2.2m、東西方向は3.1ないし3.2mで、東西方向の方が長い。柱穴は直径30～40cmとやや小さく平面形は円形に近い。柱根は直径15cm程度である。

#### SA01

ほぼ東西方向に芯芯間1.5mの等間隔に並ぶ5つの柱穴からなる柱列である。柱穴は50cm程度の円形もしくは隅丸方形で、柱根は20～30cm。東ほど地面が削平を受けており、東端のP05は柱根を検出できなかった。方位や柱の大きさなどSB01と似通っており、関連が考えられる。

#### SA02

N71°Eと東西から19°振った方向に並ぶ5つの柱穴からなる柱列である。柱間は等間隔では無く、3mも空いている箇所もあれば、ほぼ隣接しているものもある。柱穴は東端を除き、ほぼ30cm程度と小さな円形で柱根がみとめられない。東端は50cmとやや大きい楕円形で、15cmの柱根が確認できた。

#### SD01

SA02の北側にほぼ平行するように流れ、東でほぼ直角に屈曲する溝である。幅約1m、深さは約15cm。

#### SK01

南東隅近くで検出された一辺およそ70cmの正方形に近い土坑である。検出面からの深さは13cmと浅い。20～30cmのやや大きめの角張った石とともに、彩色した完形の土師器の杯4が据えられたような状態で出土している。

#### SK02

調査区西の中程、SA01の北側で検出された1.6m×1.4mのややくびれた隅丸方形の土坑である。検出面からの深さはおよそ30cm。

#### P101

調査区南辺の中程、SD01の北に位置する。直径約60cmの円形で、検出面からの深さは25cm。15～20cmの角張った石が3個納められていた。

なお、遺構の検出状況から、事業予定地内ではさらに東側へも遺跡の範囲が広がることが予測されたが、部分的なトレンチ調査の結果、圃場整備等によって擾乱を受けており、遺構はほとんど残存していないことが判明した。

### 第3節 遺物 (図版23～25 写真図版29・30)

遺物は奈良時代を中心に平安時代前期頃までの土器が比較的多く出土した。ほとんどは遺物包含層からの出土であるが、中には地山面に貼り付くような出土状態を示すものも見られた。この他、銅銭などの金属製品が数点と板材などが若干出土した。

#### 1. 遺構から出土した土器

1～3はP102から出土している。1は須恵器の杯Bの底部である。2は須恵器の碗の口縁である。

3は黒色土器の底部である。内面にやや幅広い単位によるミガキがみられる。

4・15はSK01から出土している。4は土師器の杯である。口縁部の外面は横方向に密にヘラミガキしているが、内面はわずかにヘラミガキ痕が残るのみである。底部外面はヘラケズリのちヘラミガキ。15は出土した土師器の甕の口縁部である。胴部から水平にかなり近い角度で開く。器壁は厚く、口縁端部は小さく丸くおさめている。胴部外面は縦方向、口縁部内面は横方向のハケメで、胴部内面はナデである。

6はSK02から出土した須恵器の杯蓋である。口縁端部にカエリがある。上面は灰かぶり。

5・8はP108から出土している。5は土師器の皿である。口縁部外面はヨコナデ後に密にヘラミガキ。底部外面はヘラケズリ後不定方向のヘラミガキ。内面に不定方向のヘラミガキがあるが、摩擦減味で図化できない。8は出土した須恵器の杯である。中央より下位に凹線状のくぼみが2条走る。底部内面は仕上げナデ。

7はSB02P02から出土した須恵器の杯蓋である。上面は灰をかぶり器表面あれている。小片のため、口径・傾きは推測の域はでないが、平坦なタイプと思われる。

9はP103から出土した須恵器の杯Bである。口縁端部はわずかに肥厚し、内向する。底面に黒い墨のような痕跡がある。また高台の一部に指の当たった痕跡がある。

10・12はSB01から出土している。10はP09から出土している須恵器の皿である。扁平な底部からわずかに外反しながら口縁部が立ち上がる。底面は回転ヘラ切りの後ナデである。12はP08から出土している須恵器の碗の底部である。底面は回転糸切りで切り離している。

11はP104から出土した瓦質土器の碗である。口縁部から一段下がったところをつまんでやや強くヨコナデしている。小片のため、口径は推測の域を出ず、もう少し小さくなる可能性もある。外面は横方向に密にヘラミガキをほどこし、内面は横方向のヘラミガキの上に、一部斜め方向のヘラミガキを行っている。

14はP106から出土した土師器の甕の口縁部である。頸部の屈曲は外面ではなだらかなのであるが、内面は稜をなす。器壁は厚く、端部は丸くおさめている。外面は縦方向、内面は横方向のハケメである。

16はP107から出土した土師器の甕の口縁である。端部はわずかに下に肥厚されている。二次焼成のためかもろい。

17はP109から出土した土師器の甕の口縁である。口縁部は外反し、口縁端部はヨコナデされ、わずかに下垂する。外面は縦方向のハケメが一部ヨコナデで消されている。口縁部の内面は横に近い斜め方向のハケメ、胴部は横方向のヘラケズリ。

18はSA02P05から出土した土師器である。甕の口縁。内面はハケメ。

13はSA02付近から出土した緑釉陶器の碗の破片である。内外面とも釉がかかっている。

19はP110から出土した土師器の小片である。外反し、端部は肥厚し、内側に小さく巻き込む。内面はハケメ、外面はヨコナデである。

## 2. 包含層から出土の土器

20～68は須恵器である。20～28は蓋である。20は小型であるが器壁は厚い。端部は屈曲し、内側に浅い沈線が走る。21・27は天井部がなだらかな傘形で、端部は下方に折り曲がる。22～24の天井部は平坦で、周縁にむかってゆるやかなS字状に屈曲する。24の端部は下方に折り曲げられているが、22・23の

端部は小さく丸くおさめるのみである。25は宝珠つまみである。中央が突出している。26は全体に扁平な形状をとる。端部は下方に折り曲げられている。28は環状つまみである。

29～35は杯Bである。29は口径に比して器高の高い深手のタイプである。30・31はやや外傾度の高いタイプである。30は器壁がやや厚い。31は高台がかなり内側に付く。また、高台の外側の端部は欠損している。32～37は口縁部を欠く高台のみの破片である。32の口縁部はほぼ直立気味に立ち上がる。33も口縁部が急角度で立ち上がるタイプである。35はやや厚手で底面に爪形文が巡る。36の内面の中央部は摩滅しており、なんらかの使用痕か。33・37は底面に自然釉薬が付着しており、伏せ焼きしていることが明らかである。38は稜碗である。

39～42は杯Aである。39はやや丸みを帯びた底部から口縁部直立気味に立ち上がる。焼成は不良で内外面とも薄く焼けている。40も丸みを帯びた底部である。41は平底から直線的に口縁部が開く。器高は低く浅い。42は41より外傾度大きい。

43～47・51は皿Aである。43・46・52のように平底のもの、それ以外のもののように底部が丸みを帯びているものがある。口縁部はおおむね直線的に開くが、47では外反しながら開いている。51は口縁部をつまんでヨコナデし、外反させている。52の底面にはごく薄い墨書と二条の圧痕がみられる。53の底部にも墨書がみられる。

48～50は皿Bである。48・49とも口縁端部の内側に凹線状に浅く窪んでおり、金属器模倣を意識したものと思われる。48は底面を回転ヘラ切り後ナデであるが、工具の当たった痕跡が残る。49は若干ひずむが胎土・焼成ともやや良好である。50は底部のみの破片である。やや軟質であるが、胎土は比較的良好である。

54～60は壺である。54は短い頸部である。口縁端部は上下に拡張するが、上端部は欠けている。55は長頸壺の頸部である。外面は左下がり、内面は右下がりの絞り皺がみられる。56の頸部は、内面のみ左下がりの絞り皺が残る。57は把手付きの壺の胴部である。把手が折れて欠損している。把手をはさんで突帯が付く。58はおそらく長頸壺の胴部である。肩の稜に1条の沈線が巡る。59は肩部に突帯が巡る壺である。突帯は断面V字に近いものである。60の突帯は断面台形である。上下逆の可能性もある。

右下がりの粘土皺がみられる。

61は捏ね鉢の口縁である。

62～64は甕である。62はほぼ直線的に開く口縁で、端部はカットしている。63はラップ状に開き、途中で90度に近い角度で外反する。口縁端部はつまみ上げている。64もラップ状に開く口縁である。口縁端部はヨコナデによって上下にわずかに拡張されている。

65は器台の脚である。凹線文と細かい波状文がほどこされている。

66～68は碗である。66はP105より出土しており、口縁端部外面に若干灰を被っている。67は底部である。底部外面は糸切り、内面の中央部は突出している。68は67より厚みがある。見込みに「一」のヘラ記号がある。

69～80は上師器である。69～74は甕である。69はわずかに外反しつつラップ状に開く。外面は指オサエ、内面は横方向のハケメ。70は口縁端部を上下に肥厚しており、外面はハケメで一部にヘラケズリ、内面は斜め方向のヘラケズリ。71は短く開く口縁の端部をつまみ上げて面を作り出し、そこに凹線を1条巡らせている。外面は縦方向のヘラナデ、ミガキ、内面は横方向のヘラケズリ。72の口縁は短く開く口縁である。器壁はかなり厚い。外面はハケメ後ナデ、内面は口縁部上方に横方向のハケメ、胴部は横

方向のヘラケズリ。73の器壁はかなり厚い。内面の一部にハケメがみられる。74は頭部である。胴部外面はハケメ、内面は摩滅のため不明であるがハケメか。薄く朱色の化粧土が残る。

75は高杯の脚柱部である。ほぼ円柱状で、外面はナデ、杯部は剥離している。

76は土師器の小皿である。底部は糸切りである。76の端部はやや厚くおさめられている。77・78は土師器の碗の底部で、いずれも底部は糸切りである。78は77より厚みのある底部である。

79・80は土師器の破片である。甕または鉢の口縁か。小片のため、口径や傾きは不明である。79の外面は縦方向、内面は横方向のやや粗いハケ、80は内外面とも主に横方向の板ナデである。

81は瓦質土器の碗である。口縁は端部付近でわずかに外反する。外面は板ナデ、内面はナデでわずかにミガキらしい痕跡が残る。82・83は黒色土器の碗の底部である。83は内側のみ黒色で、ミガキ、外面はナデである。82の高台の断面は三角形に近い。83は内面及び底面の高台の内側が黒色で、高台の外面は黄褐色である。高台は82に比べて高く、外側に踏ん張っている。

84～88は灰釉陶器である。いずれも小片のため、口径や傾きは推定の域を出ない。84は蓋である。一部軸がかかかっておらず、素地が露出した部分がある。85は碗の口縁部である。端部付近でわずかに外反する。86は底部で高台はケズリ出しである。87の底部は貼り付け高台である。88は碗の破片である。

89は緑釉陶器である。外面は黒緑色、内面は緑灰色と黒緑色の斑状、胎土は紫灰色で硬質である。

90・91は白磁である。90は玉縁口縁の碗である。91は碗の一部である。

92はてづくねのミニチュア土器である。中央は円柱状の工具で刺突した後ナデか。

### 3. 金属器

M1は鉄器である。頭部は釘にしてはややきゃしゃなつくりである。

M2・M3は銅銭である。M2は「政和通寶」である。铸造は北宋の政和年間（1111～1117）。M3の文字は一部欠けているが、奈良～平安時代前期にかけて朝廷が铸造した皇朝十二銭のうち、796年に铸造された「隆平永寶」である。

## 第4節 小結

梅ヶ作遺跡は奈良時代を中心とする掘立柱建物群で構成される遺跡である。周辺の確認調査の結果からみて、遺跡の範囲は極めて限定されたものであったと推定される。約100m谷を奥に入れば同時期の梶原遺跡があり、互いに類似点の多い遺跡である。両遺跡のように山裾に貼り付くように点在する律令期の小規模集落は、当地域ではこれまで調査例が無く、この時代の集落立地を考える上で重要な知見が得られたといえよう。

## 第5章 北山遺跡

### 第1節 概要

山東盆地の南西を縁取る標高300mを越す山塊の裾には低平な丘陵地帯が拡がり、幾筋もの細長い開析谷が入り込んでいる。こうした開析谷は古来より交通路として利用され、現在でも山東町と和田山町を結ぶ2本の県道が設けられている。その1つである「県道浅野・山東線」は「宝珠峠」を越えるルートで、道沿いには古墳時代から中世にかけての遺跡が点在している。北山遺跡もそのような遺跡の1つで、山東町側の峠口に立地する。盆地の西端を北流する与布土川の小支流、楽音寺川によって形成された細長い谷に挟まれた尾根上に立地し、縄原遺跡を見下ろす位置にある。

調査にあたっては、まず、調査対象地周辺の地形測量を行い、地形に応じて調査範囲を決定した。これをもとに、土層観察用の畔を尾根筋に沿って1本、これに直交させて2本設けた。この畔を境に調査区を1～6区に小区分し、さらに尾根平地両帝をa、斜面をbと細分した。調査対象地が山地であるため、掘削はすべて人力で行った。確認調査の情報を参考に、表土から地山面までの堆積土を掘削した後、土層観察用畔の写真撮影と実測を行った。その後、畔の除去と遺構精査を行い、SK01・SK02の2基の土坑と溝SD01を検出した。

遺構掘削が完了した後、全域を写真撮影用に仕上げ、東西2方向から写真用足場上からの撮影を行った。最後に遺構実測と地形測量用の空中写真を撮影し、調査を終えた。

### 第2節 遺構 (図版26・27)

検出された遺構はSK01・SK02の3基の土坑と溝SD01である。SK01とSK02は尾根上にあり、表土直下の地山岩盤上で検出された。SD01は北側斜面にあり表土下約50cmの黄褐色粘質土上で検出された。

#### SK01

SK01は径2.25mの円形土坑で、深さは2.2m、すり鉢状に掘り集められている。埋土は地山が崩壊して流れ込んだような堆積状況を示すが、その上部には炭化物の集中が認められる。炭化物はすり鉢状に分布しており、それに混じって炭化材1点が斜めに置かれていた。

出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行ったところ、第7章に述べられているように、出土した炭化物2点の<sup>14</sup>C年代は、2170±30yrBP (No.1:IAAA-71585)、2160±40yrBP (No.2:IAAA-71586)であり、暦年較正年代(1σ=68.2%)は、No.1が360～290BC(41.5%)・230～170BC(26.7%)、No.2が360～290BC(35.0%)・230～160BC(33.2%)という結果が出た。

#### SK02

SK02は、北側斜面下方で検出された土坑である。直径2.2～2.4m。漏斗形の2段に掘削されており、上部は直径2.2mのほぼ円形、下部は一辺0.7mの方形を呈する。急傾斜の斜面にあることから、風倒木

の可能性も考えられるが、2.65mもの深さがあり、下部は地山岩盤をほぼ垂直に掘削していることから、人為的な所産であると判断した。

#### SD01

SD01は尾根稜線を断ち切るように掘削された溝で北側斜面では東に屈曲する。中央部での幅1.5m、深さ0.6mを測る。

### 第3節 遺物 (図版27)

遺物は調査区西端付近で南側斜面の流土内から土師器が1点出土したにすぎない。小片であるため、時期の判断は困難であるが、古墳時代前期の甕の口縁部ではないかと考えられる。

### 第4節 小結

北山遺跡で検出された遺構は生活の痕跡を示唆するものとは直ちに考えにくく、何らかの別の性格が想定される。尾根上に立地することから、墓や落とし穴などの可能性がまず考慮されるが、土坑の形態や深さ、埋没状況を見ると、そのどちらにも相当する可能性は低い。SK01で検出された炭化材のAMSによる放射性炭素年代測定によれば、紀元前360年～160年という年代が考えられ、斜面から出土した土師器の年代とは合致しない。今後の類例を待って、性格を判断すべきであろう。また、土器については、土坑以外の別の時期の遺構との関連を考える必要がある。

## 第6章 大月北山古墳群

### 第1節 概要

遺跡は朝来市山東町大月に所在するが、平成17年4月の合併以前は朝来郡山東町大月となる。北側に標高308m、南側に標高309mの山頂を主峰とする山塊間の鞍部にあたり、同市山東町清水で国道9号線から分岐した県道浅野・山東線が西方から伸びて、細い谷間の奥にある標高126mの峠を通過して、和田山町加都において国道312号線と連絡している。

朝来市北半域を形成する旧和田山町と旧山東町は、町域を東西に接して位置する。円山川の支流である与布土川流域を中心とする山東町と、円山川本流域に広がる和田山町間に南北に伸びる山塊の稜線が、両町の町境を形成していた。そのため、両町を東西に結ぶ路線は北側では国道9号線であり、南側では山東町喜多垣から和田山町竹田に抜ける県道溝黒・竹田線と、その中間に位置する県道浅野・山東線となっている。本遺跡の東側には「向大道」の字名も見られるように、本地域が東西交通の重要なルートであったことが知れる。

本遺跡の西側に伸びる尾根が両町町境であり、さらにそのひとつ西側の小尾根先端部に史跡茶すり山古墳が所在する。旧町境を成す尾根が高いため、本遺跡から和田山町側を望むことはできないが、山東町の平野部南半を一望する位置を占める。本遺跡の所在する尾根からは、平野部に向かう東西方向の支尾根が3本派生しており、その北側と中央部の支尾根に挟まれた幅10m程の狭小な谷間を昇り詰めた尾根鞍部が、本遺跡にあたることとなる（県道浅野・山東線の宝珠峠が標高的には低い）。

平成12年度の確認調査の結果、主尾根部の稜線上を中心とする延長約80m、面積1,344㎡の「1区」と、支尾根部分の延長約40m、面積377㎡の「2区」の2地区を本発掘調査の対象範囲とし、平成14年1月7日～平成14年3月13日にかけて実施した。地形的にも重機の導入が困難であることから、掘削はすべて人力により行った。また、調査着手前の現況および掘削終了後の全体地形の測量は航空測量により実施し、周辺の地形については、国土交通省近畿地方整備局豊岡工事事務所が作成した測量図を準用した。

### 第2節 遺構（図版28～35 写真図版34～37）

#### 1. 1区

南北に伸びる尾根稜線上を中心に、延長約80m、面積1,344㎡の調査区であり、緩やかに屈曲する変形「へ」字形の平面形となる。調査区幅員は、支尾根との接合部付近で最大となり約22m、最狭は調査区北端部で約12mとなる。調査区の中央やや南側に鞍部があり、北側の最高所で標高180m、南側で178.5mを計る。

確認された遺構は3基であり、第1は1号墳（SX01）とする埋葬施設である。鞍部北側の最高所付近の稜線は狭い範囲で傾斜がかなり緩やかになっており、その緩斜面地を使用した標高179m付近に位置し、主軸は尾根と同一方向の北西-南東を取る。第2は、鞍部の南側に位置する埋葬施設であり、2

号墳 (SX02) とするものである。鞍部南側で178.5mの最高所となる場所に設けられており、尾根に直交するようにほぼ東-西の方向となる。第3は、鞍部に設けられていた旧宝珠峠の道代である。調査前の地形ではまったくその存在を看取することができないほど、ほぼ完全に埋没していたものである。道代は尾根を直交するのではなく、北東-南西にやや斜めに掘り切られている。

遺跡の所在する尾根は、黄褐色から明褐色を呈する花崗岩の風化土と花崗岩を基本土質としており、本調査区内でも部分的に花崗岩が露頭するが、基盤岩ではないことから風化土の中に転落岩として含まれているものと推定される。

各遺構の詳細については、下記に示すとおりである。

### 1) 1号墳

基本形態：長方形掘方内に箱式石棺を内部構造とする埋葬施設である。

堀方：隅丸長方形の平面形態であるが、南長辺が西にずれるために僅かに菱形を呈する。壁面は約55度の角度で立ち上がる。特に、南西隅部には足掛要の段が二段設けられている。側辺約4.2m、小口辺約3.0m。深さは西側で約60cm、東側で40cmを計り、壙底はほぼ平坦となる。

石棺構造：棺に利用されている石材はすべて割石（山石）であり、川原石の使用は認められない。天井には比較的扁平な石材を7石用い、側板は南北の両側とも4石で構成する。小口板は両側板石に挟み込まれる型式であり、両方ともその裏に控えの石材を立てる二重構造となる。小口は一枚作りの石材であり、側板も基本的には長方形の石材を一段積みで利用しているものの、不成形箇所については間詰め石材を利用している。床石は無く、掘方直上に薄く床面の整地を看取することができる。天井石・棺材とも東側を大型とすることから、東頭西足の方向をとっていたものと思われる。また、足部側的小型不成形の側板材を固定するため、裏押さえの石材を多用している。棺内寸法は、長さ165cm、頭部側幅約40cm、足部側幅約35cm、棺高約25cmとなる。

また、小口・両側壁および天井などの石材内面に赤色顔料が薄く残存しており、南壁部の内面を中心として塗布されたことが知れる。

被覆粘土：基本的に石棺外面では、明らかな粘土の被覆の状態を確認することはできなかった。だが、側板裏側および天井石を除去した後の側板上面に、部分的にふい黄色の粘土が残存していた。このことから、本来的には石棺外面の全体を粘土で被覆していたが、施行状態が十分でなかったことから、後世に消失したものと想定される。因みに、棺内埋土が非常に硬質であったことは、この被覆粘土が棺内に入射したことによるものと思われる。

棺材掘付け堀方：溝状にロ字形に設けられる。掘削幅は不均一であり、頭部側が広くて約30cm、最狭部では約10cmとなる。さらに、小口部分は小口板を立てるためにさらに一段深い掘削を行っている。

棺内遺物：棺内からは、土器はまったく出土していない。棺内遺物としては、頭部側小口板と頭部北側壁の際で刀子様の鉄器2点 (M2・M3) と、足側小口板際で鉄線中子様の鉄器1点 (M4) が出土した。また、足側小口板から40cmまでの範囲で、175個の滑石製管玉 (J1~J175) の散布を確認した。ただ、その分布に糸にとおされていたような連続性はなく、垂直分布も20cmあまりの幅をもつことから、被葬者の埋葬に際して蒔かれた可能性も否定できない。

棺外遺物：掘方埋土内からも土器はまったく出土していない。ただ、足部南側の側板裏込め石の上面に、柄部を被葬者の頭部側とし、棺に平行に置かれた鉄剣 (M1) が1振ある。その位置関係から、被

覆粘土によって石棺と一緒に葺かれていたものと推測される。

## 2) 2号墳

基本形態：長方形竈方の内部に、木棺を内部構造とする埋葬施設である。

堀方：側辺長約5.5m、西側小口幅約3.3m、東側小口幅約2.5mの隅丸長方形平面を呈する。壁面は約65度の角度で立ち上がる。

木棺：堀方の中央若干南側に据えられる。全長約365cm、幅約40cmを計る。東西の両端から約75cmのところまで一段（約6cm）深くなり、その内側に礎床が設けられていることから、この約215cmの間が被葬者を埋葬するための空間（主室）であり、その両側は副室として設けられたものと想定される。主室の東端部には2つの川原石からなる石枕が設けられ、その西側に小さな円礎を用いて礎床を作るが、礎の量が少ないために部分的に欠落箇所が見られる。

遺物：棺内からは、主室・副室含めて遺物はまったく出土していない。ただ、北側板の棺外堀方内において、鉄剣（M5）が1振副葬されている。被葬者の右腕部にあたる箇所であり、柄部を石枕側に向け、木棺とはほぼ並行する位置関係にある。

## 3) 旧宝珠峠道代

調査区内において、延長約18m分を確認した。幅員は東口部が最も広く、120cm、中央部で80cmを計る。路面はほぼ平坦であり、東西方向の傾斜もなく、概ね水平に路面を確保している。切通しは標高170m弱付近から始まり、両方の壁面は約70度の角度で切り上がる。そのため、尾根稜線部での路面との比高は約4mに達する。

現在の県道浅野・山東線が通過するまでは、この道代が峠道として機能していたとのことである。道代が尾根を直角に切っていないのは、2区の方角から山腹斜面伝いに進み、本切りどおしを通過して尾根の西側の斜面を南の谷筋に向かって降りていたために、切どおしの東端が北に振ったものと想定される。

## 2. 2区

1区の1号墳（SX01）の位置する付近から東に延びる支尾根の、稜線部分を中心とした調査区である。調査区平面は「へ」字形となり、延長約39mである。幅員は東端部が最も広くなり約13m、最小幅は主尾根との接合部分であり、約4mを計る。標高は調査区の北東部が最も高く標高173m、主尾根との接合部が鞍部となって最も低く標高169mとなる。

本調査区での検出遺構は、落とし穴状遺構3基と道代1条である。落とし穴状遺構は鞍部の直ぐ東側の稜線上にあり、3基が一直線に並ぶ。道代は尾根筋をほぼ直交する状態で掘り切られており、調査区の南北外にさらに伸びていくことが知れる。各遺構の特徴は次のとおりである。

### 1) 落とし穴状遺構

平面形は若干尾根稜線方向に長くなる小判形を呈し、長径60～70cm、短径50cmの規模となる。壁は垂直或いは若干開き気味となり、坑底は浅い皿状にやや窪む。3基のうち中央と東側の2基には、坑底のほぼ中央部に径5cmほどのピットが1箇所設けられている。深さは、現状で50～70cmを計ることができる。

## 2) 道代

調査区内で現長4m分を確認している。路面の最大幅は南側で約2.5m、稜線部が最も狭く約1.5mの規模となる。こちらも路面がほぼ水平に切り通されているが、1区の旧宝珠峠道代ほどの深い掘り込みはなく、稜線上部との比高は1m程度である。その形状と方向から勘案し、1区の旧宝珠峠道代と一連の旧道であり、未調査区を介して両者が連続する道代であったものと想定させる。そうすると、2区を北に通過した道代はそのままほぼ水平に稜線上を北に進み、稜線に傾斜が急になるあたりから、尾根の斜面を下って調査区北側の谷筋に降りていたものと推定される。この道筋が旧山東町と旧和田山町の両地区を結ぶ、かつての峠越えのルートであったものと推定される。

## 第3節 遺物 (図版36~38 写真図版38・39)

### 1. 1号墳 (SX01)

1号墳 (SX01) 出土遺物には棺外出土の鉄剣のほか、棺内から出土した鉄刀子、小玉などがある。

#### 鉄剣 (M1)

全長36.6cm、身部長28.25cm、身部最大幅2.7cm、厚さ約0.3cm程度の短い剣で、茎長8.45cm、茎幅1.8cm、茎厚0.25cmである。茎の端付近に直径0.4cmの目釘孔が穿たれている。かすかに鐮状に認められるものの、全体に薄く扁平で、現状では反っており、実用品として機能するかどうか疑問である。身部内部の残存状況は悪く、錆化により空洞化している。外面はほぼ全体に木質が付着しているが、閃部で塗切れていることから、鞘の木質と判断される。把部分にも部分的に木質が残存している。

#### 鉄刀子 (M2・M3)

M2は全長8.05cmのはほぼ完形品で、刃部の一部を欠損する。全体に背反りの形状を呈し、背側にも関が認められる。身部の断面では背幅が0.6cmと広いが、錆化によるものの可能性が高く、本来はその半分程度であろう。茎部には木質の遺存が認められる。身部最大幅1.25cm、茎部長2.65cm、茎部幅0.8cm、茎部厚0.25cmを測る。M3は刃部および先端を欠失し、残存長6.55cmとなっている。両関のタイプで、身部最大幅1.45cm、背幅は0.4cmを測り、刃部は片側から造り出しているようである。茎長は2.9cm、茎最大幅1.0cm、茎最大厚0.2cmを測る。茎部には把の木質が付着している。

#### 不明鉄器 (M4)

横断面は一边0.4cm程度の矩形を呈し、鉄鍔の茎の可能性のある破片である。残存長は2.3cmを測る。

#### 小玉 (J1~J175)

棺内西端付近で出土した滑石製小玉(白玉)の出土総数は176点であるが、1点は破損のため図化・撮影できなかった。全体的に緑がかかった乳灰色を呈し、直径は3.5~5.5mm、厚さ1.0~3.5mm、孔径は0.9~1.5mmを測るが、直径の大半は4.0~5.0mmの範囲内におさまる。番号は直径の小さいものから順に付したが、厚さは斜めに截断されているものがあり、径と厚さの相関関係は認められない。玉の上下面およ

び側面には研磨痕が認められ、側面中央に稜を有することにより算盤玉状を呈するものも存在するが、点数は多くはなく、大半の側面は直線的である。厚さに均一性がなく、上下面が斜めになっているものが多いこと、孔の周囲に欠損部分が認められるものがあることから、1点ずつ片側穿孔されたものと判断され、かつてカチャ古墳の報告で指摘した(註)のように、角柱なし円柱を作成したのち、1点ずつ切り出し、その後穿孔するといった方法により製作されたものと推定される。

なお、玉は撒かれたような出土状況を呈していたが、175点に糸を通して計測した総延長は約41cmであり、糸を結んだ状態のままでは大人の頭は通らず、2重にした際にも大人の手は通らない。

## 2. 2号墳 (SX02)

### 鉄剣 (M5)

茎部および切先を欠失するが、残存長68.0cm、身部長64.0cm、身部最大幅4.75cmを測る大型鉄剣で、棺に副葬されていたものであろう。最大厚0.65cmで、身部には錆は認められず、横断面はレンズ状を呈している。身部表面には木質が付着しており、関部手前で途切れていることから、鞘の木質と判断できる。また、鞘木質と1.1cmの間隔をあけて関部に残存している木質は把縁装具と思われる。したがって、空白部分には鞘口装具が存在していたものと推定される。関部は傾斜をもって茎部へと続く、いわゆる「なで関」の形状で、茎部幅は2.15cm、茎厚は0.5cmである。なお、現重量は578gを測る。

### その他

M6は1地区西斜面から出土した雁股鎌である。身部および茎部の先端を欠失し、残存長10.75cmを測る。茎部横断面は一辺0.6cmの正方形を呈する。筥被部分には傘状の突帯が付けられている。刃部は内側のみで、刃部の断面は三角形、基部に近い身部の横断面は楕円形を呈する。

(註)山本三郎・渡辺昇編1983『半坂峠古墳群・辻遺跡』兵庫県文化財調査報告 第18冊 兵庫県教育委員会

## 第4節 小結

### 1. 埋葬施設の時期

2基の遺構とも、棺内外および周辺からも該当時期の土器がまったく出土していないことから、明確に時期を特定したい状態にある。1号墳の主体部 (SX01) は滑石製の管玉を副葬することから、5世紀代に属するのではないかと大まかに想定することができる。さらに詳細な時期確定のため、石棺の構造的特徴から類例を求めることとする。

SX01の石棺における平面形の形態的特徴は以下のとおりとなる。

- ① 頭・足両側の小口板とも側板が挟み込む。
- ② 両小口板ともかなり側板の端部付近に寄り、副室の形態はまったく見受けられない。
- ③ ただ、両小口板とも裏に控え石を伴うことから、副室の意識が残っているのではないと思われる。
- ④ 長い板状剝離石材ではなく、比較的厚味のある割石材を用いる。

こうした特徴を持つ石棺は、但馬地域では田多地6号墳第2主体(豊岡市)と市条寺2号墳(朝来市)にみることができる。これらの類例は、同一墳丘内の他の主体部との関連や前後する形態の石棺との関

係等から、5世紀中葉に属するのではないかと考えている。SX01の場合、③の特徴は古い時代の形態的特徴を示すものであるため、5世紀中葉でもより前葉に近い時期に当たるのではないかと推定できる。下記の(2)で述べる茶すり山古墳との関係からみて、ほぼ同時期に存在する意義が高いと考えると、茶すり山古墳が5世紀前半代におさまるとされているため、両者とも時期的には大きな顛転を来すことはないこととなる。

2号墳についてはさらに時期の特定は困難となるが、木棺直葬主体部・石枕・礎床・副室構造といった埋葬施設の諸用件を講たす類例は、茶すり山古墳の第1主体部のみとなる。規模・副葬品の内容等から両者を対等に比較することはできないにしても、ある程度の時期的特徴を反映していると捉えると、2号墳もやはり5世紀中頃を前後する時期の所産として考えることもできる。

## 2. 埋葬施設の存在意義

この尾根越えの道を地元では古くから「宝珠峠」と呼び、現在では県道浅野・山東線が敷設されて市内東西交通の路線が確保されている。この路線の存在は、少なくとも平安時代末頃まで遡ると推定される。平成9年に、播但自動車道路の建設事業に伴って発掘調査を行った加都遺跡(旧和田山町)では、南北に一直線に伸びる道路遺構(但馬道)が検出されている。その調査区の南端部分で、東の筒江地区に向かう道路遺構が枝分かれしていることが確認されている。その枝道を東進すると、茶すり山古墳の山裾部を通過して、本調査区にあたる宝珠峠に向かうこととなる。峠を越えると、旧山東町内で丹波から遠坂峠を越えて北伸する古代山陰道と合流する。

5世紀前半の但馬地域の首長墓として史跡指定を受けた茶すり山古墳が、主要平野部を形成する円山川流域には直面せず、そこから派生する狭小な筒江地区の谷内部に所在している。王墓がこうした小さな谷の中にあえて築かれた要因のひとつとして、宝珠峠越えの東西ルートを押さえる意味合いが大きかったものとも考えられる。本遺跡の2基の埋葬施設も位置的にはまったく茶すり山古墳と同様の条件にあり、旧山東町域側(与布土川流域)の出入口部を見下ろす場所に築かれている。茶すり山古墳の被葬者を頂点とする但馬地域の政権構成のなかであって、小古墳あるいは本遺跡のような埋葬施設だけの“墓”を築いた地域権力者(政権構成員)との社会的関連を示すものと捉えることができる。

第1表 梶原遺跡出土遺物計測表

・遺構名は調査時のままである \*は底径を示す

報告実図	種別	器種	出土地区・遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	残存 (cm)	備考
1	85	須恵器 杯B	3c区 S305南北方向		(16.5)	(4.3)	1/4	
2	86	土師器 壺	3c区 S306	東西方向	(14.4)	(4.6)	1/4	
3	18	土師器 甕	1a区 S2	埋土	(15.2)	(6.0)	1/4	
4	63	土師器 鍋	S26堀方		(28.0)	(8.3)	1/8	
5	107	須恵器 蓋	3c区 土器群A東		(14.2)	2.5	1/8	
6	67	須恵器 杯B	3c区 土器群A東		(14.85)	3.1	1/4	
7	65	須恵器 杯B	3c区 土器群A東		(14.9)	(4.5)	1/2	
8	99	須恵器 杯	3c区 土器群A東		(15.0)	(4.0)	1/3	
9	94	須恵器 壺	3c区 土器群A東		(29.0)	(9.0)	1/5	
10	69	須恵器 杯身	3c区 土器群B-③		(13.4)	(2.8)	1/2	
11	68	須恵器 杯	3c区 土器群B-③		(14.0)	(3.8)	1/8	
12	100	須恵器 壺	3c区 土器群B-③		9.8	(6.75)	1/5	
13	70	土師器 甕	3c区 土器群B-②		(21.2)	(4.65)	1/4	
14	74	土師器 壺	3c区 土器群B-③		(22.7)	(6.4)	1/4	
15	83	土師器 鏡	3c区 土器群B-③		(34.6)	(7.9)	1/12	
16	76	土師器 鍋	3c区 土器群B-②		(36.9)	(7.1)	1/5	
17	77	土師器 鍋	3c区 土器群B-③		(44.0)	(9.8)	1/4	
18	75	土師器 鍋	3c区 土器群B-③		(45.6)	(6.2)	1/8	
19	64	土師器 鍋	3c区 土器群A東		(40.0)	(6.3)	1/9	
20	66	土師器 鉢	3c区 土器群A東		(58.3)	(10.4)	1/8	
21	71	土師器 鍋	3c区 土器群B-②		(43.9)	(6.05)	1/8	
22	72	土師器 鍋	3c区 土器群B-②		(45.0)	(12.4)	1/8	
23	73	土師器 鍋	3c区 土器群B-②		(49.6)	(7.0)	1/8	
24	79	土師器 鍋	3c区 土器群E		(51.1)	(6.9)	1/3	
25	84	須恵器 杯B	3c区 土器群C南検出面	単独出土の須恵器	17.6	4.3	ほぼ完	
26	81	須恵器 杯B	3c区 土器群C		(17.0)	(4.5)	1/4	
27	82	須恵器 碗	3c区 土器群E		*(7.8)	(2.5)	2/3	
28	80	須恵器 高杯	3c区 土器群E		(13.2)	(4.8)	1/4	
29	78	須恵器 甕	3c区 土器群E		(11.05)	(3.0)	1/2	
30	14	須恵器 蓋	1a区 池の土掘り中	包含層	(15.1)	2.7	1/8	
31	17	須恵器 蓋	1a区 池の土掘り中	包含層	14.3	1.8	3/4	
32	18	須恵器 杯蓋	1a区 池?	黒色砂質シルト	-	(2.55)	-	
33	1	須恵器 杯蓋	1区 谷部中央	黒色砂質シルト	(16.15)	(3.9)	1/2	
34	45	須恵器 蓋	2区 谷部	黒灰色砂質シルト	(15.8)	2.6	1/4	
35	96	須恵器 杯蓋	2区 東半	黒灰色砂質シルト・ 黒色砂泥じりシルト	(16.25)	(3.8)	1/2	
36	44	須恵器 杯蓋	2区 西半	黒灰色砂質シルト・ 黒色砂質シルト	(17.5)	(3.8)	ほぼ完	
37	41	須恵器 蓋	2区 西半・東半	黒灰色砂質シルト	17.2	2.8	1/2	
38	43	須恵器 蓋	2区 西半	黒灰色砂質シルト	-	(2.2)	1/4	
39	110	須恵器 蓋	3c区 サブトレ2・3間	暗褐色砂質シルト	(16.4)	(3.3)	1/3	
40	108	須恵器 蓋	3c区 サブトレ2・3間	暗褐色砂質シルト	17.5	2.85	1/3	
41	112	須恵器 蓋	3c区 サブトレ2・3間	暗褐色砂質シルト	(16.6)	2.0	1/3	
42	106	須恵器 蓋	3c区 遺構面検出	暗褐色砂質シルト	(14.2)	(1.75)	1/6	
43	10	須恵器 杯B	1a区 地トカット直上	整地層?上面	(16.3)	(4.0)	1/2	
44	16	須恵器 杯B	1a区 池の土掘り中	包含層	(14.9)	(3.5)	1/8	
45	6	須恵器 杯B	1a区	主に黒オクの上の層	(13.0)	(3.9)	1/4	
46	26	須恵器 杯B	2区 西半	黒色砂質シルト	(11.2)	4.1	1/6	
47	25	須恵器 杯B	2区 西半	黒色砂質シルト	(12.8)	3.8	1/6	
48	29	須恵器 杯B	2区 西半	黒色砂質シルト	(13.7)	4.35	1/4	
49	28	須恵器 杯B	2区 西半	黒灰色砂質シルト	(14.6)	4.25	3/4	
50	38	須恵器 杯B	2区	黒色砂質シルト	(14.7)	3.85	1/4	
51	27	須恵器 杯B	2区 西半	黒色砂質シルト	(13.75)	3.55	1/4	
52	88	須恵器 杯B	3c区 整地層	黒色砂質シルト	(15.4)	4.8	1/3	
53	102	須恵器 杯B	3c区 サブトレ3周辺	砂泥じりシルト	(15.3)	3.95	2/3	
54	103	須恵器 杯B	3c区 サブトレ3周辺	砂泥じりシルト	(17.1)	4.4	1/2	
55	40	須恵器 蓋	つまみ 2区	黒灰色砂質シルト	-	(1.5)	-	
56	111	須恵器 椀	3c区	暗褐色砂質シルト	*(12.2)	(6.2)	1/4	
57	47	須恵器 椀	2区 東半	黒灰色砂質シルト	(16.5)	(5.25)	1/8	
58	37	須恵器 椀	2区	黒色砂質シルト	*(10.6)	(2.95)	-	
59	7	須恵器 杯蓋	1a区	黒色土(主に南壁)	(11.0)	3.7	2/3	
60	12	須恵器 杯	1a区 池?	黒色砂質シルト	(11.3)	(2.15)	1/8	
61	95	須恵器 杯蓋	3c区 サブトレ2・3間	暗褐色砂質シルト	10.4	3.55	ほぼ完	
62	104	須恵器 杯	3c区 サブトレ3周辺	黒色砂質シルト・砂 泥じりシルト	(10.1)	4.0	1/4	
63	90	須恵器 杯	3c区 サブトレ2・3間	暗褐色砂質シルト	*(5.2)	(3.45)	-	
64	97	須恵器 杯A	3c区 サブトレ2・3間	暗褐色砂質シルト	(12.6)	3.8	3/4	
65	30	須恵器 杯A	2区 西半	黒灰色砂質シルト	(12.9)	3.4	1/4	

報告	測測	種別	器種	出土地区・遺構	層位	口部直径 (cm)	器高 (cm)	残存 (cm)	備考
66	34	須恵器	杯A	2区 東半	黒灰色砂質シルト	(12.5)	(3.0)	1/4	
67	31	須恵器	杯A	2区 西半	黒灰色砂質シルト	(12.9)	8.05	1/4	
68	32	須恵器	杯A	2区 西半	黒灰色砂質シルト	12.7	3.5	ほぼ完	
69	33	須恵器	杯A	2区 西半・東半	黒灰色砂質シルト	(12.9)	3.55	1/2	
70	11	須恵器	杯A	1a区 池?	黒色砂質シルト	(15.4)	3.6	1/6	
71	58	須恵器	杯A	2区 №3~4	暗灰色砂質シルト	(16.2)	3.75	1/8	
72	120	須恵器	高杯	3c区 掘乱東西溝		*10.0	(8.4)		
73	101	須恵器	碗	3c区 遺構南検出	暗褐色砂質シルト	(13.0)	4.15	1/8	
74	35	須恵器	碗 底部	2区 東半	黒灰色砂質シルト	*4.95	(1.4)	全割	
75	19	須恵器	盞 口縁部	2区	黒色砂質シルト	(12.2)	(10.9)	1/4	
76	21	須恵器	盞 頸部	2区 西半	黒色砂質シルト	-	(8.1)	-	
77	39	須恵器	盞 杯部	2区 北半・東半	黒灰色砂質シルト・ 暗灰色砂質シルト	-	(7.6)	1/8	
78	2	須恵器	盞? 底部	1a区	黒色土	*13.3)	(5.6)	1/5	
79	3	須恵器	盞	1a区	黒色土	(9.2)	(5.3)	1/8	
80	89	須恵器	盞	3c区 整地層	暗褐色砂質シルト	(10.0)	(6.9)	1/3	
81	121	須恵器	盞 底部	3c区 掘乱東西溝		*19.8)	(9.75)		
82	8	須恵器	盞 底部	1a区	黒色土の下の暗褐色土	*4.0)	(4.45)	1/2	
83	92	須恵器	平皿 口縁部	3c区 サブトレ2・3間	暗褐色砂質シルト	(11.8)	(7.4)	1/2	
84	119	須恵器	平皿 胴部	3c区 掘乱東西溝		*17.2)	(9.65)	1/6	
85	118	須恵器	甕 口縁部	3c区 畦1と畦2の間	遺構面1段下げ	(17.3)	(8.4)	1/4	
86	117	須恵器	甕 口縁部	3c区 畦1と畦2の間、サ ブトレ3周辺	遺構検出前まで・砂 混じりシルト	(17.8)	(22.35)	1/4	
87	22	須恵器	甕 口縁部	2区 西半・№2~3	黒色砂質シルト・暗 灰色砂質シルト	(20.0)	(13.5)	1/3	
88	23	須恵器	甕 口縁部	2区 西半・東半	黒色砂質シルト・黒 灰色砂質シルト	(26.8)	(22.75)	1/3	
89	24	須恵器	甕 口縁部	2区 西半	黒色砂質シルト・黒 色砂混じりシルト	(38.3)	(8.15)	1/6	
90	20	須恵器	横瓶 胴部	2区 東半	黒色砂質シルト	*36.7)	(17.85)	1/2	
91	93	須恵器	横瓶 底部	3c区 サブトレ2・3間	暗褐色砂質シルト	*48.0)	(28.6)	1/4	
92	95	須恵器	横瓶	3c区 サブトレ2・3間、 3周辺	暗褐色シルト・暗褐色シ ト混じり砂・暗灰色シ ト・黄砂	(10.15)	(25.0)	1/3	
93	46	須恵器	横瓶	2区		(12.45)	(23.5)	ほぼ完	
94	91	須恵器	壺 口縁部	3c区 サブトレ2・3間	暗褐色砂質シルト	(13.3)	(4.1)	1/2	
95	123	須恵器	壺 胴部	2区	黒色砂混じりシルト	*33.5)	(37.0)	1/3	
96	5	土師器	壺 口縁部	1a区	主に黒ボクの上の層	(12.3)	(6.4)	1/4	
97	15	土師器	壺 口縁部	1a区 池の土盛り中	包含層	(16.0)	(6.95)	1/8	
98	62	土師器	壺 口縁部	3b区 拡張区	暗灰色シルト質砂・ 灰色砂礫層の直上	(15.5)	(10.9)	1/2	
99	55	土師器	壺 口縁部	2区	黒色砂まじりシルト	(15.6)	(6.4)	1/8	
100	49	土師器	壺 口縁部	2区 東半	黒灰色砂質シルト	(18.1)	(4.45)	1/8	
101	56	土師器	壺 口縁部	2区	黒色砂質シルト	(16.9)	(4.6)	1/5	
102	51	土師器	壺 口縁部	2区 東半	黒灰色砂質シルト	(21.0)	(4.35)	1/8	
103	50	土師器	壺 口縁部	2区 東半	黒灰色砂質シルト	(18.0)	(4.9)	1/8	
104	48	土師器	壺 口縁部	2区 東半	黒灰色砂質シルト	(20.6)	(3.55)	1/8	
105	105	土師器	鍋 口縁部	3c区 サブトレ3周辺	砂混じりシルト	(39.6)	(5.7)	小片	
106	52	土師器	鍋 口縁部	2区	黒色砂まじりシルト	(43.2)	(7.2)	1/8	
107	53	土師器	鍋 口縁部	2区 西半	黒灰色砂質シルト	(45.4)	(7.8)	1/12	
108	98	土師器	鉢 口縁部	3c区 サブトレ2・3間	暗褐色砂質シルト	(48.0)	(5.0)	1/8	
109	114	土師器	鉢 口縁部	3c区 畦1と畦2の間	遺構検出前まで	(42.8)	(6.15)	1/8	
110	116	土師器	鉢 口縁部	3c区 畦1と畦2の間	遺構検出前まで	(46.8)	(8.15)	1/8	
111	115	土師器	鉢 口縁部	3c区 畦1と畦2の間	遺構検出前まで	(45.3)	(8.1)	1/8	
112	60	埴輪陶器	腕 体部	3b区	オリーブ灰包含層	-	(3.15)	小片	
113	59	黒色土器	碗 底部	2区 №3~4	暗砂質シルト	*8.9)	(1.7)	1/2	
114	113	土師器	平丸	3c区	暗褐色砂質シルト	5.9	2.55	小片	
115	109	土師器	?	3c区 サブトレ2・3間	暗褐色砂質シルト	2.3	1.85	1/3	
116	61	弥生土器	器台 口縁部	3b区	砂礫層直上	(15.5)	(3.5)	1/8	
117	57	弥生土器	高杯 胴柱部	2区	黒灰色砂質シルト	-	(10.05)	-	
118	87	土師器	脚?	3c区		2.7	6.95	-	
119	4	製塩土器	口縁部	1a区	黒色土	(16.4)	(6.25)	1/4	
120	54	製塩土器	口縁部	2区	黒色砂質シルト	(12.8)	(7.45)	1/4	
121	9	土師器	皿? 口縁部	1a区 地下カット直上	整地層? 上面	(17.6)	(3.0)	1/4	

## 木製品

報告番号	実測番号	地区	遺構	層位	その他	種類	器種	樹種	大きさ (cm)			残存
									長さ	幅	厚さ	
W1	5	27トレンチ				鎌貝?	木筒	スギ	13.5	4.35	0.55	
W2	M10	3b区				農具?	田下駄?	スギ	34.65	14.3	2.0	ほぼ完形
W3	M19	3b区	旧河道	褐色砂		農具?	田下駄?	スギ	34.45	(6.55)	1.45	下半欠損
W4	M44	3b区		主に砂礫層上面		農具?	田下駄?	スギ	(40.3)	(8.7)	3.0	上半残
W5	M96	2区		黒色砂質シルト		鎌貝	火鑪板	スギ	(46.65)	4.15	2.45	下半欠損
W6	M16	2区西平		黒灰色砂質シルト		鎌貝	火鑪板	スギ	(25.3)	(4.1)	2.5	一部欠損
W7	1	29トレンチ			芯持材	不明品	マツ檜柳 継ぎ束垂屋	(20.06)	3.4	(2.95)	下半欠損	
W8	M56	2区		黒灰色砂質シルト		?	スギ	(20.3)	2.76	(2.2)	下半欠損	
W9	M37	2区		黒色砂質シルト			スギ	(29.38)	4.0	1.85	?	
W10	M34	3b区	南側溝			用途不明品	ガマズミ属	(23.7)	6.3	(2.6)	先端欠損	
W11	M17			黒灰色砂質シルト		容器	由物(炭灰)	サワラ	18.4	—	0.9	3/4残
W12	M31	2区		黒色砂質シルト		容器	由物(炭灰)	スギ	12.7	6.9	0.9	1/2残
W13	M54	2区		黒色砂質シルト		?	スギ	(17.0)	(11.9)	(2.9)	?	
W14	M25	1b区	池?	黒色砂質シルト上面		建築部材	榿?	スギ	(95.5)	16.2	5.9	?
W15	M43	3b区		砂礫層上面			部材	スギ	(59.05)	(12.0)	(2.2)	?
W16	M23					建築部材	部材	スギ	67.6	14.9	(2.5)	ほぼ完形
W17	M20	3b区	南側溝			建築部材	厚の部材	スギ	105.4	16.75	2.6	ほぼ完形?
W18	M21	3b区	旧河道S-302	灰色砂		建築部材		スギ	103.2	20.2	9.1	?
W19	M26	3b区	南側溝			建築部材	部材	スギ	132.69	11.9	6.3	?

第2表 梅ヶ作遺跡出土土物計測表

・遺構名は調査時のままである \*は底径を示す

報告番号	実測番号	種別	器種	出土地区・遺構	層位	口径底径 (cm)	器高 (cm)	残存 (cm)	備考	
1	5	須恵器 杯	底部	3区 S182	—	(19.55)	—	1/2		
2	8	須恵器 碗		3区 S182	—	(16.8)	(4.05)	小片		
3	18	黒色土器 碗		3区 S182	—	(21.2)	(2.15)	小片		
4	17	土師器 杯		— S193	—	—	3.75	ほぼ完形		
5	12	土師器 杯		— S37	埋土中	—	(2.55)	1/8		
6	4	須恵器 杯	蓋	2区 S89	埋土中	(10.9)	(2.45)	1/6		
7	7	須恵器 蓋		1区 S164	—	(13.0)	(0.85)	1/10		
8	2	須恵器 杯	身	— S37	埋土中	(14.8)	3.55	1/4	拓本	
9	6	須恵器 杯		3区 S187	—	(13.4)	(3.55)	1/4		
10	3	須恵器 皿		1区 S75	—	(15.8)	(1.35)	1/12		
11	19	瓦質土器 碗		3区 S198	—	—	(3.45)	1/9		
12	9	須恵器 碗	底部	1区 S76	—	(16.5)	(1.4)	1/4	拓本	
13	23	緑釉陶器 碗		3区 S192	—	(19.7)	(3.05)	小片		
14	13	土師器 埴		2区 S143	ビット最下層	(4.1)	(3.5)	1/6		
15	15	土師器 罐		3区 S193	—	(12.7)	(3.3)	1/12		
16	11	土師器 瓶		— S91	—	(15.0)	(2.1)	1/10		
17	14	土師器 瓶		1区 S84	—	(15.8)	(4.35)	1/9		
18	10	土師器 甕?		3区 S196	—	* (6.3)	(3.7)	小片		
19	16	土師器 鍋		1区 S86	—	* 8.3	(3.65)	小片		
20	35	土師器 蓋?		—	—	黒色シルト	*(10.5)	(2.05)	1/7	
21	38	須恵器 蓋		3区	—	包含層	*(9.2)	(2.0)	1/12	
22	61	須恵器 蓋		1区東部	—	黒色砂質シルト	* 8.0	(2.15)	1/12	
23	46	須恵器 蓋		1区	—	黒色砂質シルト	*(7.0)	(1.5)	1/12	
24	76	須恵器 蓋		3区	—	暗褐色砂質シルト	*(9.9)	(2.05)	1/12	
25	31	須恵器 蓋		1区	—	黒色砂質シルト	(13.4)	(3.15)	小片	つまみ完存
26	74	須恵器 蓋		3区	—	暗褐色砂質シルト	*(6.9)	(1.4)	1/4	
27	85	須恵器 蓋		2区	—	—	(12.1)	(1.8)	1/10	
28	44	須恵器 蓋	つまみ	1区	—	黒色砂質シルト	(11.3)	(1.25)	1/2	
29	42	須恵器 杯B		1区	—	黒色砂質シルト	(13.5)	(5.5)	1/3	
30	83	須恵器 杯		3区	—	暗褐色砂質シルト	(13.7)	4.5	1/4	
31	87	須恵器 杯		2区	—	—	(14.75)	3.9	1/12	
32	90	須恵器 杯B	底部	1区東部	—	黒色砂質シルト	(12.7)	(1.6)	1/4	
33	78	須恵器 杯B	底部	1区東部	—	黒色砂質シルト	(15.8)	(3.1)	1/1	
34	80	須恵器 杯B	底部	3区	—	暗褐色砂質シルト	(16.0)	(2.5)	2/5	
35	66	須恵器 杯B	底部	1区	—	黒色砂質シルト	(17.2)	(1.8)	1/4	
36	72	須恵器 杯B	底部	1区東部	—	黒色砂質シルト	(13.1)	(2.85)	ほぼ完形	
37	59	須恵器 杯B	底部	1区	—	黒色砂質シルト	(15.4)	(3.8)	1/4	
38	62	須恵器 椀	底部	1区東部	—	黒色砂質シルト	(11.6)	(3.8)	1/6	
39	69	須恵器 杯A		1区東部	—	黒色砂質シルト	—	(4.4)	1/3	
40	71	須恵器 杯	底部	1区東部	—	黒色砂質シルト	—	(2.3)	1/2	

報告	実測	類別	器種	出土地区・遺構	層位	口径(径) (cm)	器高 (cm)	残存 (cm)	備考	
41	84	須恵器	杯A	—	—	—	(3.15)	1/4		
42	77	須恵器	杯A	3区	—	—	(3.0)	1/4		
43	75	須恵器	皿	3区	—	—	2.1	1/5		
44	40	須恵器	皿	1区	—	3・4層(包含層)	*17.0	(2.1)	1/6	
45	81	須恵器	皿	3区	—	—	*23.5	2.65	1/8	
46	64	須恵器	皿	1区	—	—	*20.3	1.8	1/6	
47	68	須恵器	皿	1区東部	—	—	—	2.25	1/4	
48	33	須恵器	皿B	1区	—	—	(17.2)	(2.65)	1/16	
49	67	須恵器	皿	1区東部	—	—	(18.8)	2.6	1/4	
50	65	須恵器	皿B? 底部	1区	—	—	(26.7)	(1.7)	1/5	
51	29	須恵器	皿	1区	—	—	*27.8	(1.8)	1/5	
52	30	須恵器	皿	1区	—	—	(14.8)	1.6	1/9	
53	28	須恵器?	底部	1区東側	—	遺構直上層(3・4層)	—	—	片痕? 墨書	
54	39	須恵器	壺 口縁部	1区・ 1区中央部	—	—	(5.4)	—		
55	53	須恵器	長頸壺 頸部	1区	—	—	(5.75)	—		
56	82	須恵器	長頸壺 頸部	3区	—	—	(8.3)	—		
57	90	須恵器	壺 把手付き	2区	—	—	(5.0)	—		
58	93	須恵器	壺 胴部	2区	—	—	(5.4)	—	剥落	
59	34	須恵器	壺 胴部	1・3区	—	—	(6.0)	—	剥落	
60	52	須恵器	壺 1区	—	—	—	(6.7)	—	剥落	
61	47	須恵器	鉢	1区	—	—	(3.9)	小片		
62	48	須恵器	鉢 口縁部	1区	—	—	(4.8)	1/8		
63	32	須恵器	壺 口縁部	1区	—	—	(3.5)	1/12		
64	86	須恵器	口縁部又は 底部	—	—	—	(3.3)	1/9		
65	51	須恵器	器台 脚部	1区	—	—	(6.3)	1/16	54	
66	1	須恵器	椀	2区	S126	—	(3.65)	1/8		
67	63	須恵器	椀 底部	1区	—	—	*5.7	(1.55)	3/5	拓本
68	43	須恵器	椀 口縁部	1区	—	—	*6.3	(2.1)	3/4	ヘラ記号?拓本
69	58	土師器	甕 口縁部	1区	—	—	(17.1)	(3.65)	小片	
70	36	土師器	甕 口縁部	1区東部	—	—	(19.6)	(4.85)	1/16	
71	57	土師器	甕 口縁部	1区	—	—	(18.8)	(3.5)	1/8	
72	37	土師器	甕 口縁部	1区東部	—	—	(19.6)	(2.9)	1/18	
73	88	土師器	甕 口縁部	2区	—	—	(23.55)	(4.0)	小片	
74	55	土師器	甕 頸部	1区	—	—	(6.0)	1/8		
75	79	土師器	高杯 脚柱部	3区	—	—	(7.05)	1/2		
76	78	土師器	小皿	3区	—	—	8.7	1.7	1/2	拓本
77	56	土師器	椀 底部	1区	—	—	*5.2	(1.9)	1/2	拓本
78	50	土師器	椀 底部	1区	—	—	*4.55	(1.8)	—	拓本
79	91	土師器	甕	2区	—	—	(2.9)	—	小片	
80	41	土師器	甕	1区東側	—	遺構の直上層(3・4層)	(4.7)	—	小片	
81	89	瓦甕土器	碗 口縁部	2区	—	—	(11.85)	(4.1)	1/14	
82	49	瓦甕土器	碗 底部	1区	—	—	*4.8	(1.4)	2/3	
83	45	黑色土器	杯鉢 底部	1区	—	—	*9.7	(1.6)	小片	
84	25	灰釉陶器	蓋	3区	—	—	(15.1)	(0.9)	1/16	
85	20	灰釉陶器	椀 口縁部	3区	—	—	(13.7)	(2.65)	1/12	
86	21	灰釉陶器	椀 底部	2区	—	—	*6.4	(2.3)	1/6	
87	70	灰釉陶器	椀 高台	1区東部	—	—	*5.7	(1.65)	—	
88	22	灰釉陶器	椀	3区	—	—	(2.8)	(1.8)	小片	
89	27	灰釉陶器	椀 底部	1区	—	—	*7.8	(2.0)	1/8	
90	92	白磁	椀 口縁部	2区	—	—	(17.7)	(2.6)	1/12	
91	24	白磁	椀	1区	—	—	(2.5)	—	小片	
92	26	土製品	ろ??	1区	—	—	3.0	2.55	完形	
54	4番								51と同一個体	

## 第7章 自然科学的分析

### 第1節 放射性炭素年代測定（AMS測定）

株式会社 加速器分析研究所

#### (1) 遺跡の位置

北山遺跡は、兵庫県朝来市山東町大月字北山92-2（北緯35°18'43"、東経134°52'07"）に所在する。山東町から和山町へ抜ける宝珠峠の峠口付近に位置する。周囲には楽音寺川などの小河川による開析谷が形成される。これらの谷に挟まれた細長い丘陵上に遺跡が所在する。

#### (2) 測定の意義

遺構の年代を決定する。

#### (3) 測定対象試料

測定対象試料は、土坑S-1の3層最下部から出土した炭化物2点(No.1・2:IAAA-71585・71586)である。

#### (4) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

#### (5) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により<sup>13</sup>C/<sup>14</sup>Cの測定も同時に行う。

#### (6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基

準年として遡る<sup>14</sup>C年代である。

- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 $\chi^2$ 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

- 4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰;パーミル)で表した。

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_s - {}^{13}\text{A}_n) / {}^{13}\text{A}_n] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_s - {}^{13}\text{A}_{750}) / 13\text{A}_{750}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{13}\text{A}_s$ : 試料炭素の<sup>13</sup>C濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)<sub>s</sub>または(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)<sub>s</sub>

${}^{13}\text{A}_n$ : 標準現代炭素の<sup>13</sup>C濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)<sub>n</sub>または(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)<sub>n</sub>

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の<sup>13</sup>C濃度 ( ${}^{13}\text{A}_s = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ )を測定し、PDB(白亜紀のベレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に(加速器)と注記する。

また、 $\Delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰)であるとしたときの<sup>13</sup>C濃度 ( ${}^{13}\text{A}_n$ )に換算した上で計算した値である。(1)式の<sup>13</sup>C濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{13}\text{A}_s = {}^{13}\text{A}_n \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad ({}^{13}\text{A}_s \text{として} {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{13}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad ({}^{13}\text{A}_s \text{として} {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_s - {}^{13}\text{A}_n) / {}^{13}\text{A}_n] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射状炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{13}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好とその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

<sup>13</sup>C濃度の現代炭素に対する割合のもう1つの表記として、pMC(percent Modern Carbon)がよく使われており、 $\Delta^{13}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{13}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{13}\text{C}/10 + 100 \quad (\text{‰})$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{13}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age; yrBP)が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{13}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

- 5) <sup>14</sup>C年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

- 6) 較正暦年代の計算では、IntCal10データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCal3.10較正プログラム(Bronk Ransley1995 Bronk Ransley 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001)を使用した。

## (7) 測定結果

土坑S-1から出土した炭化物2点の $^{14}\text{C}$ 年代は、 $2170 \pm 30 \text{ yrBP}$  (No. 1 : IAAA-71585)、 $2160 \pm 40 \text{ yrBP}$  (No. 2 : IAAA-71586) である。暦年校正年代 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) は、No. 1 が  $360 \sim 290 \text{ BC}$  (41.5%)・ $230 \sim 170 \text{ BC}$  (26.7%)、No. 2 が  $360 \sim 290 \text{ BC}$  (35.0%)・ $230 \sim 160 \text{ BC}$  (33.2%) である。

同一遺構から出土した2点の年代は誤差範囲で一致し、化学処理および測定内容にも問題が無いため、妥当な年代と考えられる。

## 参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

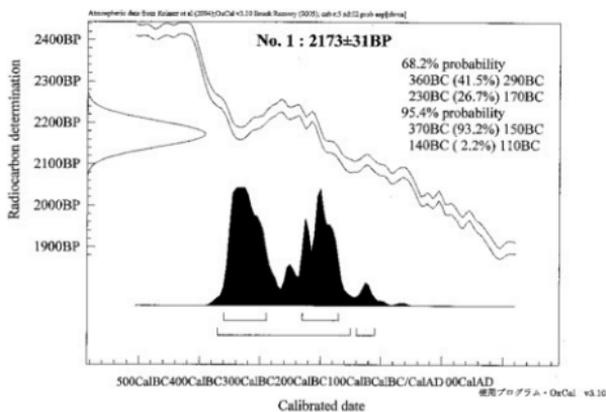
IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-71585	試料採取場所: 朝来市 山東町大月字 北山92-2 北山遺跡	Libby Age (yrBP) : $2170 \pm 30$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = $-28.35 \pm 0.46$
	試料形態: 炭化物 試料名(番号): No. 1	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = $-237.0 \pm 3.0$ pMC (%) = $76.30 \pm 0.30$
#1956-1	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = $-242.3 \pm 2.9$ pMC (%) = $75.77 \pm 0.29$ Age (yrBP) : $2,230 \pm 30$
IAAA-71586	試料採取場所: 朝来市 山東町大月字 北山92-2 北山遺跡	Libby Age (yrBP) : $2160 \pm 40$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = $-27.02 \pm 0.63$
	試料形態: 炭化物 試料名(番号): No. 2	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = $-236.2 \pm 3.4$ pMC (%) = $76.38 \pm 0.34$
#1956-2	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = $-239.4 \pm 3.2$ pMC (%) = $76.06 \pm 0.32$ Age (yrBP) : $2,200 \pm 30$

## 参考資料: 暦年校正用年代

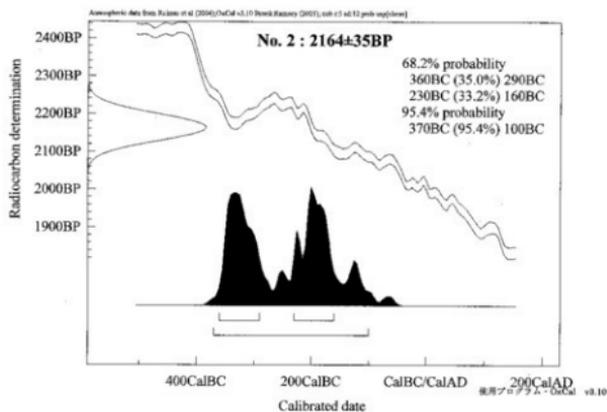
IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-71585	No. 1	$2173 \pm 31$
IAAA-71586	No. 2	$2164 \pm 35$

ここに記載するLibby Age (年代値) と誤差は下1桁を丸めない値です。

【参考値：暦年較正 Radiocarbon determination】



【参考値：暦年較正 Radiocarbon determination】



第3図 較正曲線グラフと暦年較正値

## 第2節 木製品の樹種同定

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2. 試料

試料は、縄原遺跡より出土した木簡、田下駄？、火鑽板、曲物（底板）、笏？、桶？、部材、扉の部材などの木材19点である。時期は古墳時代～奈良時代である。

### 3. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（年目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

#### マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 第4図1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセルウム細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。以上の形質よりマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

#### スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 第4図2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

#### ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 第4図3

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、

ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱である。耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

サワラ *Chamaecyparis pisifera* Endl. ヒノキ科 第5図4

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞がみられる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型であるがスギ型の傾向を示すものもあり、1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。以上の形質よりサワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。材は木理通直、肌目緻密である。ヒノキより軽軟でもろいが、広く用いられる。

ガマズミ属 *Viburnum* スイカズラ科 第5図5

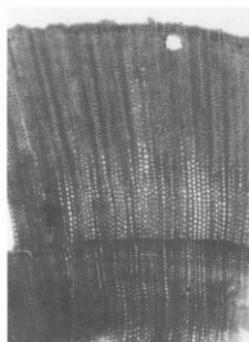
横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独で均一に散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は30~60本である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1~3細胞幅で複列部が長い。以上の形質よりガマズミ属に同定される。ガマズミ属には、ガマズミ、オオカメノキ、ゴマキ、サンゴジュなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の高木または低木である。樹木は庭園、生垣、防火樹などに、材は旋作、小組工物などに用いられる。

## 5. 所見

同定の結果、梶原遺跡の木材は、マツ属複雑管束亜属1点、スギ15点、ヒノキ1点、サワラ1点、ガマズミ属1点であった。最も多いスギは木簡、田下駄?、火鑽板、笏?、種?、部材、扉の部材などに使用されており、加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。ヒノキとサワラは曲物(底板)に使用されている。ヒノキとサワラのヒノキ属の木材も木理通直で大きな材が取れる良材である。マツ属複雑管束亜属は不明品に使用されており、水湿に良く耐える材である。ガマズミ属は用途不明品に使用されている。マツ属複雑管束亜属、スギ、ヒノキ、サワラの針葉樹は温帯に広く分布する常緑高木であり、ガマズミ属は温帯を中心に広く分布する落葉ないし常緑の広葉樹である。以上から梶原遺跡他の木材は遺跡周辺からあるいは近隣より流通でもたらされたと考えられる。

### 参考文献

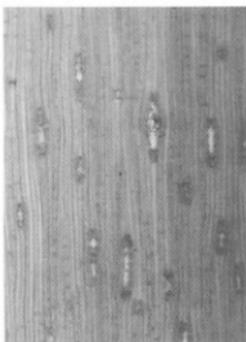
- 佐伯 浩・原田 浩(1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p.20-48。  
佐伯 浩・原田 浩(1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p.49-100。  
島地 謙・伊東 隆夫(1988) 日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296  
山田 昌久(1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文獻集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242



横断面 ————— : 0.5mm

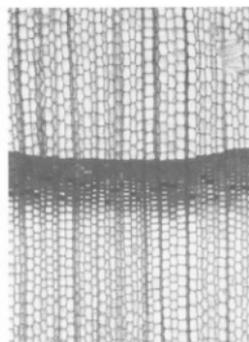


放射断面 ————— : 0.1mm

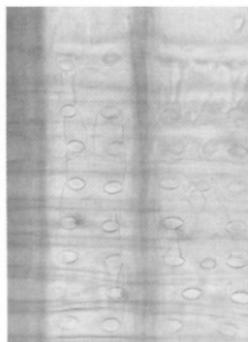


接線断面 ————— : 0.2mm

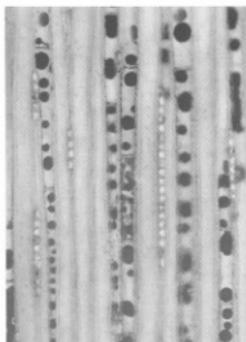
1. W07 29トレンチ 不明品 マツ属複雑管束亜属



横断面 ————— : 0.5mm

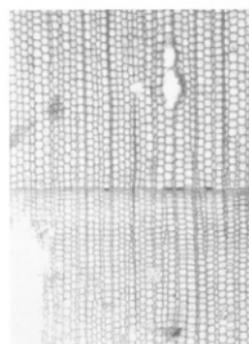


放射断面 ————— : 0.05mm

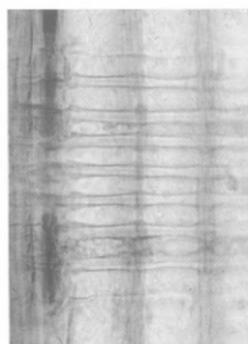


接線断面 ————— : 0.2mm

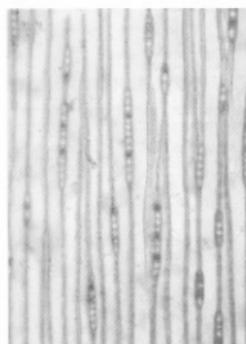
2. W16 建築部材 部材 スギ



横断面 ————— : 0.5mm



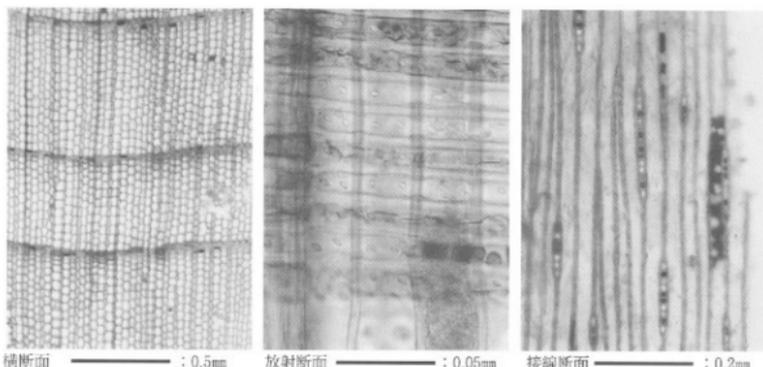
放射断面 ————— : 0.05mm



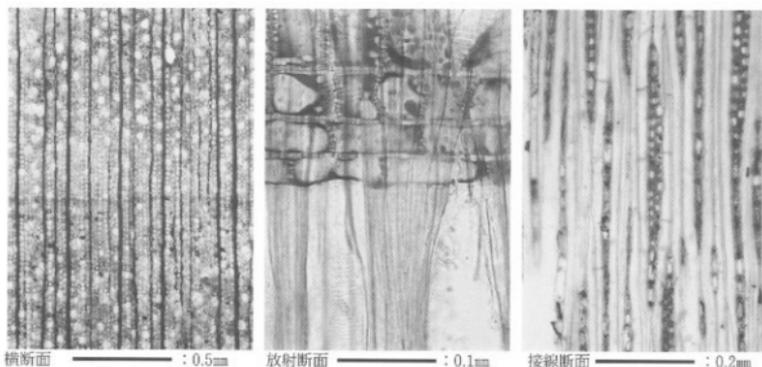
接線断面 ————— : 0.2mm

3. W12 2区 容器 曲物(底板) ヒノキ

第4図 梶原遺跡出土木製品切片写真1



4. W11 容器 曲物(底板) サワラ



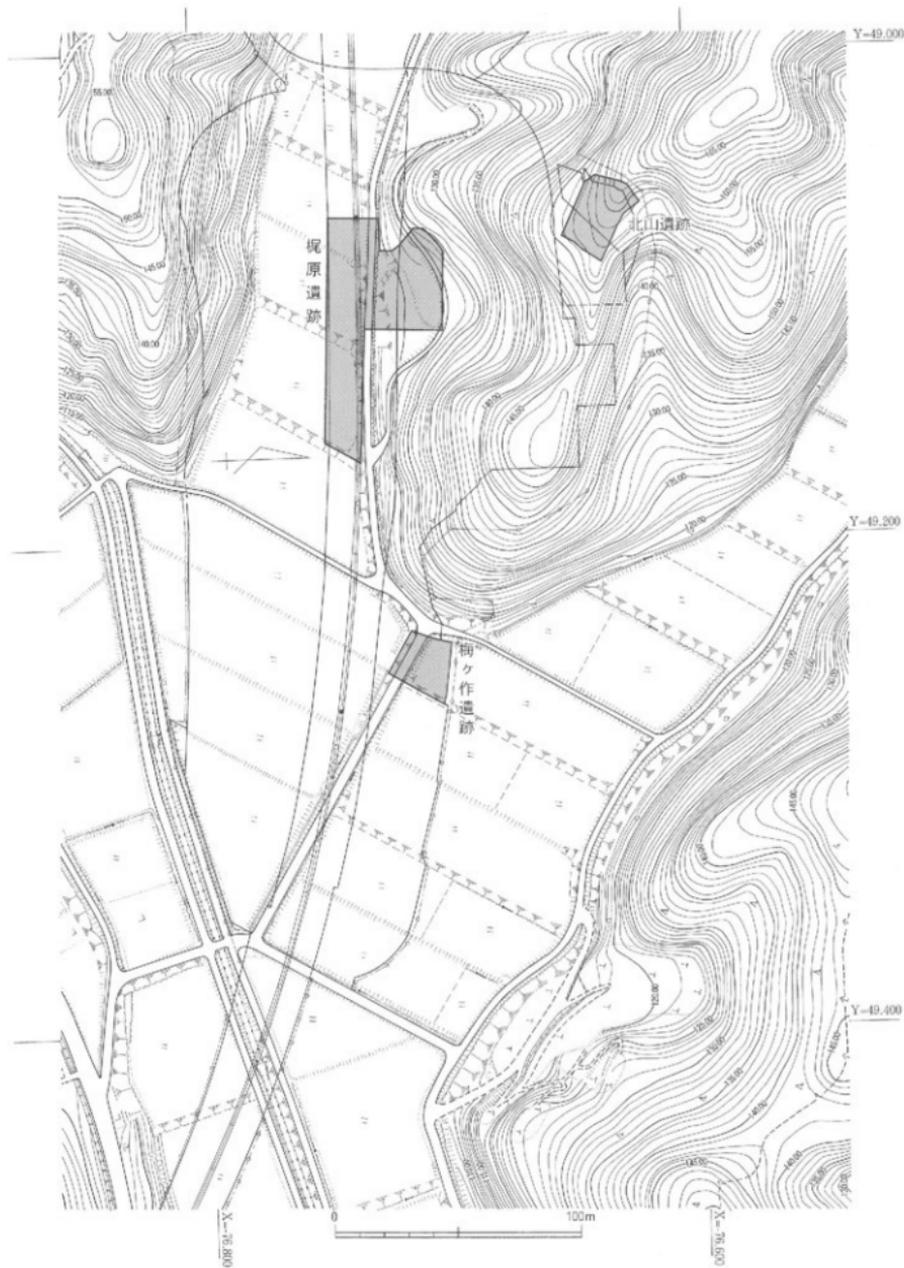
5. W10 3b区 南側溝 用途不明品 ガマズミ属

第5図 梶原遺跡出土木製品切片写真2

第3表 梶原遺跡における樹種同定結果

報告番号	地区	遺構	種類	器種	結果(学名/和名)
W1	27トレンチ		雑具?	木筒	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W2	3b拡張区		雑具?	山下駄?	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W3	3b区	旧河道	農具?	山下駄?	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W4	3b区		雑具?	山下駄?	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W5	2区		雑具	火置板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W6	2区西半		雑具	火置板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W7	29トレンチ			不明品	<i>Pinus subgea</i> , <i>Diploxylon</i> マツ属椎輪管束亜属
W8	2区				<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W9	2区				<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W10	3b区	南側溝	用途不明品		<i>Viburnum</i> ガマズミ属
W11			容器	曲物(底板)	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl. サワラ
W12	2区		容器	曲物(底板)	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
W13	2区				<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W14	1b区	池?	建築部材	種?	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W15	3b区			部材	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W16			建築部材	部材	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W17	3b区	南側溝	建築部材	扉の部材	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W18	3b区	旧河道S-302	建築部材		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
W19	3b区	南側溝	建築部材	部材	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ

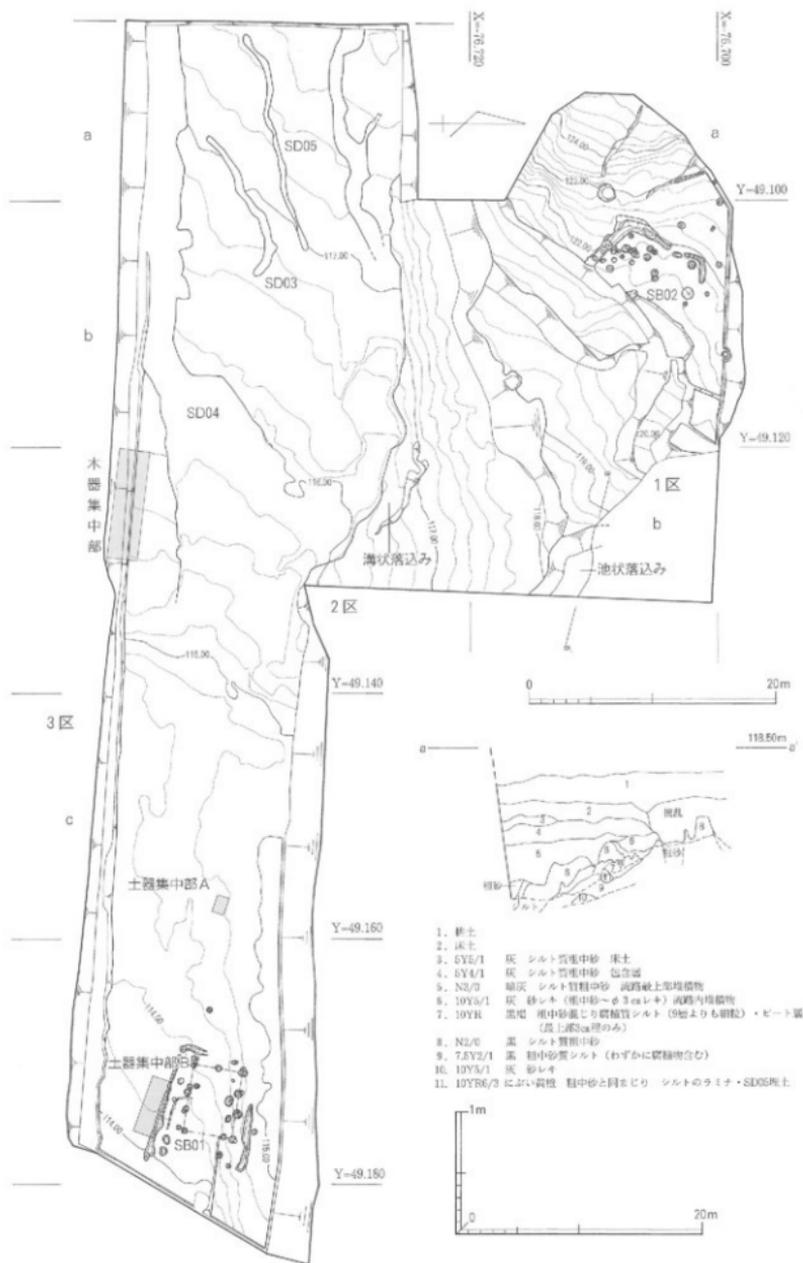
# 圖 版



調査位置図

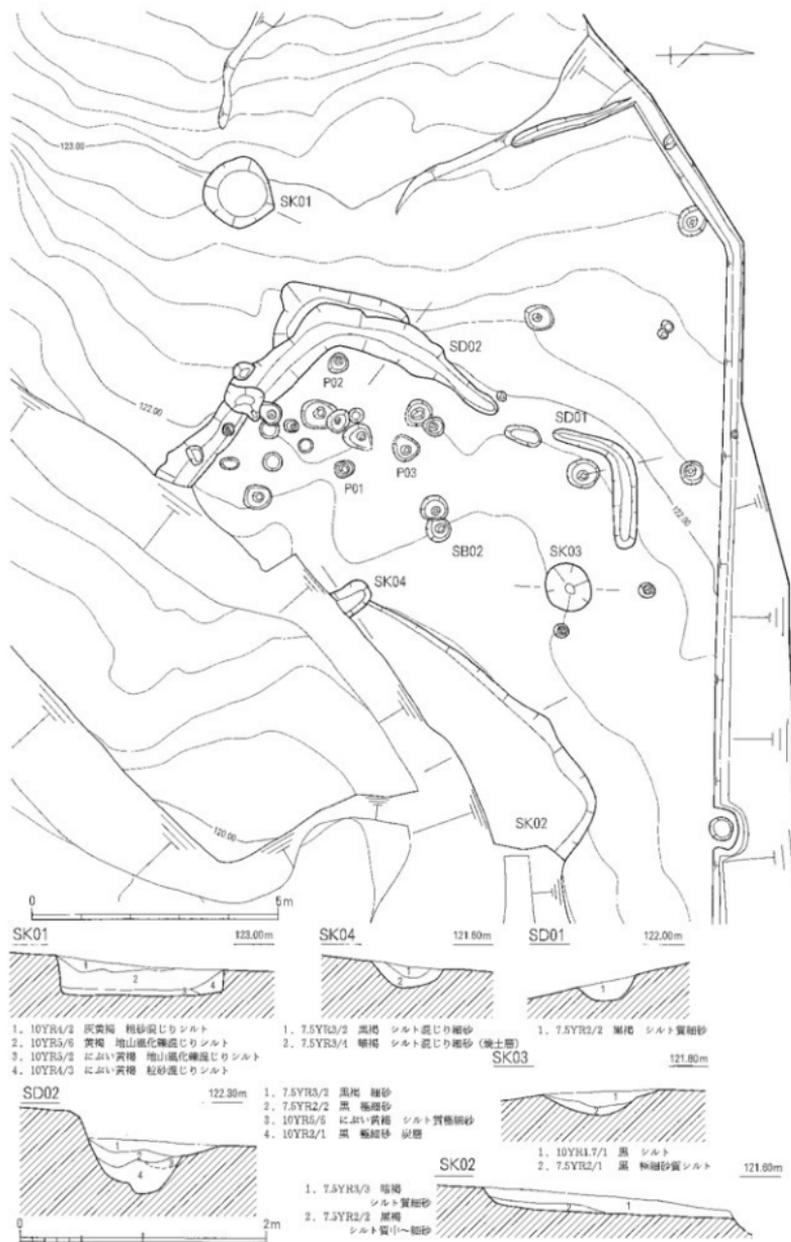


確認調査トレンチ配置図

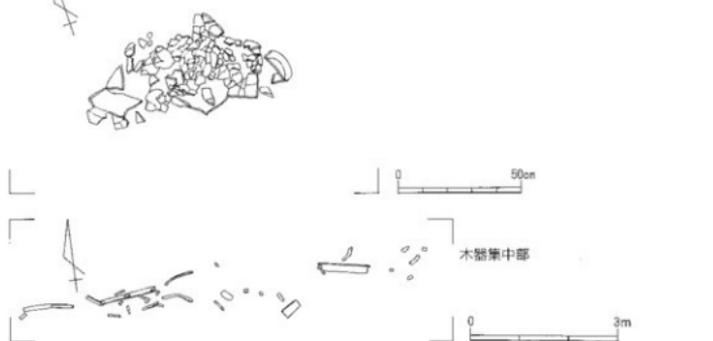
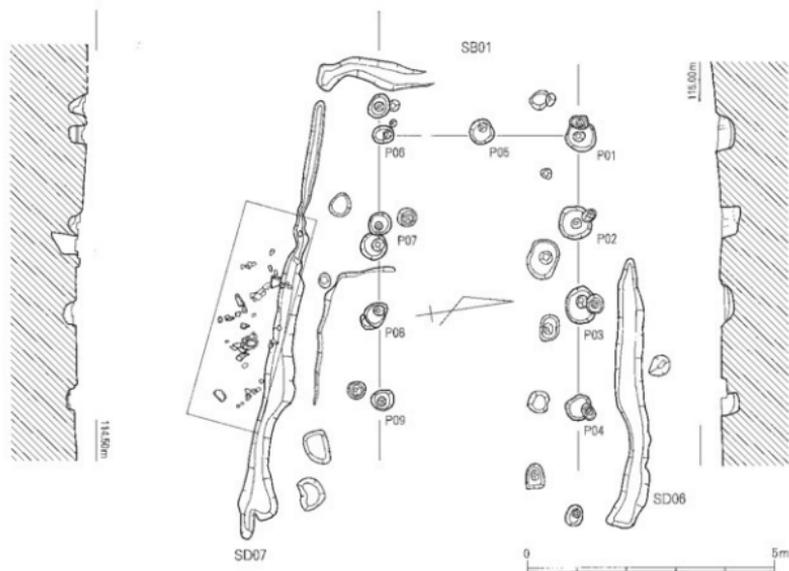


1. 耕土
2. 床土
3. 5Y6/1 灰 シルト質中砂 朱土
4. 5Y4/1 灰 シルト質中砂 包合部
5. N2/0 緑灰 シルト質中砂 両面被土加堆積物
6. 10Y5/1 灰 砂シキ (堆中砂-φ3cmレキ) 両面内堆積物
7. 10YR 黒畑 堆中砂混じり腐植質シルト (9層よりも細粒)・ヒート質 (最上段2cm厚のみ)
8. N2/0 黒 シルト質粗中砂
9. 7.5Y2/1 黒 堆中砂質シルト (わずかに腐植物含む)
10. 10Y5/1 灰 砂レキ
11. 10YR6/3 におい黄畑 堆中砂と同レベル シルトのラミナ・SD05階上

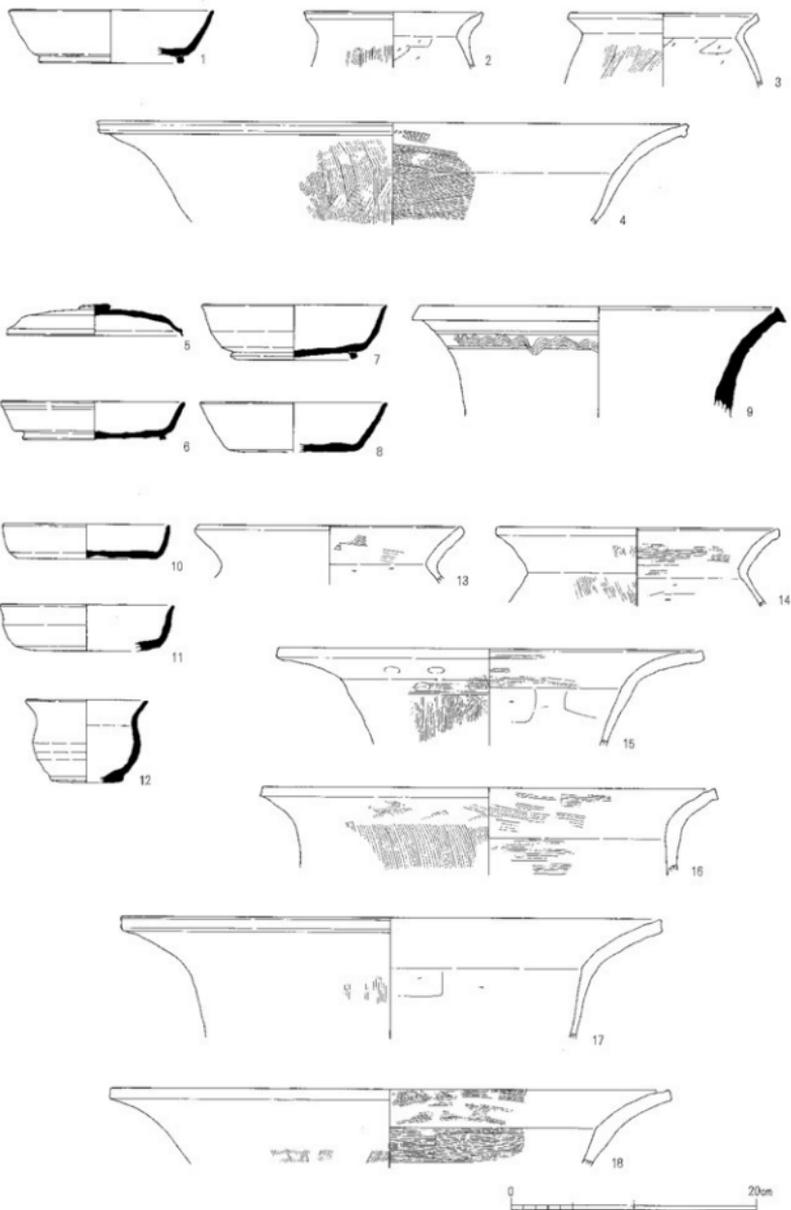
遺構配置図



1区の遺構



3区の遺構



出土遺物 1 (土器)



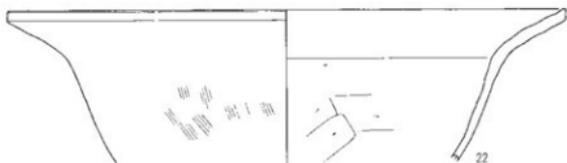
19



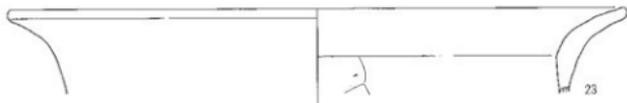
20



21



22



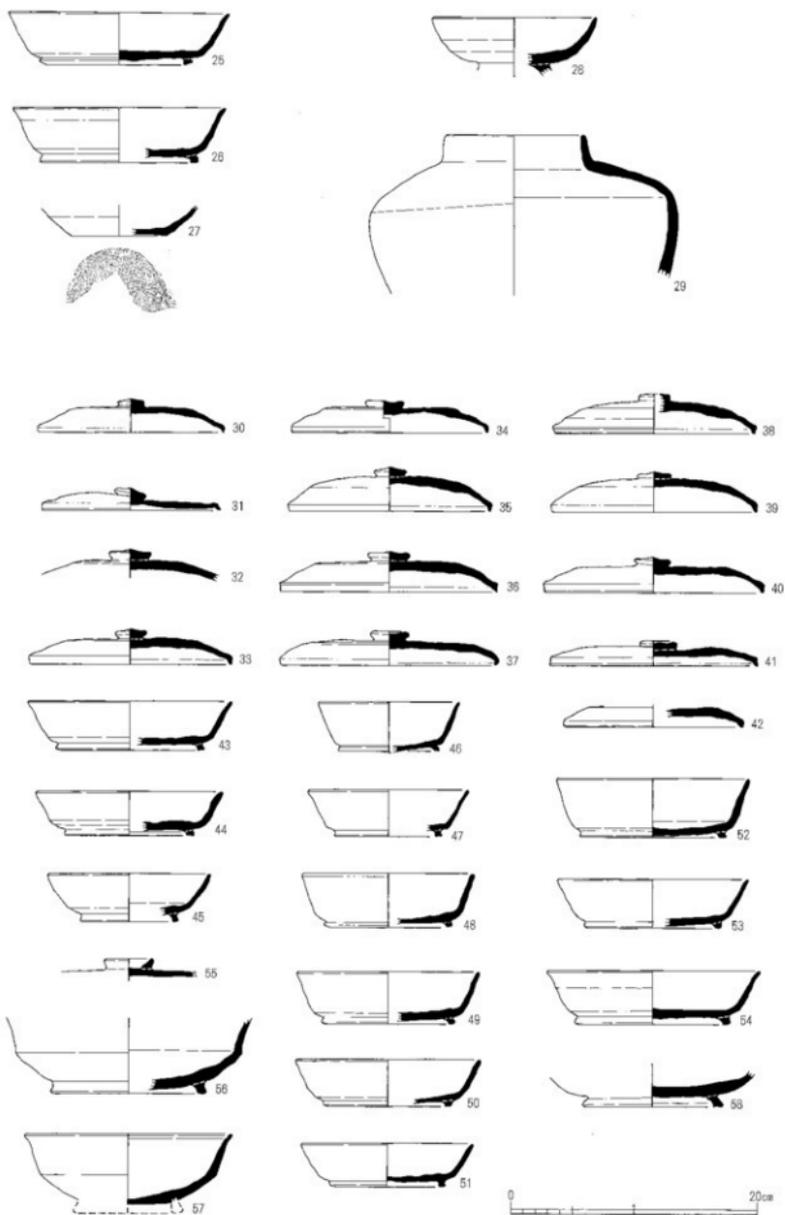
23



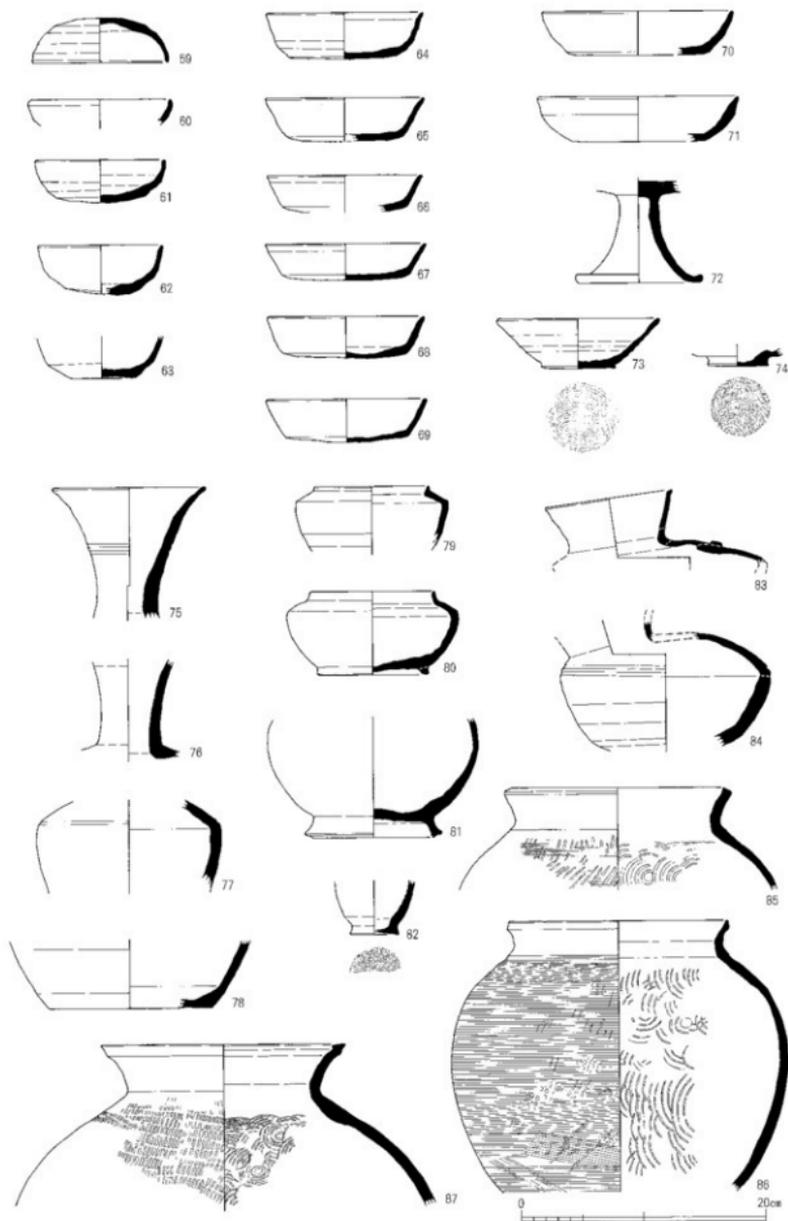
24



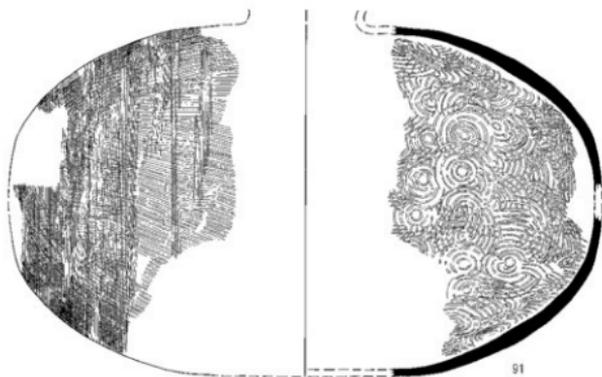
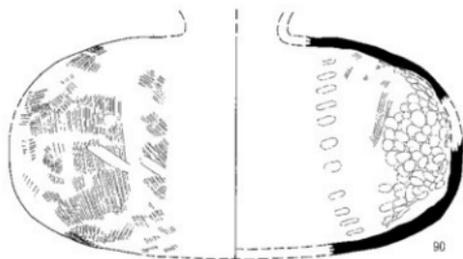
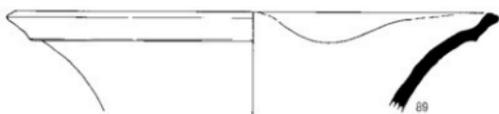
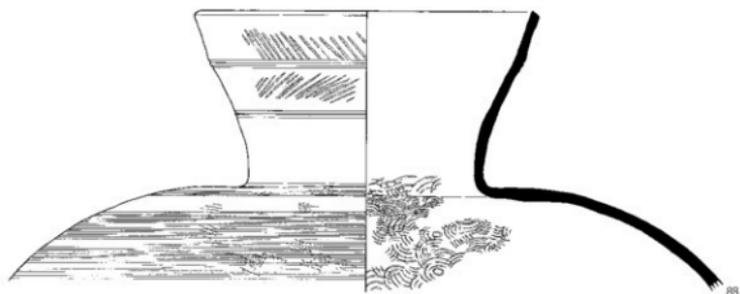
出土遺物 2 (土器)



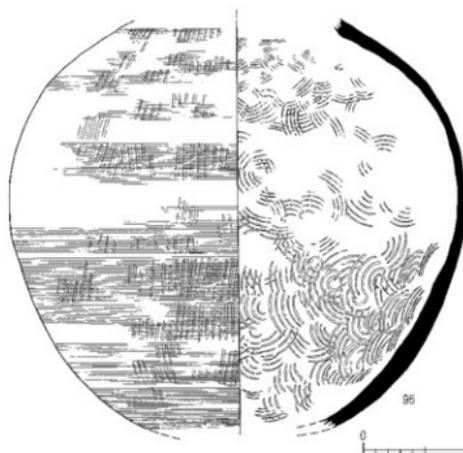
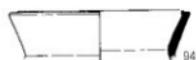
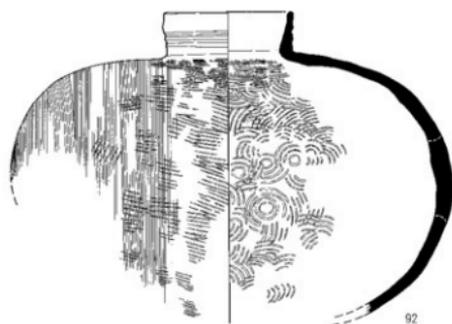
出土遺物 3 (土器)



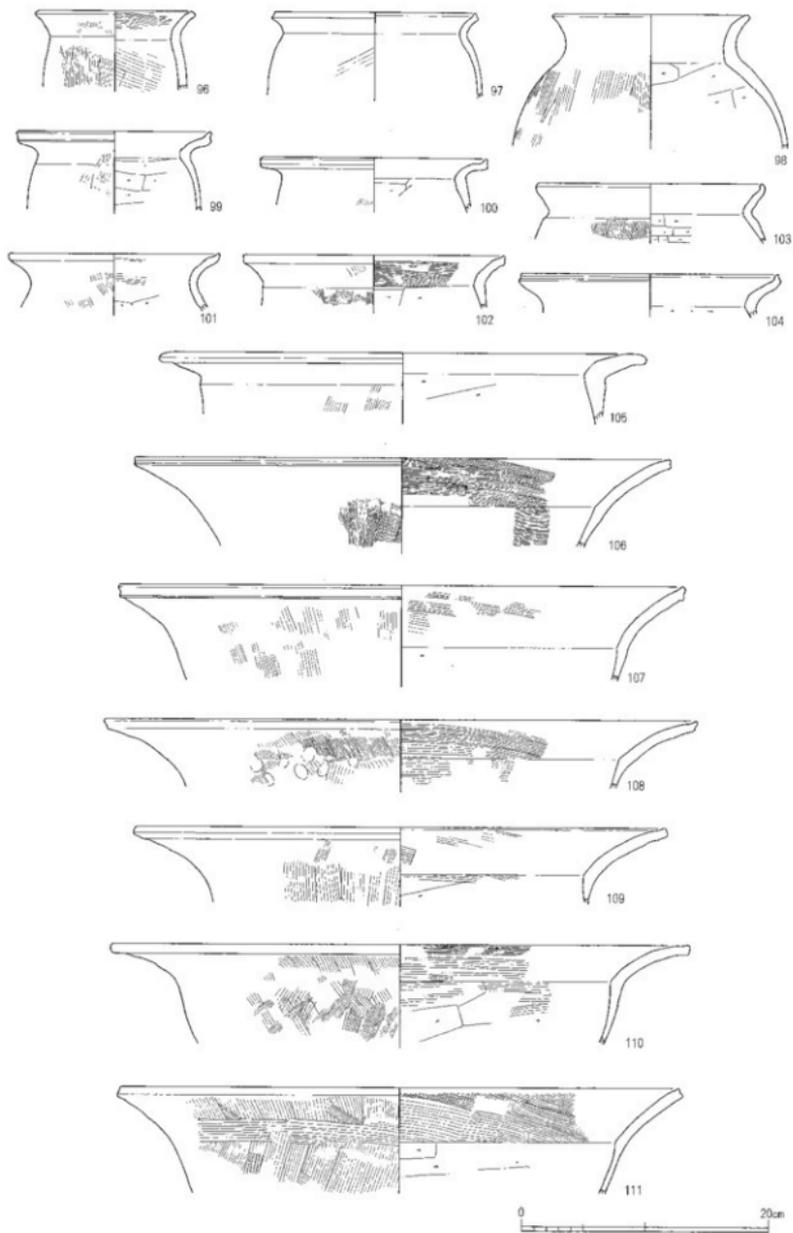
出土遺物 4 (土器)



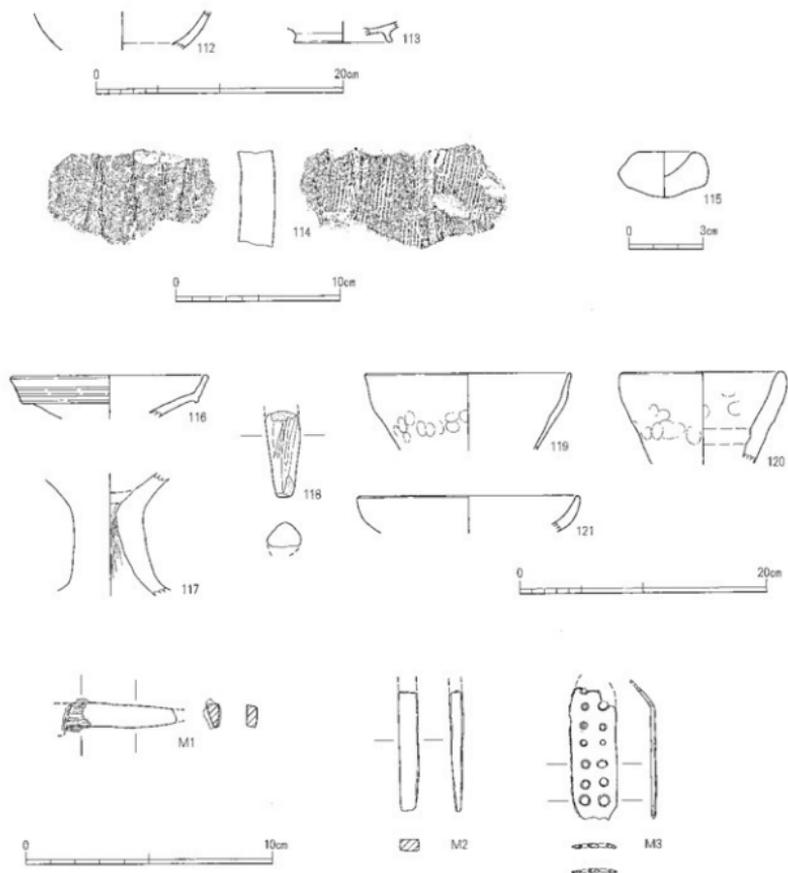
出土遺物 5 (土器)



出土遺物 6 (土器)



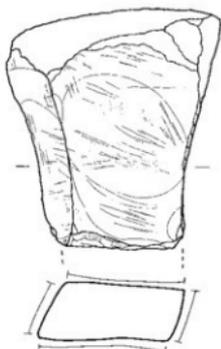
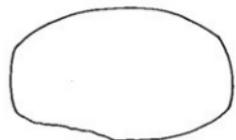
出土遺物7 (土器)



出土遺物 8 (土器・金属器)



S1



S2

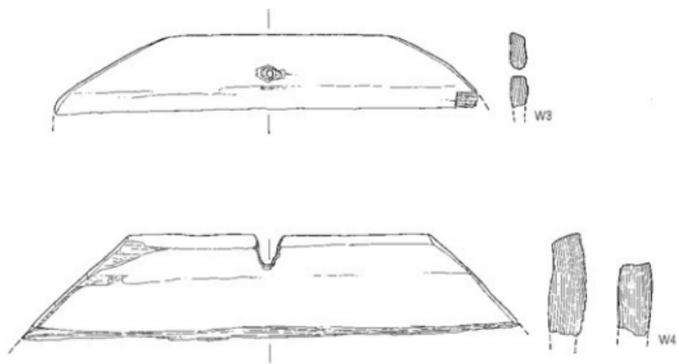
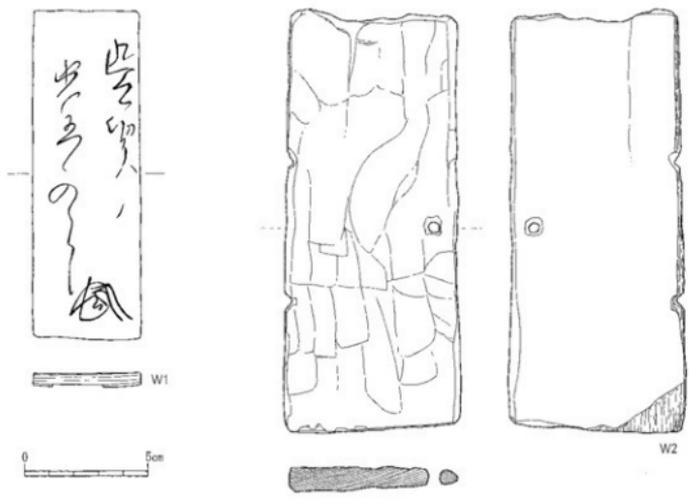


S3

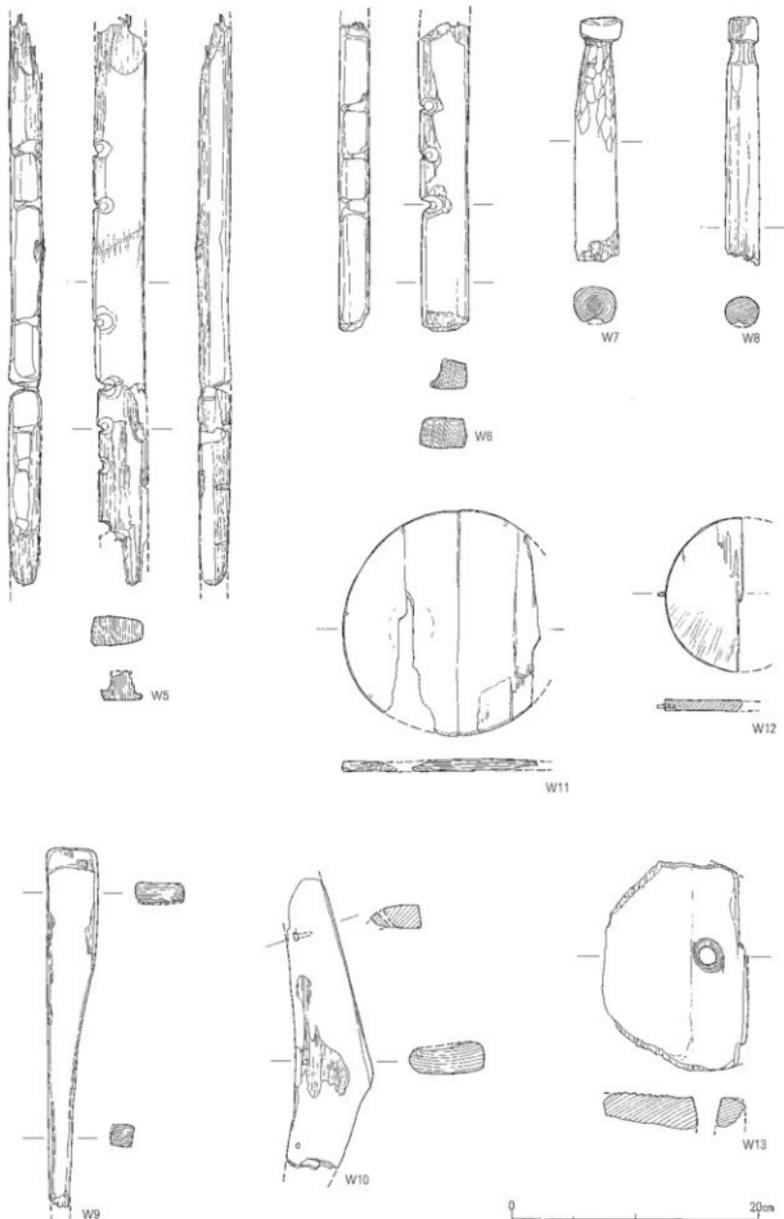


出土遺物 9 (石器)

縄文遺跡

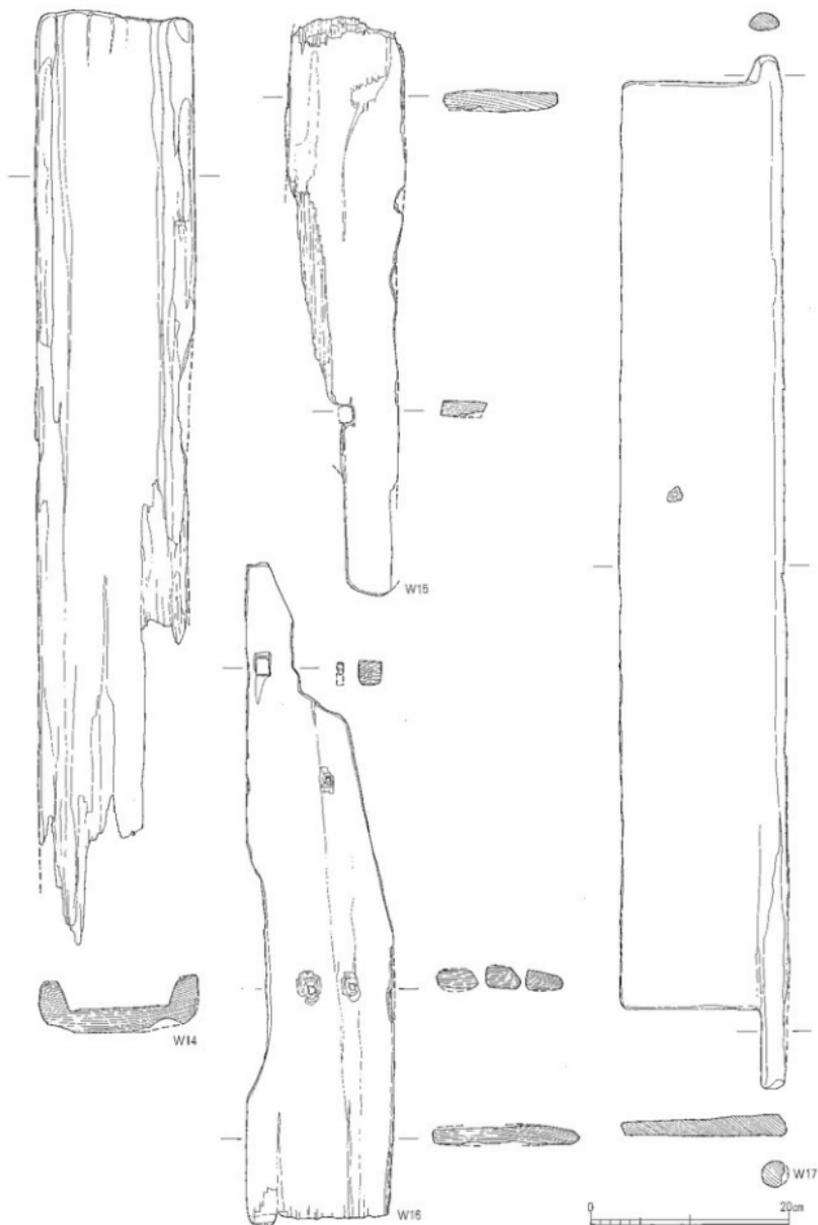


出土遺物10 (木製品)

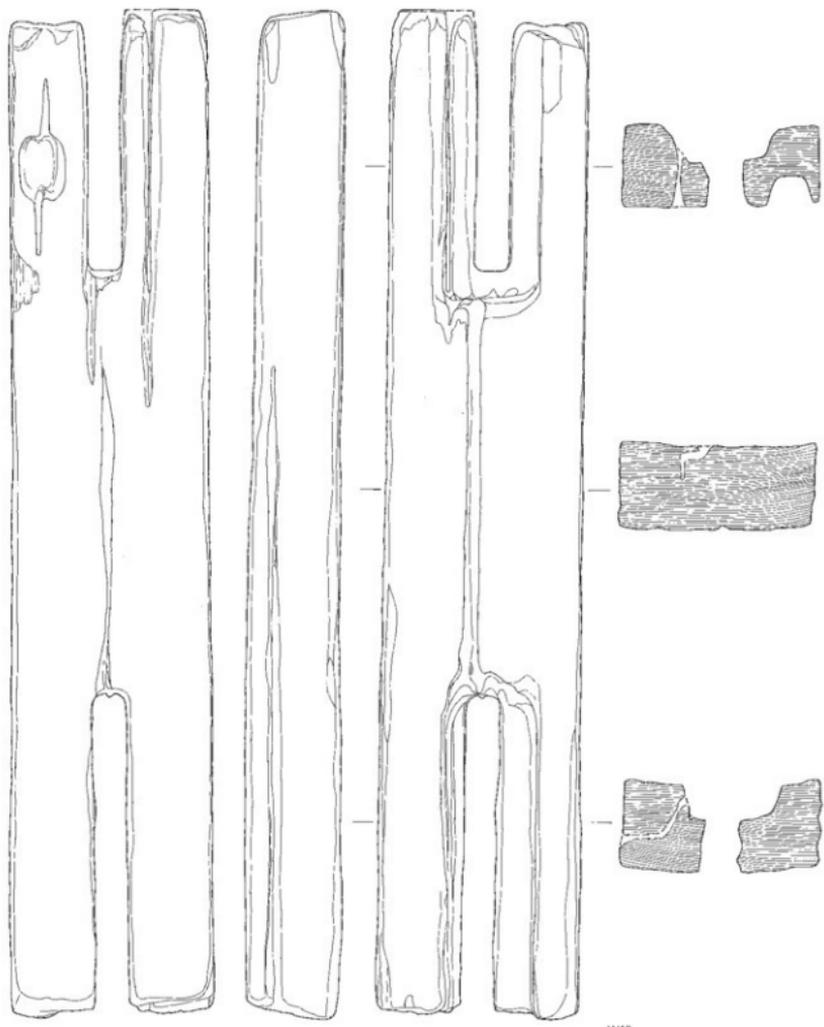


出土遺物11 (木製品)

0 20cm



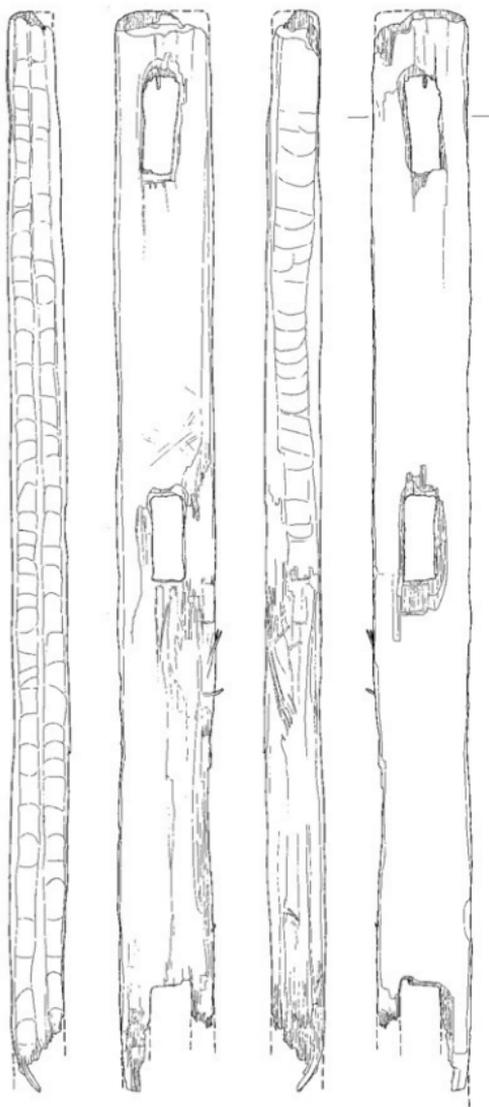
出土遺物12 (木製品)



W18



出土遺物13 (木製品)



W19



出土遺物14 (木製品)

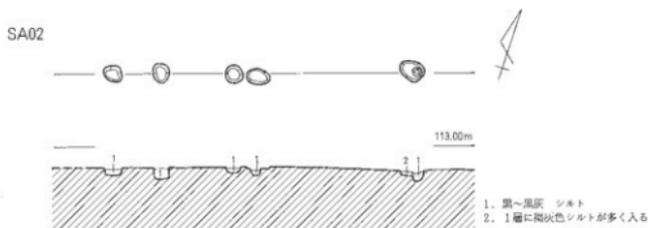
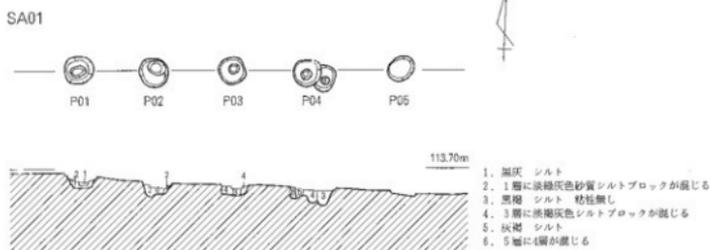
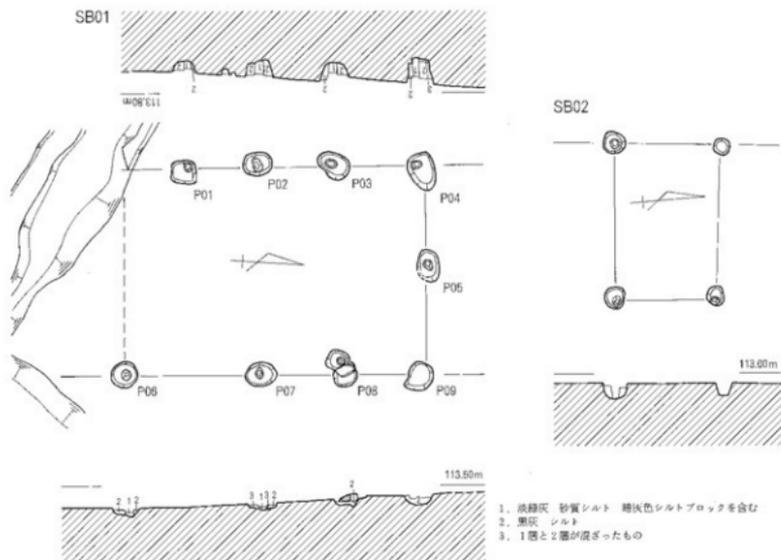


a ————— 115.00m a'

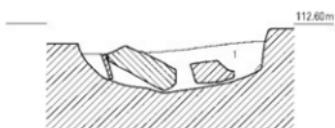
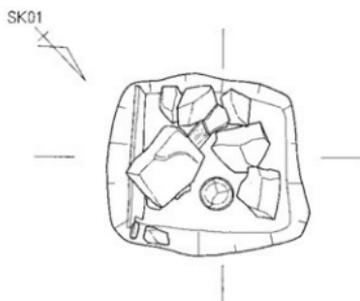


1. 盛土・覆土
2. 10G/1 緑灰 シルト  $\phi$  1mm以下の粗砂若干含む 粘性あり  
土壌層 しまりやや強い
3. 5B4/1 暗褐色 シルト  $\phi$  1mm以下の粗砂微量含む 粘性あり  
汚い 均質でない 土壌層?
4. N3/ 腐灰 シルト 3と類似するが比較的均質 色調やや暗い
5. N2/ 黒 シルト 粘性はあるがばさばさ
6. 5層に非常に傾斜
7. N2/ 黒 シルト 粘性あり 均質でない
8. N3/ 緑灰 シルト 粘性あり 濃褐色上
9. 砂藏 シルト  $\phi$  1mm以下の粗砂と $\phi$  2cm以下のレキ  
粘性あり 黒灰色ブロック(4cm大)が混ざる
10. 2.5YR/2 灰白 砂藏 シルト  $\phi$  1mm以下の粗砂若干含む  
粘性もややあり 地山

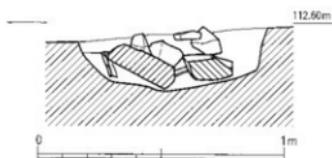
遺構配置図



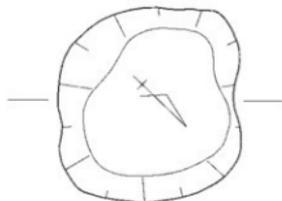
掘立柱建物・柱列



1. におい黄褐色砂質シルトと黒色シルト質砂（橋脚一部）のブロック状礫砂レートを同時に埋めている



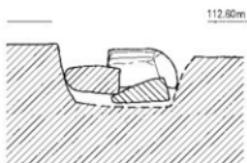
SK02

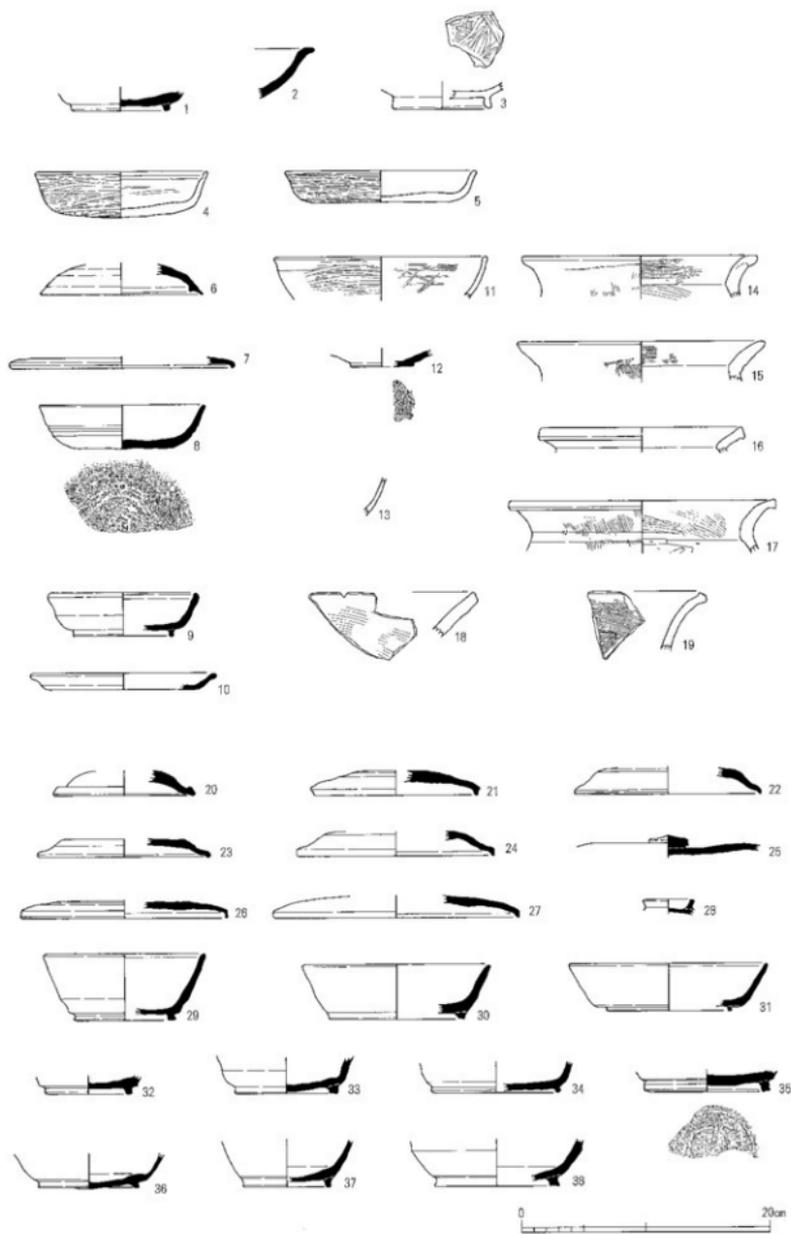


1. におい黄褐色 粗中砂質シルト（黒色粗中砂質シルト含む）
2. 黒 粗中砂質シルト（におい黄褐色 粗中砂質シルト含む）
3. 1層と同じ
4. 2層と同じ
5. 黒 中細砂質シルト 粗砂含む
6. 1層と同じ

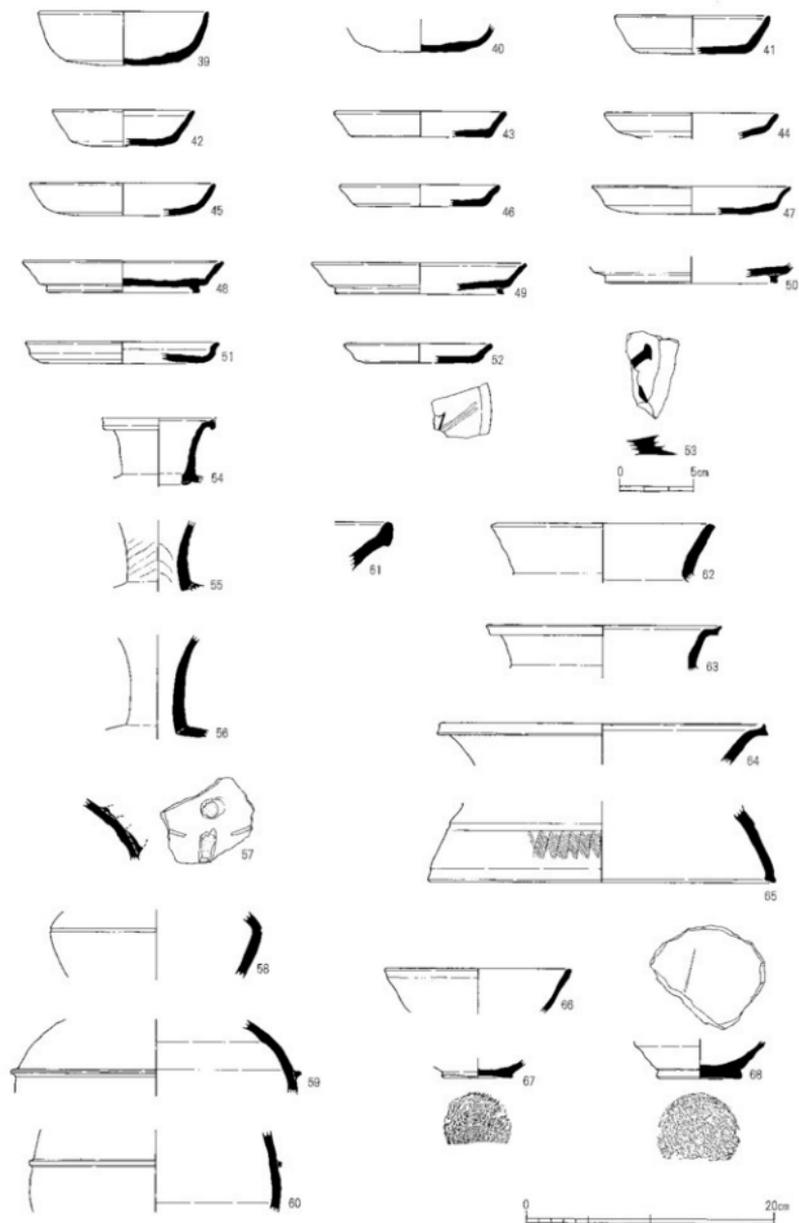


P01

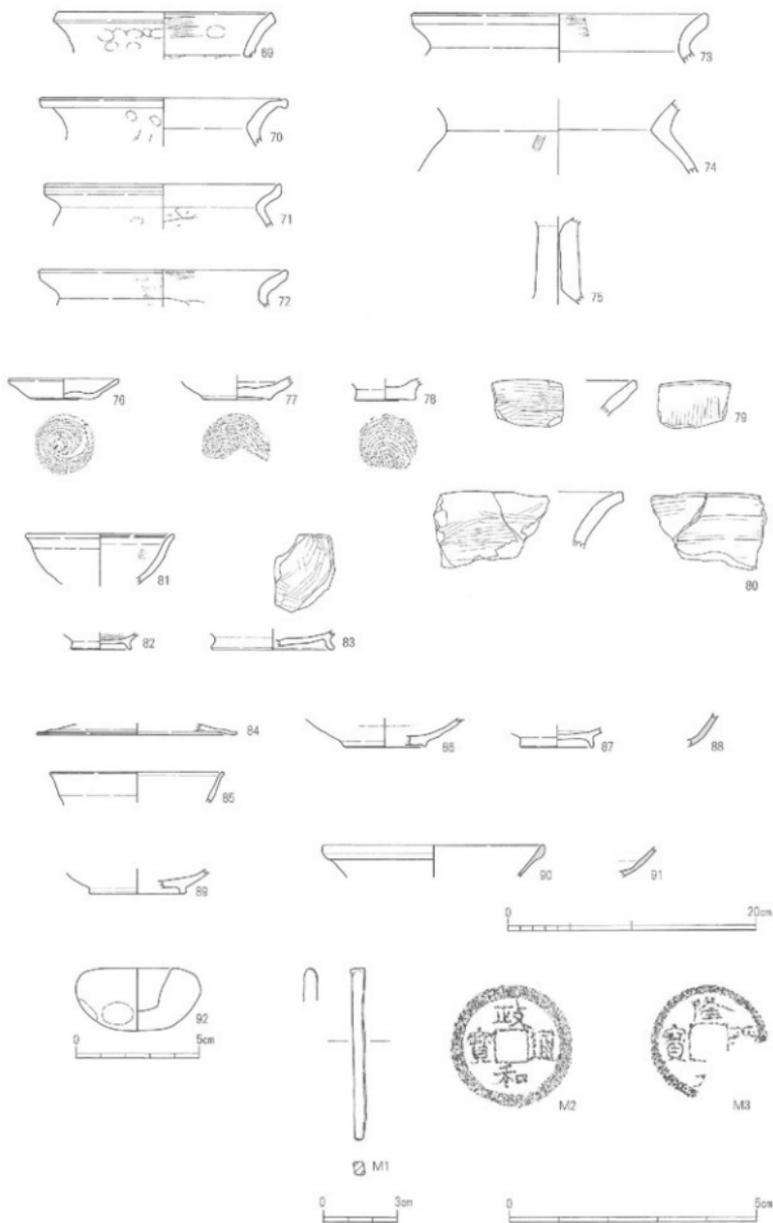




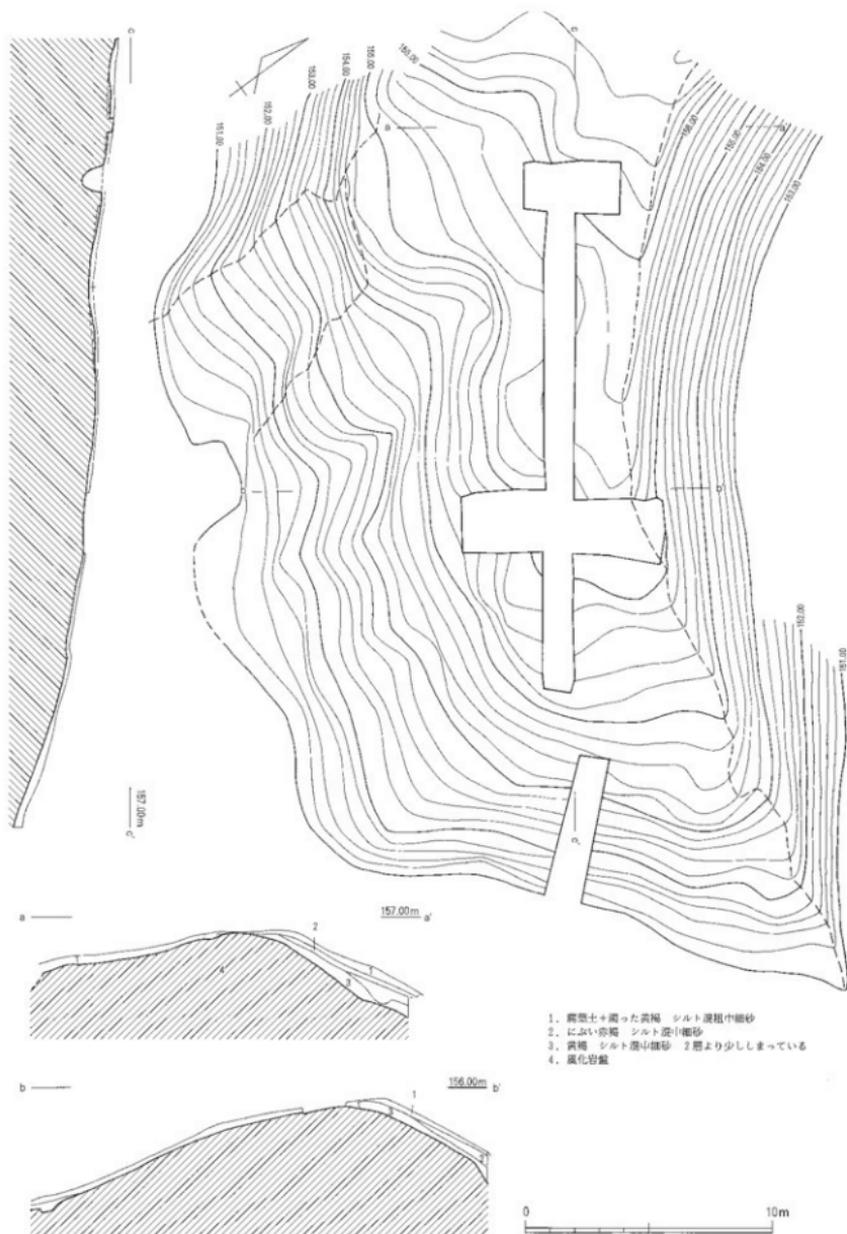
出土遺物 1 (土器)



出土遺物 2 (土器)



出土遺物 3 (土器・金属器)



調査区全体図

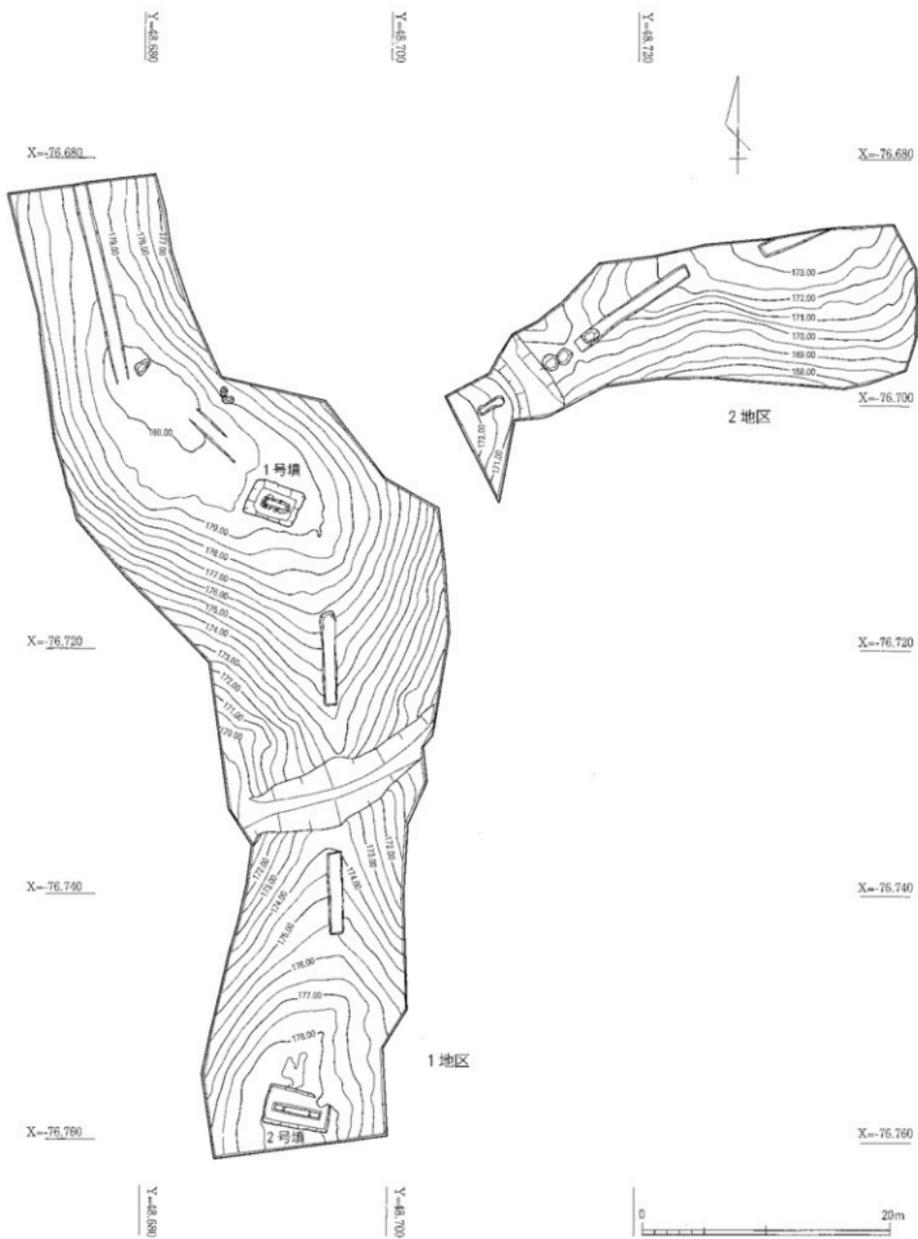


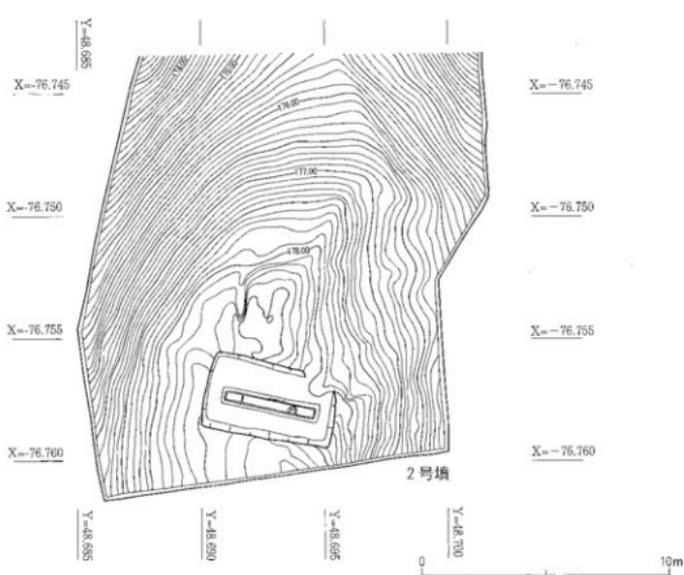
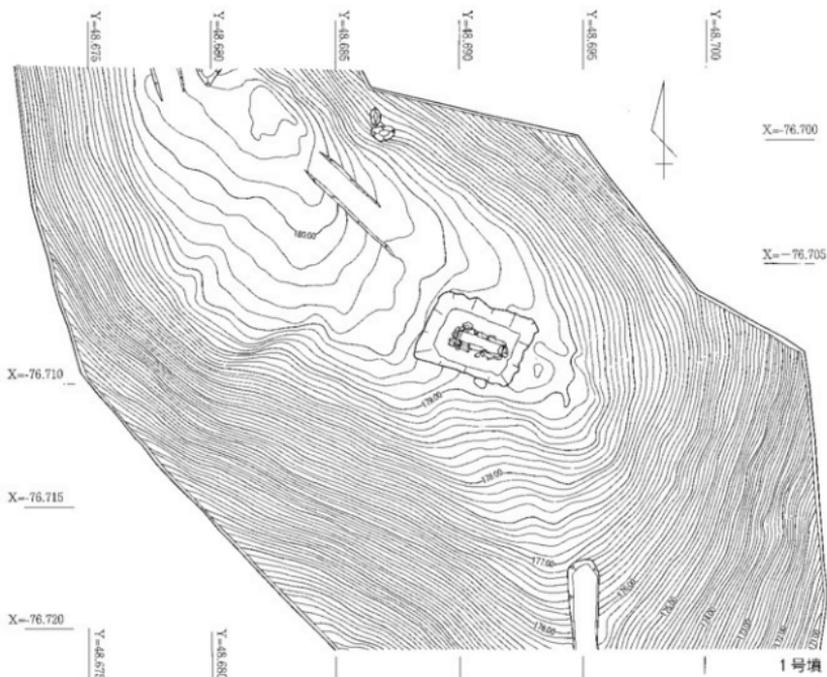


遺跡の位置

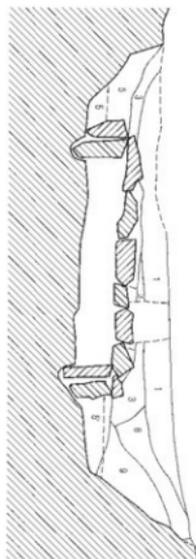


調査範囲

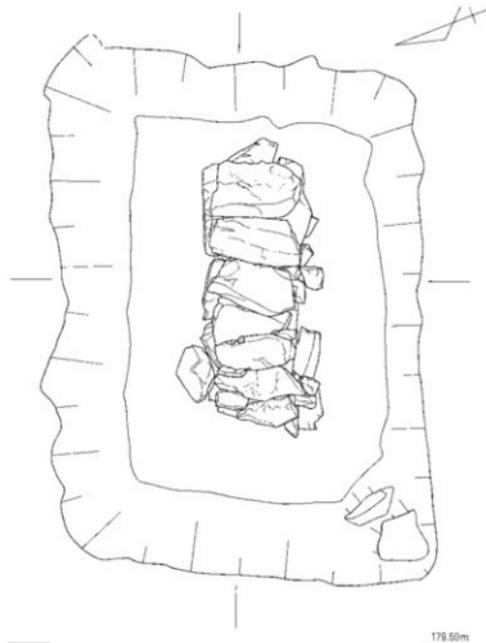




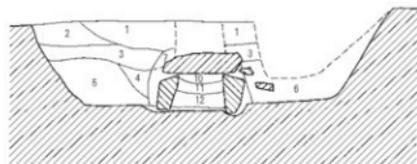
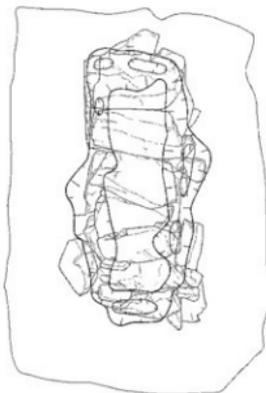
1・2号墳



170.50m



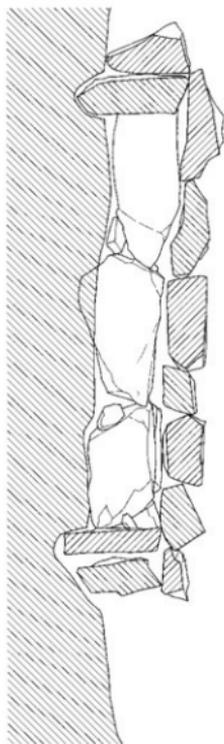
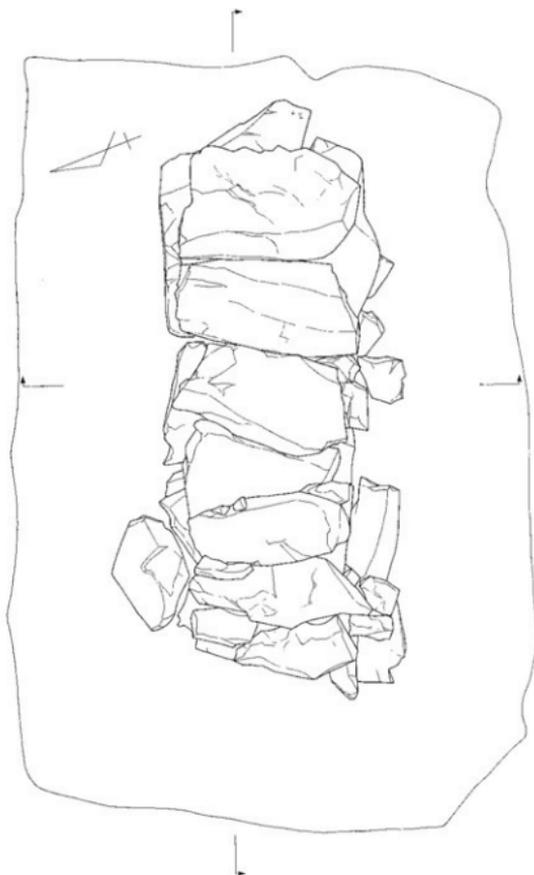
170.50m



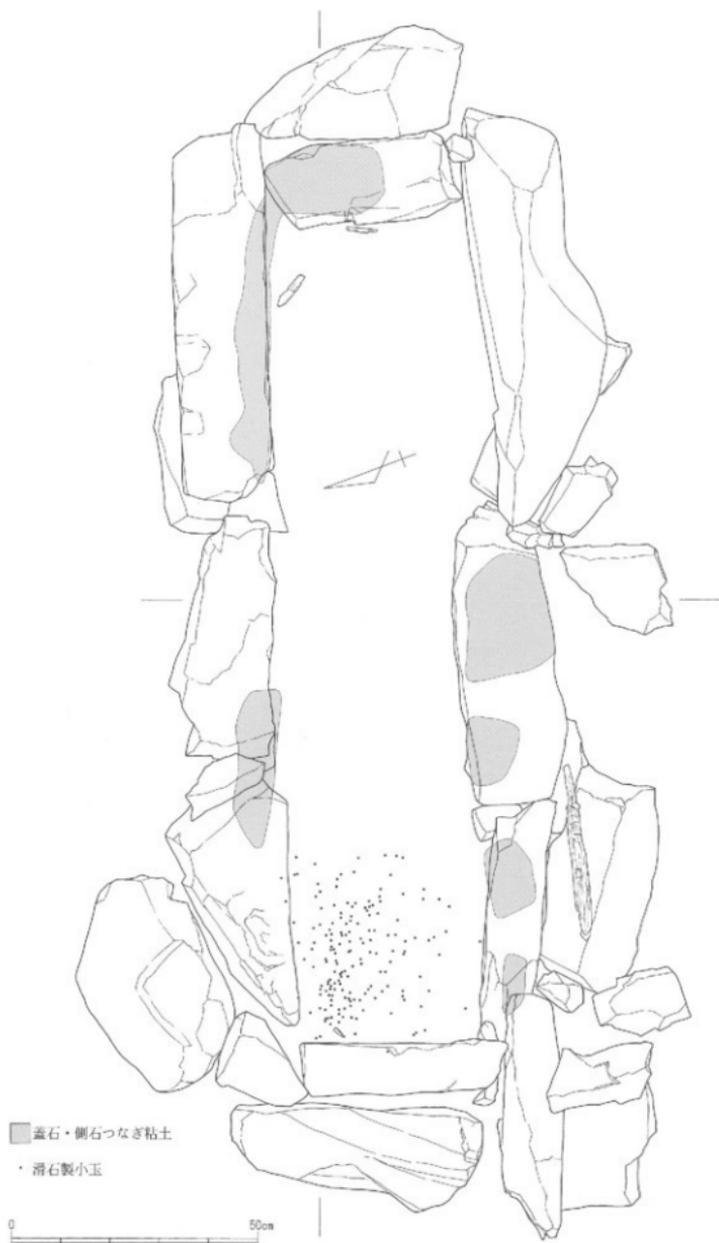
1. 7.5YR6/2 灰褐色 細砂～粗砂
2. 7.5YR6/3 に近い層 細砂～粗砂
3. 10YR6/3 に近い黄褐色 細砂～粗砂 (地山粒を微量含む)
4. 10YR5/3 に近い黄褐色 細砂～粗砂
5. 10YR6/4 に近い黄褐色 細砂～粗砂 (地山粒を少量含む)
6. 10YR5/3 に近い黄褐色 細砂～粗砂 (地山粒を多く含む)
7. 2.5Y7/3 に近い黄 粘土層～粗砂 (埋戻粘土)
8. 10YR5/2 灰黄褐色 細砂～粗砂 (5 cmまでの層を少量含む 地山層)
9. 10YR6/3 に近い黄褐色 細砂～粗砂 (地山粒を少量含む)
10. 10YR6/3 に近い黄褐色 細砂～粗砂
11. 7.5YR6/2 灰褐色 細砂～粗砂
12. 2.5Y7/3 浅黄 粗砂～中砂 (目ばり粘土粒を少量含む)

0 2m

1号墳 (SX01) 埋葬施設

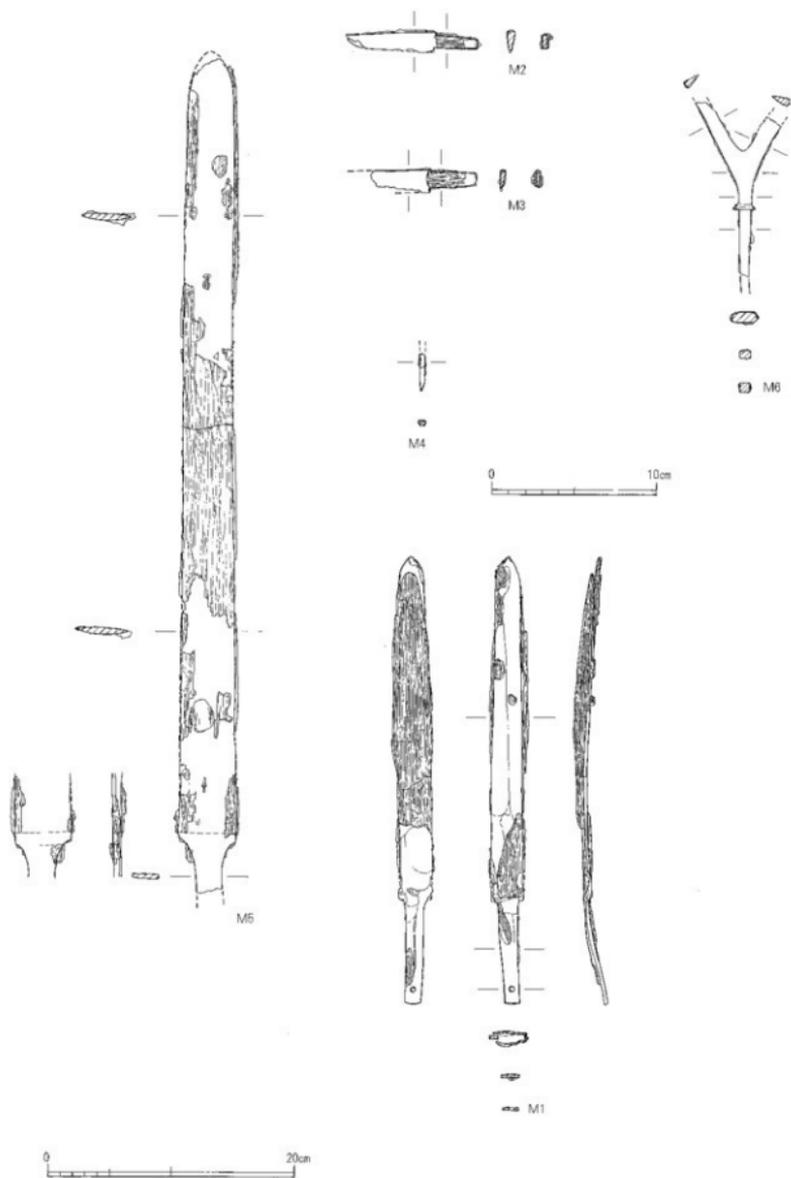


1号墳 (SX01) 石棺



1号墳 (SX01) 石棺内部





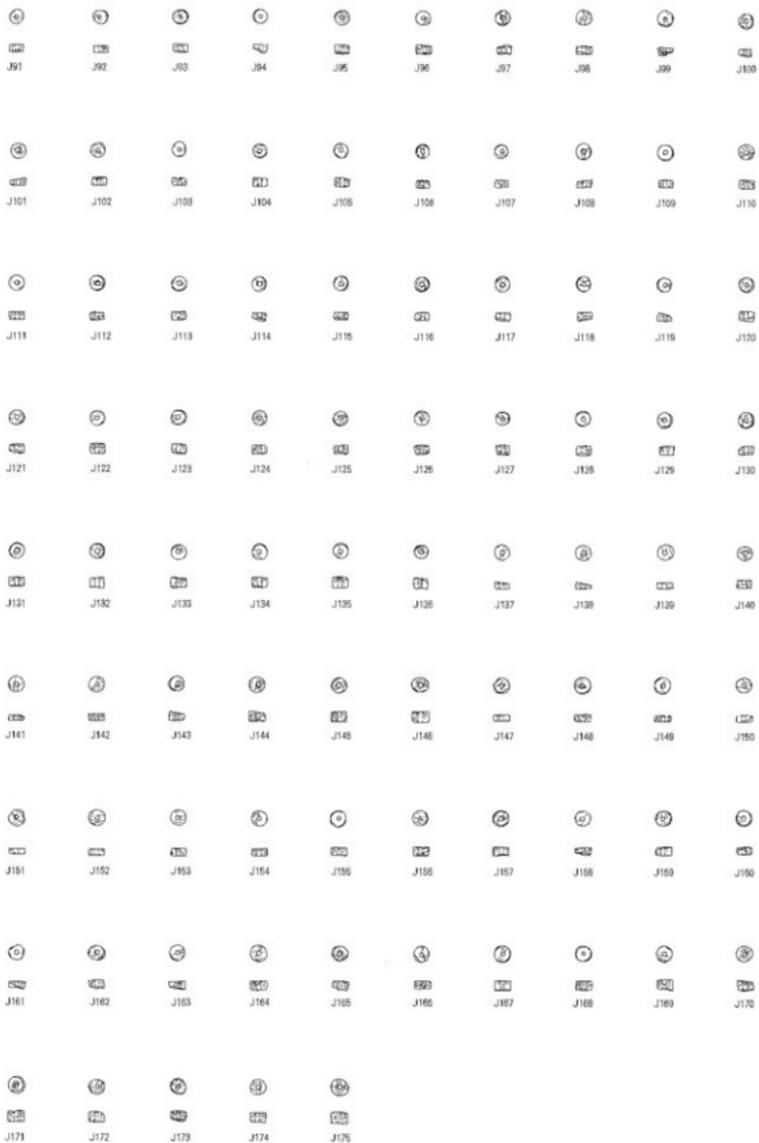
出土遺物 1 (金属器)



大月北山古墳群



出土遺物 2 (玉)



# 写 真 图 版



梶原遺跡・梅ヶ作遺跡全景（南東から）



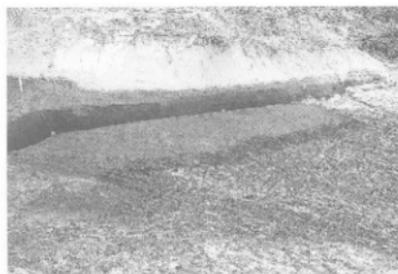
梶原遺跡全景（西から）



1区 柱穴群（南東から）



1区 柱穴群（南西から）



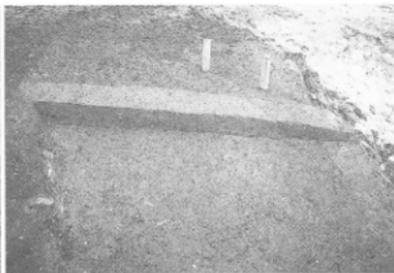
1区 北壁 (南西から)



1区 土器出土状況 (東から)



1区 SK01断面 (東から)



1区 SK02断面 (南西から)



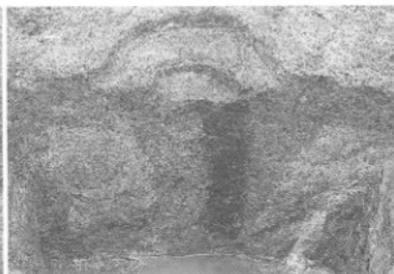
1区 SD02断面 (南から)



1区 SK04断面 (東から)



1区 P01断面 (北東から)



1区 P02断面 (北西から)



1・2区 全景（南東から）



1区 池状遺構断面（南から）



2区 溝状落込み断面（東から）



3区 西壁（南東から）



3区 西壁SD05断面（東から）



3区 西半部（東から）



3区 西半部（西から）



3区 SD03断面（北東から）



3区 西半遺構検出風景



3区 全景（西から）



3区 東半全景（西から）



SB01全景（西から）



SB01全景（東から）



3区 土器集中部A (東から)



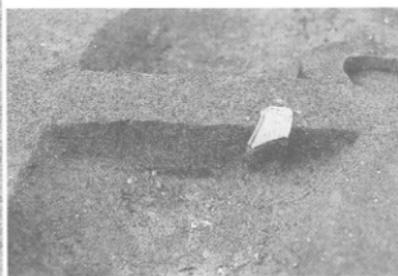
3区 土器集中部B (南から)



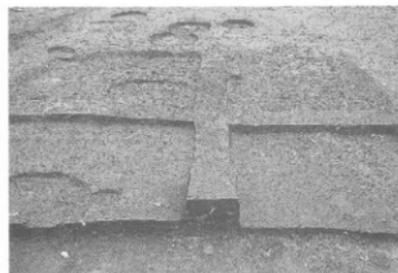
SD06検出状況（東から）



SB01周辺土層堆積状況（南東から）



SD07断面（南から）



SK05（東から）



出土集中部B検出状況（南から）



SB01・P02断面（南から）



SB01・P06断面（南から）



3区 南側溝内木材出土状況  
(南西から)



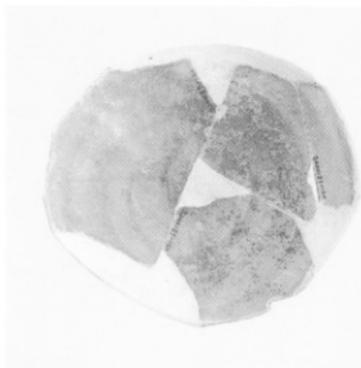
3区 南側溝内木材出土状況  
(北西から)



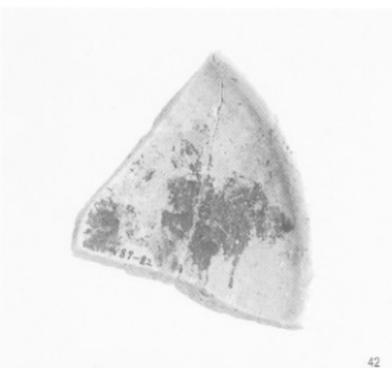
3区 南側溝内木材出土状況  
(北から)



梶原遺跡出土遺物 1



38



42



40



41



46



52



48



53



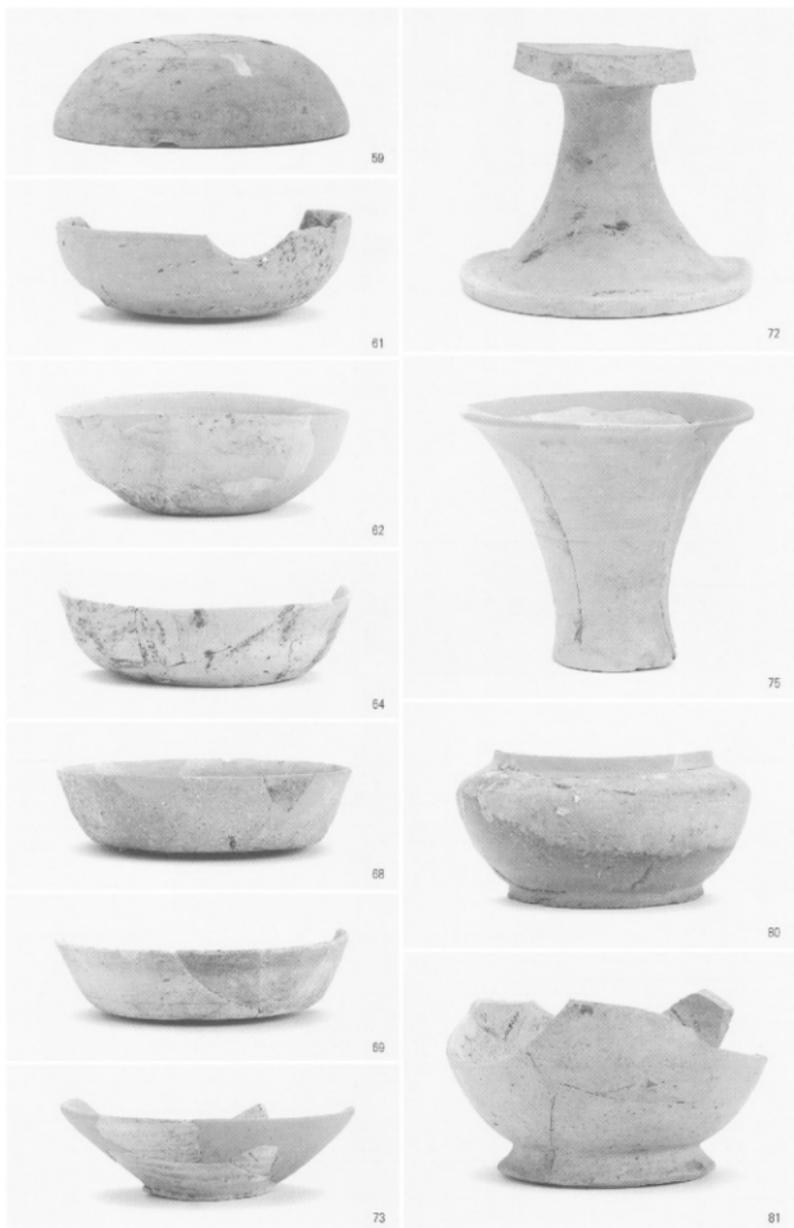
49



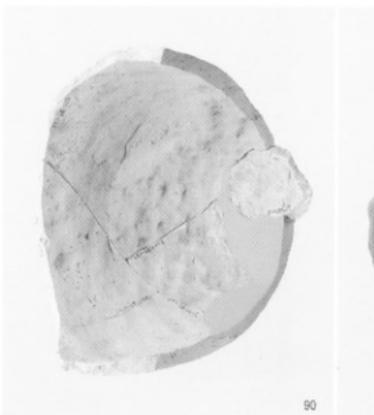
57



51



梶原遺跡出土遺物 3

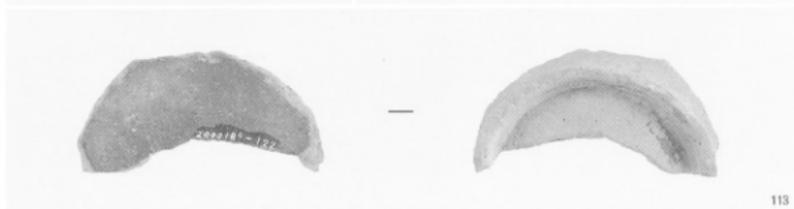




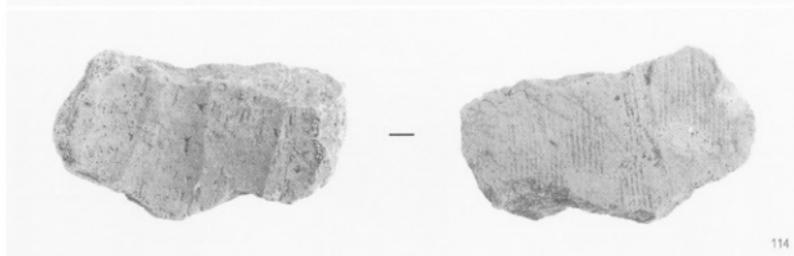
93・内面



93



113



114



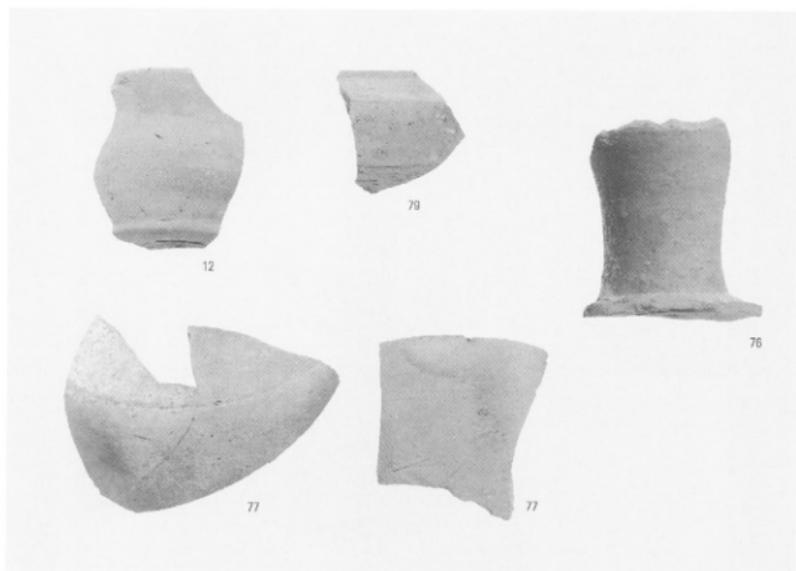
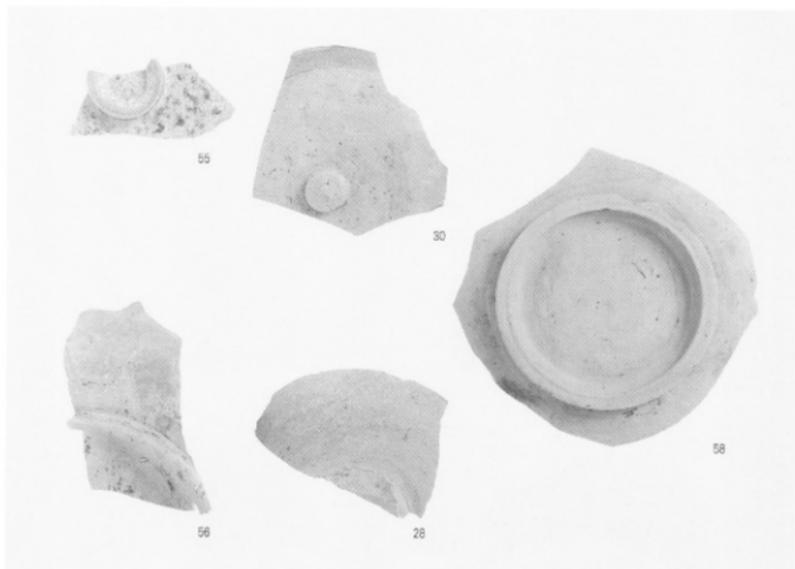
115



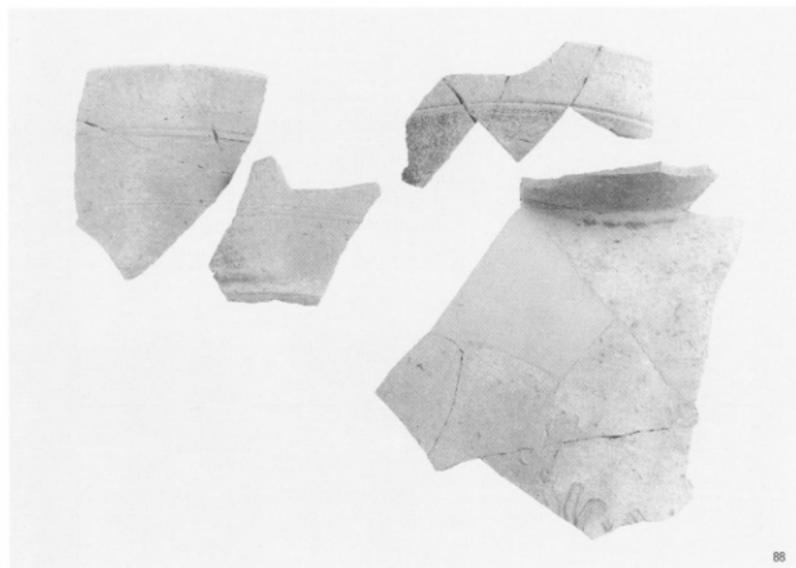
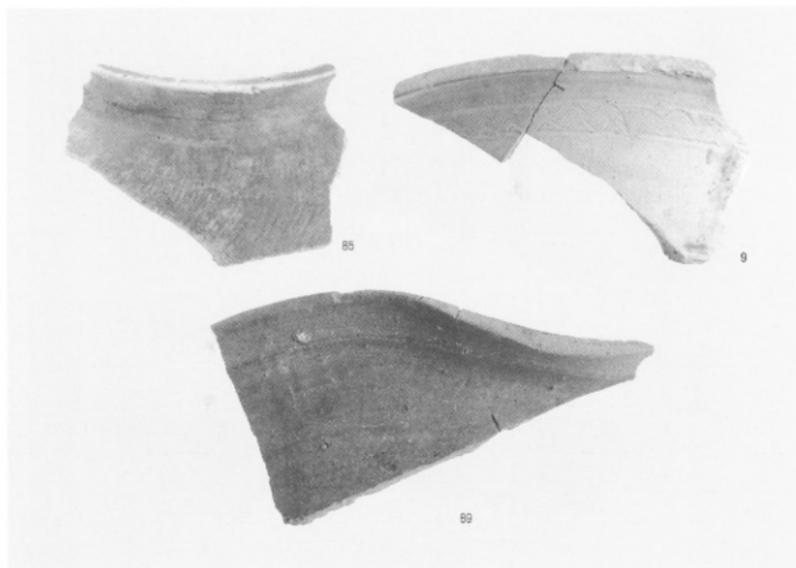
117



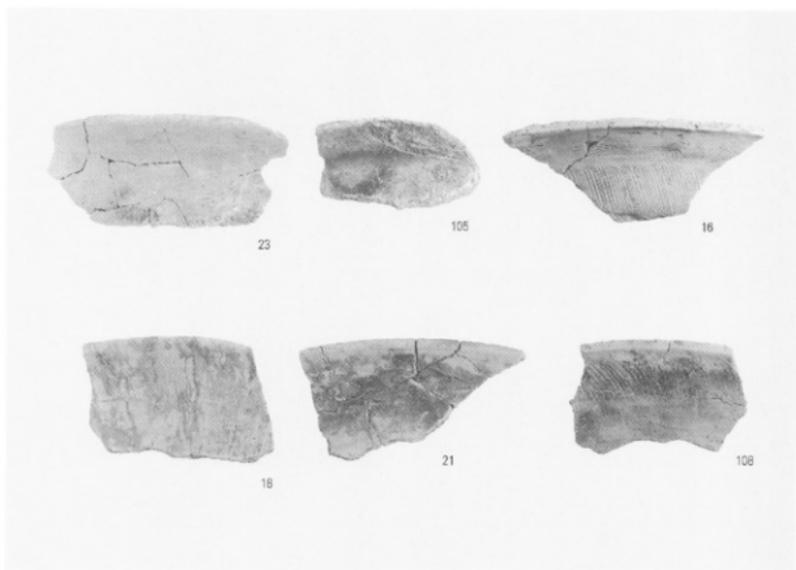
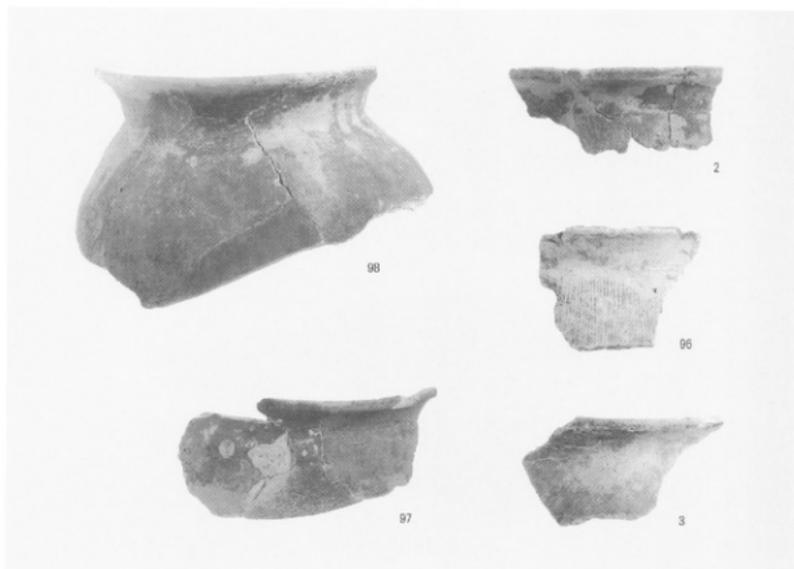
118



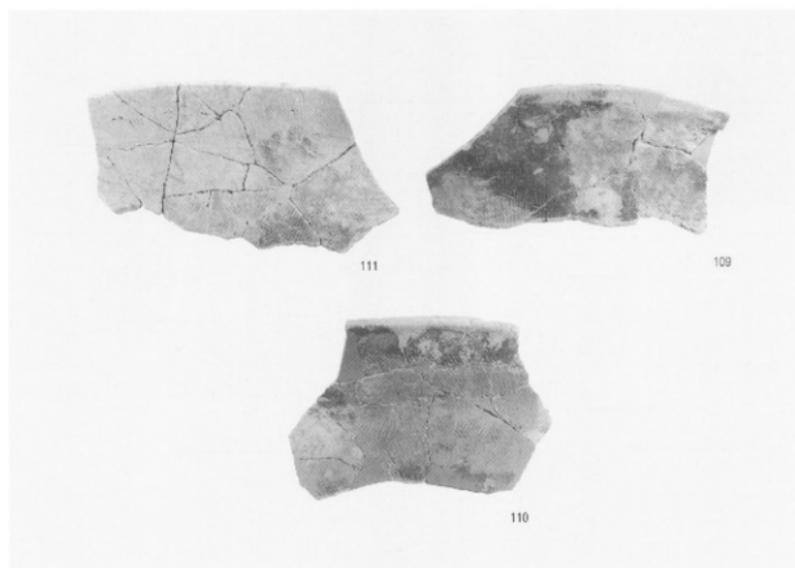
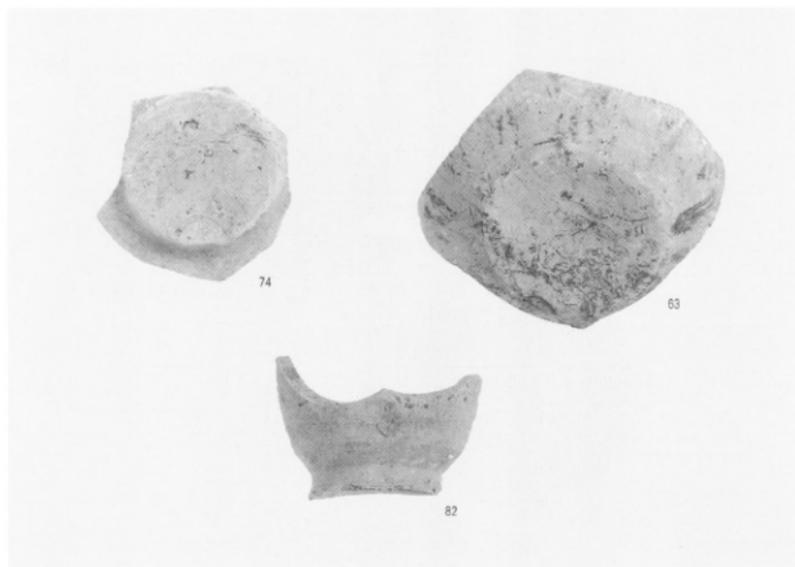
梶原遺跡出土遺物 6



梶原遺跡出土遺物 7



梶原遺跡出土遺物 8



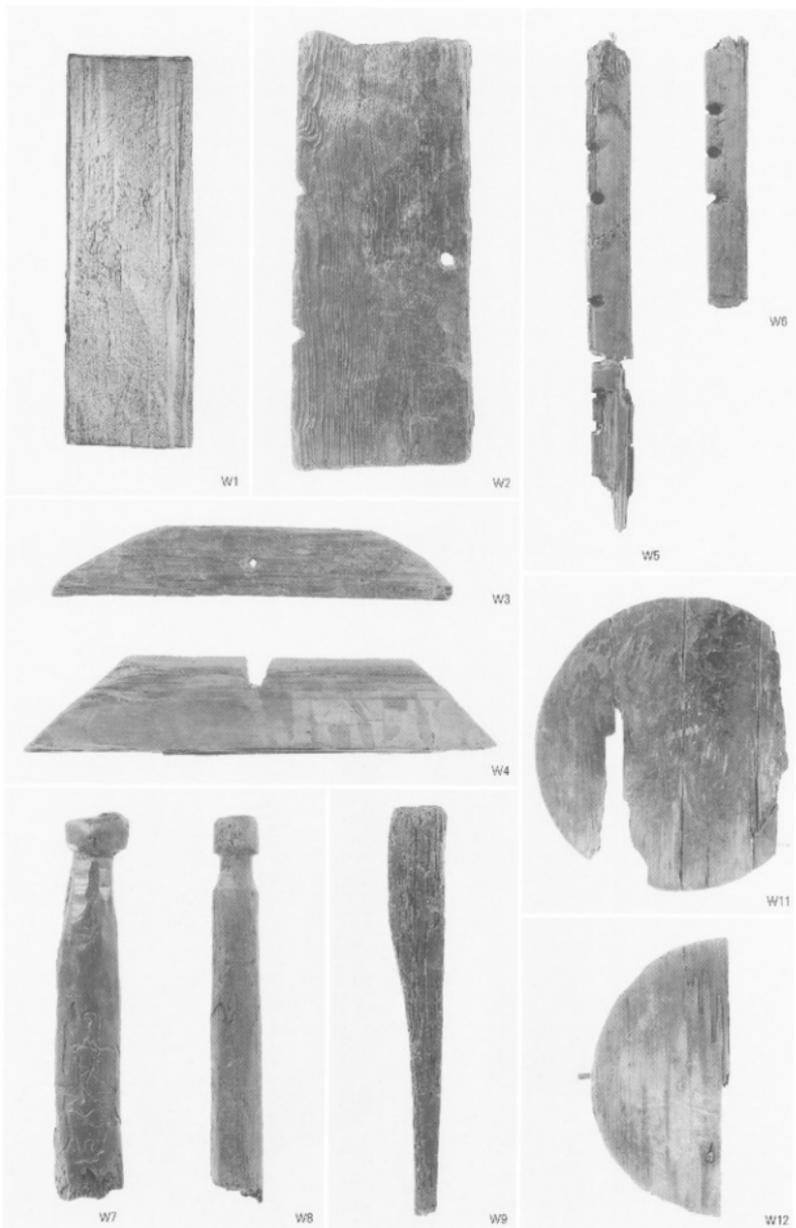
梶原遺跡出土遺物 9



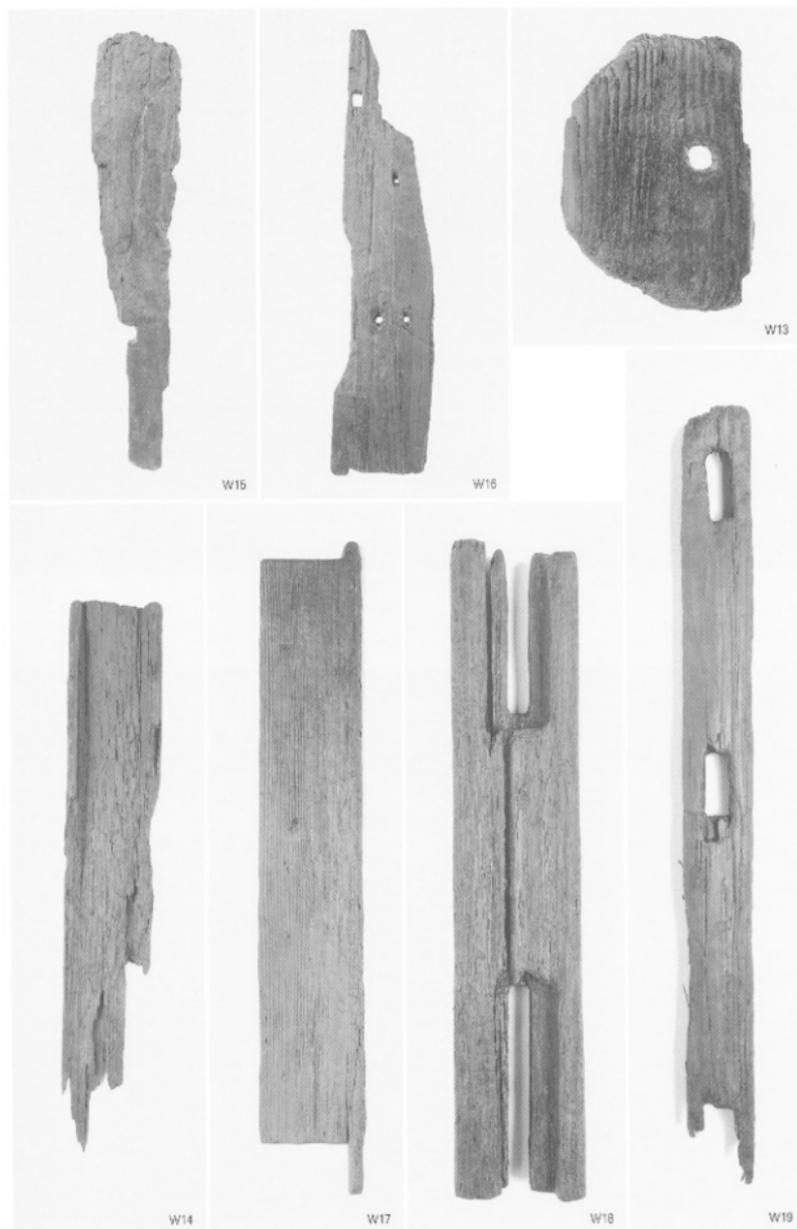
梶原遺跡出土遺物10



梶原遺跡出土遺物11



梶原遺跡出土遺物12



梶原遺跡出土遺物13



調査区全景（南から）



調査区全景（東から）



調査区北半（東から）



BS01（東から）



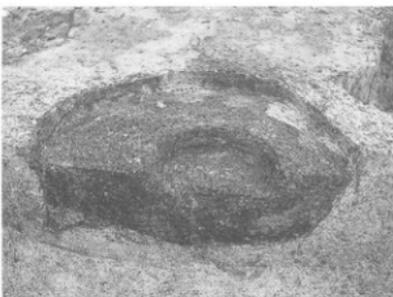
SA01 (西から)



SA01 (南から)



SA01・P01断面 (南から)



SA01・P03断面 (南から)



SB01・P01断面 (東から)



SB01・P04断面 (東から)



SB01・P06断面 (東から)



SB01・P08断面 (東から)



調査区北壁 (南西から)



SK01遺物出土状況 (北東から)



SK01完掘状況 (北西から)



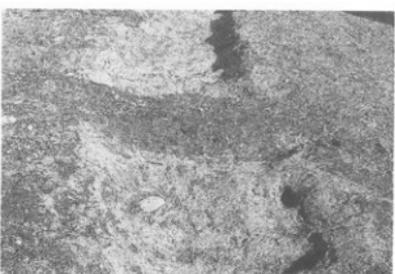
SK02断面 (北東から)



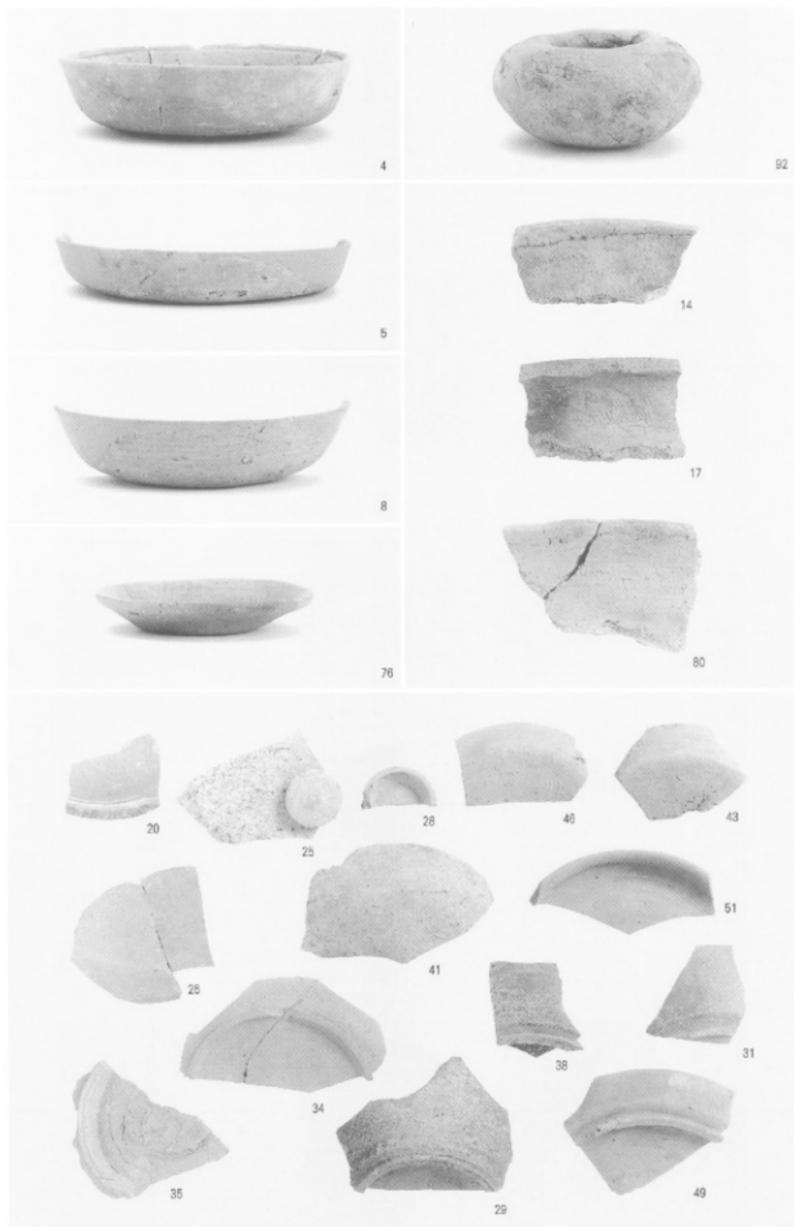
P01 (南東から)



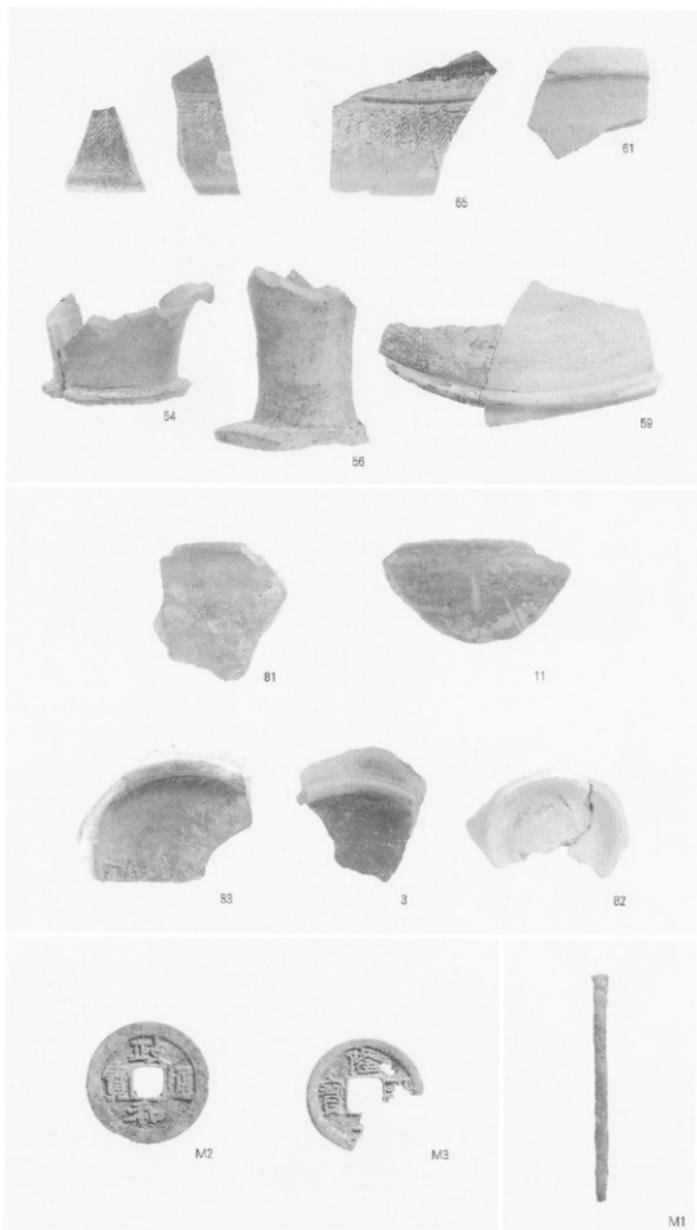
調査区南隅側 (西から)



SD01断面 (西から)



梅ヶ作遺跡出土遺物 1



梅ヶ作遺跡出土遺物 2



北山遺跡上空から東を望む



北山遺跡全景（南東から）



北山遺跡全景（北から）



北山遺跡全景（南東から）



横断セクション（東から）



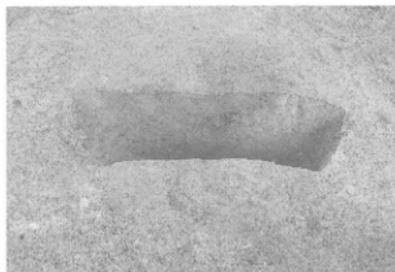
縦断セクション（南から）



SD02断面（南から）



SK02断面（南東から）



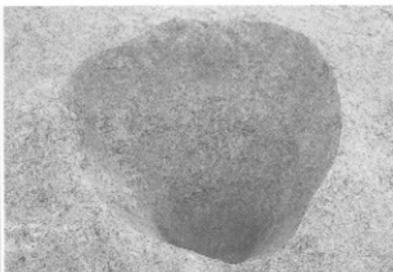
SK01検出状況（南から）



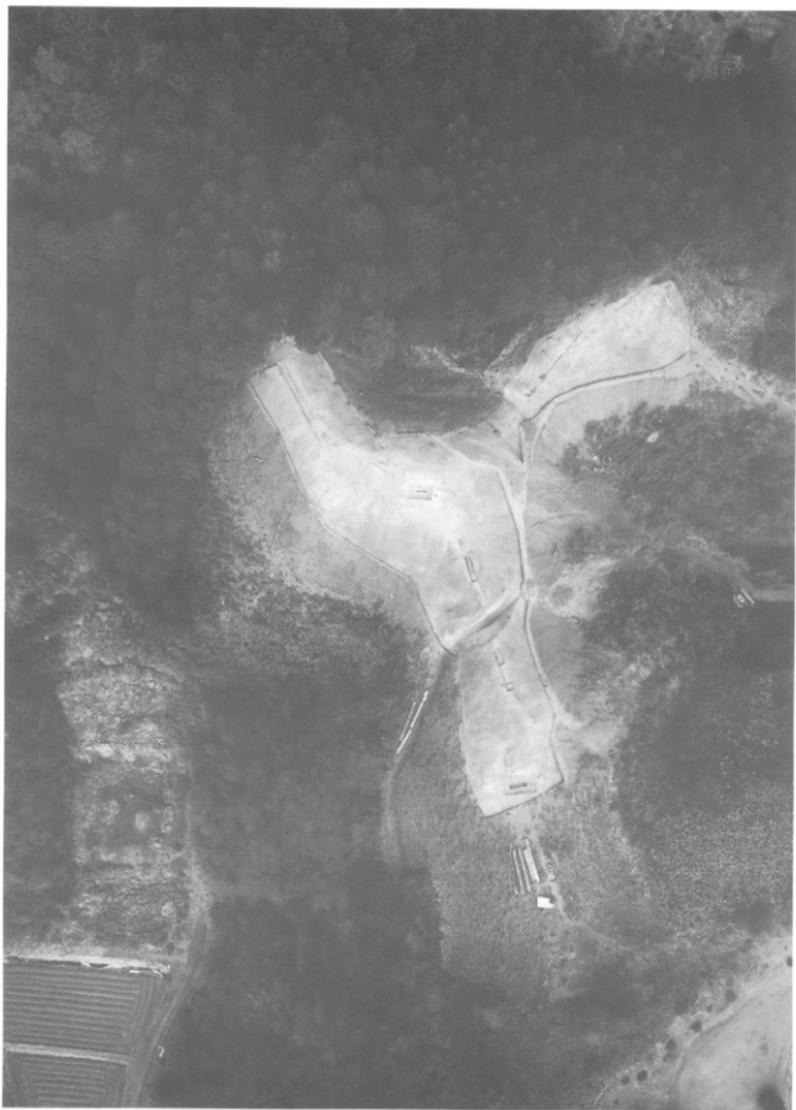
SK01断面（南から）



SK01炭化材出土状況（南から）



SK01完掘状況（南から）



大月北山古墳群全景（南上空から）



1号墳 (SX01) 全景 (南上空から)



2号墳 (SX02) 全景 (南上空から)



調査前の状況（北東から）



調査後全景（南から）



SX01埋土土層断面（南東から）



SX01石棺検出状況（西から）



SX01石棺検出状況（東から）



SX01棺外鉄器出土状況（西南から）



SX01棺身の状況（東から）



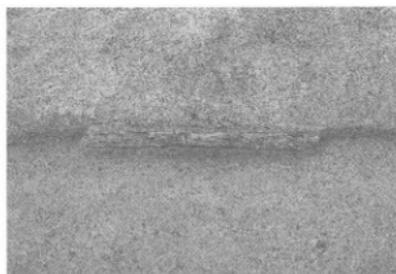
SX01棺内鉄器出土状況（東から）



SX01から東方を望む（西から）



SX01墓墳全景（西から）



SX02棺上鉄剣出土状況（南から）



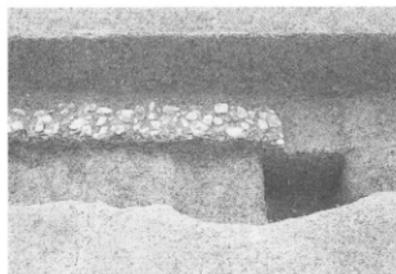
SX02全景（西から）



SX02棺内礫床の状況（西から）



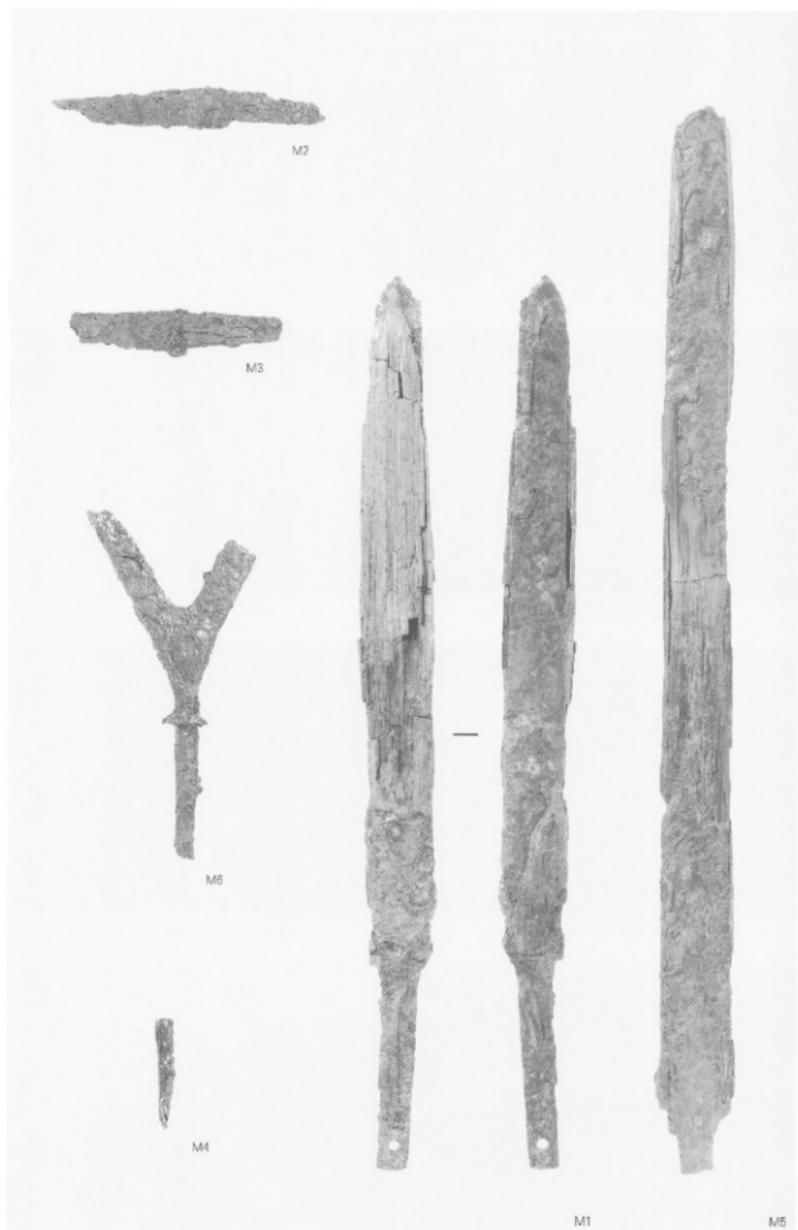
SX02頭部付近の状況（西から）



SX02礫床と小口穴の断面（北から）



峠の掘切（東から）



大月北山古墳群出土遺物 1



大月北山古墳群出土遺物 2

# 報告書抄録

ふりがな	かじわらいせき・うめがさくいせき・きたやまいせき・おおつききたやまこふんぐん								
書名	梶原遺跡・梅々作遺跡・北山遺跡・大月北山古墳群								
副書名	一般国道483号春日和田山道路事業に伴う埋蔵文化財調査報告書								
巻次									
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告								
シリーズ番号	第342冊								
編著者名	藤田 淳・岸本 一宏・平田 博幸・菱田 淳子・加速器研究所・古蹟境研究所								
編集機関	兵庫県立考古博物館								
所在地	〒675-0142 加古郡播磨町大字500 Ⅸ 079-437-5589								
発行機関	兵庫県教育委員会								
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1 Ⅸ 078-341-7711								
発行年月日	2008(平成20)年3月10日								
所収遺跡名	所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						埋蔵文化財番号
かじわらいせき 梶原遺跡	朝来市山東町 楽音寺字梶原	28225	740696	2000189	35度 18分 38秒	134度 52分 14秒	2000.8.24 ～ 2000.9.21	2,654㎡	一般国道 483号春日 和田山 道路建設 事業
うめがさくいせき 梅々作遺跡	朝来市山東町 楽音寺字梅々 作		740697	2000190	35度 18分 37秒	134度 52分 20秒	2000.10.27 ～ 2001.1.11	446㎡	
きたやまいせき 北山遺跡	朝来市山東町 楽音寺字上山		740085	2000188	35度 18分 40秒	134度 52分 15秒	2000.8.24 ～ 2000.9.21	585㎡	
おおつききたやま こふんぐん 大月北山古墳群	来市山東町大 月字北山		740094・ 740721	2001196	35度 18分 36秒	134度 51分 58秒	2002.1.7 ～ 2002.3.13	1,721㎡	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
梶原遺跡	集落跡	古墳時代・ 奈良時代	掘立柱建物・溝・ 旧河道		須恵器・土師器・弥生土器・ 木製品・木簡・金属器		小札		
梅々作遺跡	集落跡	奈良時代・ 平安時代	掘立柱建物・柱列・ 土坑		須恵器・土師器・緑釉陶器・ 黒色土器・銅銭		隆平永寶・ 政和通寶		
北山遺跡		不明	土坑(落とし穴?) ・溝		土師器小片・炭化材				
大月北山古墳群	古墳	古墳時代	古墳2基(箱式石 棺・木棺直葬)		鉄剣・滑石製小玉		赤色顔料		
要 約	梶原遺跡は、山間部の谷に位置する古墳時代初頭の旧河道と奈良時代の掘立柱建物からなる集落遺跡である。旧河道からは木製品がまとめて出土している。梅々作遺跡も梶原遺跡同様の立地であり、奈良時代の掘立柱建物等からなる小規模な集落遺跡である。北山遺跡は尾根状に立地する溝と土坑からなる遺跡である。大月北山古墳群では箱式石棺を主体とする1号墳と木棺直葬の2号墳と「道代」を調査した。								

梶原遺跡・梅ヶ作遺跡・  
北山遺跡・大月北山古墳群

一般国道483号春日和田山道路事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成20年3月10日

- 編集 兵庫県立考古博物館  
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500  
Ⅷ 079-437-5589
- 発行 兵庫県教育委員会  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号  
Ⅷ 078-341-7711 (代)
- 印刷 株式会社ソーエイ  
〒673-0898 兵庫県明石市樽屋町6-6  
Ⅷ 078-911-2918
-